

AREA CAMPUS MOGAMI

エリアキャンパスもがみ 研究年報 2024



山形大学
Yamagata University

エリアキャンパスもがみ
研究年報 2024

「エリアキャンパスもがみ研究年報 2024」発刊にあたって

エリアキャンパスもがみキャンパス長 大西 彰正

2005年3月に発足した「エリアキャンパスもがみ」は今年度末で創立20周年を迎えました。このキャンパスは、当時、高等教育機関のなかった最上地域の人々の高等教育に対する熱い思いが結実して発足し、最上8市町村と山形大学の連携により最上の人・文化・歴史・自然をそのまま利用した、全国でも珍しく先見性のある教育が行われてきました。多くの方々のこれまでの多大なご支援により、20周年が迎えられましたことに感謝申し上げます。

さて、このキャンパスでは継続して「フィールドラーニングー共生の森もがみ」の授業科目が開講されて来ました。この科目は最上地域を共育・共創の場とする、まさにこの地域ならではの高等教育を体現する代表的な科目であり、学生たちは最上地域の人々と協働して地域課題に向き合いながら、最上の自然や文化、歴史、そしてこれらを守り伝える人々の人間性を学んでいます。

「エリアキャンパスもがみ」の活動を記録したこの研究年報は、今回で第18号となりました。第1部には事業内容の概要を、第2部には「フィールドラーニングー共生の森もがみ」の受講生が作成した授業記録をまとめています。例年と同様に、今年度も、新庄市、金山町、最上町、舟形町、真室川町、大蔵村、鮭川村、戸沢村において1つのプログラムが実施され、総計で72名の学生が地域の皆さんと様々な学習を行いました。この記録には、各プログラムで活動した学生たちが、何を学び、何を感じ、何を考えたかが率直に記述され、それぞれのプログラムにおいて学生ひとり一人が若者らしい発想力と視点で主体的に課題に取り組んだ様子や、自らの課題発見・解決能力や人間性、地域社会の理解を深めたことが読み取れます。この授業で身に付けた能力と貴重な学習体験は、必ずや学生たちの長い人生の糧となることでしょう。

「エリアキャンパスもがみ」における最上8市町村と山形大学の人材育成事業は毎年着実に成長を続けています。これからも最上地域の皆様とともにこの「エリアキャンパスもがみ」での教育活動が継続して実施できますようどうか変わらぬご支援をお願い申し上げます。

目 次

「エリアキャンパスもがみ研究年報 2024」発刊にあたって エリアキャンパスもがみキャンパス長 大西彰正	2
---	---

第一部 研究年報

第1章 エリアキャンパスもがみ令和6年度事業の概要	5
第2章 初年次教育 フィールドラーニングー共生の森もがみ	8
第3章 もがみ専門科目	11

第二部 授業記録

「フィールドラーニングー共生の森もがみ」プログラム	22
フィールドラーニング担当教員コラム	76

エリアキャンパスもがみ関係者名簿	85
------------------	----

第一部 研究年報

第1章 エリアキャンパスもがみ 令和6年度事業の概要

I エリアキャンパスもがみの概要

1 はじめに

山形大学は、過疎化の進む最上広域圏全体をキャンパスに見立てて教育・研究・地域貢献を展開する「エリアキャンパスもがみ」を平成16年度に発足させた。

エリアキャンパスもがみでは、「自然と人間の共生」をキーワードに、大学と最上広域圏双方の人材育成と活性化を図ることを目的に、自然や伝統文化を活用した実践的活動について、その知識や知恵、ノウハウを、最上広域圏全体で共有・活用するだけでなく、地域の教育資源として教育活動に活用している。

特に教育活動については、本学の初年次教育の展開に活用しており、本学の学生は、社会性や課題探求能力を身につけるために、地域の講師と子供から老人までの幅広い世代の住民を交えた現地体験型授業や課外活動に参加している。

2 これまでの経緯

県の北東部に位置する最上広域圏は、南西に最上川が流れ、一部盆地を含む大部分が山岳・丘陵地帯の自然豊かで市町村毎に独自の文化を有する農山村地帯である。その一方で、8市町村のうち6町村が「過疎地域自立促進特別措置法」に基づく過疎地域に指定されている状況にある。

また、最上広域圏は大学・短大が一つもない県内唯一の広域圏であり、山形大学は、平成16年度に最上広域圏の8市町村と包括協定を締結し、広域圏全体をキャンパスとする「山形大学エリアキャンパスもがみ（以下、YAM）」を設立し、総合大学として組織的な地域貢献の挑戦を開始した。

YAMは、地域の自然や伝統文化などを教育資源として活用し、学生自らが現代社会の課題を発見し、探求し、解決するためのフィールドとして好適な場である。YAMの開設以降、最上広域圏を活性化させる様々な事業（以下、それらを総称して「もがみ活性化事業」と呼ぶ）を立ち上げ、多くの学生が課外活動として参加し、学生と住民の交流の中から、地域活性化の新たなシーズが生み出されてきた。

平成17年、大学は、YAMのこれまでの活動を振り返り、学生に社会性を持たせ、広い視野の下、課題探求能力を伸ばしていくには、柔軟性に富んだ初年次の学生を対象とした基盤教育の授業を立

てることが必須である、と考えた。

そこで、地域からの申し出もあり、地域の方を講師として、学生と住民、特に子供たちが現地で一緒に活動することができる初年次の全学生を対象とした基盤教育授業『フィールドワーカー共生の森もがみ』を平成18年度から開講することとした。

この初年次の基盤教育授業を骨格として、それに学部の専門教育の授業と課外活動を連携することによって、地域に根ざした実践的な課題探求能力を育成することになった。

なお、これらの取組については、「エリアキャンパス未来遺産創造プロジェクト」として、平成18年度文部科学省「現代的教育ニーズ取組支援プログラム（現代GP）」に採択された。



「エリアキャンパス未来遺産創造プロジェクト概念図」

3 目標

エリアキャンパスもがみでは、次の2点を目標に掲げ活動を行っている。

（1）大学生に対する教育

- ①過疎化、少子高齢化、環境などの現代社会が直面する課題発見・探求・解決能力を向上する。
- ②社会性を向上する。
- ③コミュニケーション能力を向上する。
- ④プレゼンテーション能力を向上する。
- ⑤豊かな地域社会の建設に関わる人材を輩出

する。

(2) 最上広域圏の人材育成と活性化

①未来遺産の共有・活用・発展を図る。②地域の自然や文化を子供たちに伝える。③子供たちの地元に対する誇りを抱かせる。④情報発信力を向上する。⑤豊かな地域社会の建設に関わる人材を輩出する。

4 運営体制

YAMの運営体制は、小白川キャンパス長がエリアキャンパスもがみのキャンパス長を務めており、YAMの運営の中核をなす「運営会議」は、山形大学と最上広域圏から選出された委員で構成されている。

山形大学の運営委員は、キャンパス長、教員7名、事務職員1名、で構成されており、最上広域圏の運営委員は、各市町村の教育長8名、文化団体等の代表3名で構成されている。

また、現地に最上広域圏の事務職員が常駐する「最上事務局」を設置し、YAMを円滑に運営するための、橋渡し役を担っている。

本プロジェクトの関連経費は、各事業の内容に応じて大学と各自治体で応分に負担している。また、地元講師の謝金等は市町村が負担する寄付授業となっている。

5 教育改革への有効性

(1) 教育課程、教育方法等の創意工夫

「フィールドラーニングー共生の森もがみ」は、正規の授業を地域の人材育成活動と連結させている点に特色があり、学生は、初年次の授業で地域に出て、社会性と課題探求能力を身に付け、それを大学の在籍期間を通して、専門教育と課外活動で伸ばしていくことができる。そのために、本授業では、次のような創意工夫を行っている。

- ①授業そのものが地域のニーズに基づいたもので構成され、地域の活性化に直接結びついている。
- ②現地で行う体験型学習となっている。
- ③現地にいるその道の達人が講師として直接指導に当たる。
- ④開講日を土・日曜日にすることによってたくさんの住民が参画できる。
- ⑤学生は子供の指導に関わることによって責任感を持つ。
- ⑥この授業は、「大学コンソーシアムやまがた」の単位互換協定に基づき県内の大学・短大生が履修できる。

(2) 期待できる成果等の教育改革への有効性

地域活動が活発になればなるほど、教育面での受益者は増すという相乗効果が期待できる。授業「共生の森もがみ」で、学生は世代の異なる住民と交流することによって、社会性が増し、「過疎化」「少子高齢化」「環境」などの現代的な問題群と向き合うこととなる。多くの学生にとって、このような日本が直面している現代的な問題に對峙し、それを考えることは、これからの我が国の発展のために大きな意義がある。

II 事業実施計画

1 基本的な年間スケジュール

- 4月 「フィールドラーニングー共生の森もがみ」と「もがみ活性化事業」開始
- 7月 エリアキャンパスもがみ運営会議
フィールドラーニング活動報告会
- 10月 エリアキャンパスもがみ懇談会
- 3月 もがみ担当者会議
研究年報刊行

2 令和6年度実施事業

(1) 教育活動

- ①初年次教育
「フィールドラーニングー共生の森もがみ」
8プログラム
- ②主なもがみ専門科目
 - ・人文社会科学部「公共政策・地域課題実践演習B3」金山町
 - ・地域教育文化学部「教育実践実習」新庄市
 - ・大学院教育実践研究科（教職大学院）
「学社融合の実践と課題」戸沢村

(2) もがみ活性化事業

- ①山形大学見学旅行
 - ・舟形町立舟形中学校（3年生7名）7月2日（火）
 - ・鮭川村立鮭川中学校（3年生25名）7月5日（金）
 - ・山形県立新庄南高等学校/山形県立新庄神室産業高等学校（合同）（2年生19名）7月25日（木）
 - ・新庄市立明倫学園（9年生31名）11月1日（金）
 - ・真室川町立真室川中学校（3年生5名）11月7日（木）
- ②フィールドラーニング応用編
「学生チャレンジプロジェクト」に舟形町のプログラムを履修した学生（8名）が応募し採用された。

(3) 広報事業

- ・エリアキャンパスもがみ研究年報

第2章 初年次教育

フィールドラーニングー共生の森もがみ

I 意義

本授業は、山形大学の全学共通教育である基盤教育の正規の授業として開講された。本授業の特色は、①初年次教育、②全学共通教育、③現地体験宿泊型学習、④少人数教育、⑤山形大学の理念「自然と人間の共生」の具現化、⑥自然豊かな農山村地の活用、⑦現地講師による指導、である。

初年次教育は、通常、アメリカで初年次の学生の退学を防ぐことを目的として、大学への適応を意図した教育プログラムを指す。初年次学生の退学者が少ない日本ではおかれている状況がアメリカとは大きく異なっており、そこから必然的に初年次教育はアメリカのそれと異なったプログラムとなる。

我々がこの授業を初年次教育として強く意識しているのは、本学の学生は一年目に基盤教育を受講し、その後は各学部で専門課程を受講することから、専門に入る前に学問の専門性を超えた社会に対する問題意識を持ってもらいたいということである。

混沌とした社会においては、これが問題ですよというように、はっきりとしたかたちでは現れてはくれない。急激に変化する時代にあって、我々の知恵と感受性で問題を主体的に拾い出していくしかない。それが現代の市民に求められている。社会に主体的に関わっていくためには、自分で問題を発見していく能力を養っていかねばならないのだ。この授業の教育目標は、社会の様々な事象の中から学生自らが問題を発見することにある。

山形大学は6学部からなる総合大学であるが、各学部の学生が交流する機会はそれほど多くない。学生は学生の交流の中から自らを発見していく。本授業は全学共通教育の特性を活かして、学部を越えた学生の交流を図っている。

現代の若者は体験が少なくなっている。大学教育において意図的にこの体験を増やしていくしかない。リアルな体験を通して、学生の思考を深め、社会性を涵養させ、行動的にしていくことが求められている。そこでこの体験を濃密にするために、現地体験宿泊型学習を導入した。土・日曜日の宿泊型にすることによって、平日の授業と競合することがない。また、食事や宿泊を共にすることによって、人間関係が濃密になる。

この授業は10名程度の少人数教育となっており、地域の講師の人々との交流が密になり、教育効果もあがるように設計されている。

山形大学の理念である「自然と人間の共生」を

教育に反映するために、この自然豊かな「エリアキャンパスもがみ」を活用する。しかし、同時に、そこは少子高齢化、過疎化の進む現代の課題の先進地域でもある。こうして、学生が多くのことを考える場になっている。

この授業の大きな特色は、現地の達人を講師とし、この達人を中心とした授業を地元の方と大学で設計し、実施している点にある。大学という学問に立脚した知の拠点が、学問的知を越境し、社会的、日常的、実践的な知に踏み込む教育活動でもある。このことは教育の主役を教員から学生に重心移動したことの一つの表れでもある。つまり、学生にいま必要なことは何なのかを問い詰めていけば、授業において様々な可能性を試していかなければならない時代に入ったということが考えられる。学生は現地講師を通して、コミュニティということ意識し、故郷や家庭、そして自己を再考するきっかけとなっている。

本授業のもう一つの重要な側面は、この授業を学生教育だけでなく地域活性化のために活用するという点にある。では、この大学の授業が地域活性化にどのように貢献するのであろうか。

一つには、大学がなく若者があまりいない地に学生が入るだけで活性化される。学生が入ることは授業でなくてもいいのだが、正規授業でもなければ学生が観光地でもない遠隔地に集団で入ることはまずない。

二つ目は、授業の中に子どもを含めた地域住民との交流が入っており、学生と地域住民との交流が密になる。そこには、大学生による地域の子どもの指導なども組み込まれている。

三つ目は、全国から集まった大学生の新鮮な眼によって、地域が再発見されていく。そのことによって、地域の人々に地元の誇りが醸成される。

四つ目は、学生によってまちおこしなどの具体的な提言がなされる。

この授業によって上記のような地域活性化が考えられるが、実際にはことはそううまくは運ばない。授業に参加する学生は一年生であって、学問的な専門性を身につけているわけではない。そこで、専門的な視点からの提案を求めることはほとんど不可能である。また、現実には熱意のない学生が参加することも十分に考えられる。

この授業を大学と地域の双方に利益がある形に高めていくためには、これからのたゆまぬ授業改善が必要である。特に、上記の特性を踏まえた綿密な授業設計が重要である。

II 令和6年度シラバス

【授業名】フィールドラーニング

ー共生の森もがみ

(領域：山形から考える)

【担当教員】阿部宇洋、橋爪孝夫、菊田尚人

【授業概要】

・授業の目的

自然豊かな山形県最上地域でのフィールドラーニングを通して、地域の文化や歴史、自然、環境等だけでなく、過疎化、少子高齢化等の現代日本が直面する諸問題を地域の人たちと共に学び、実践的な視点から知識を獲得し、山形から日本、世界及び過去から、現在、未来の空間及び時間軸で現象を把握する力を養う。

・授業の到達目標

この講義を履修した学生は、

- 1) 地域から与えられた課題を発見できる。
【知識・理解】
- 2) 地域で発見した課題を探求することができる。
【知識・理解】
- 3) 課題を議論することで、コミュニケーションできる。
【態度・習慣】
- 4) プレゼンテーションを行うことができる。【技能】
- 5) 行動力、社会性の基礎的な力を身につけることができる。【態度・習慣】

【授業計画】

・授業の方法

この授業は、各自が以下のプログラム(①～⑧)から1つを選択して受講する。受講の流れは以下のとおり。

- 1) オリエンテーション
 - 2) 事前学習(WebClass)
 - 3) 【1泊2日フィールドラーニング(1回目)】
 - 4) 中間学習(WebClass)
 - 5) 【1泊2日フィールドラーニング(2回目)】
 - 6) 最終レポート(WebClass)
 - 7) 活動報告会に向けた説明会・練習、活動報告ポスター作成
 - 8) 活動報告会での発表
- [プログラムリスト]
- ①(新庄市) 地域課題は宝? 「空き家」を通して暮らしを見つめ直すプログラム
 - ②(金山町) 山形くらし「なりわい体験」
 - ③(最上町) 最上町の木を使った楽器を全世界に広めよう
 - ④(舟形町) 里地里山の再生 I
 - ⑤(真室川町) 子どもの自然体験支援講座
 - ⑥(大蔵村) 知られざる大蔵村の歴史と文化、郷土の食を求めて
 - ⑦(鮭川村) 鮭川歌舞伎 地域の伝統文化の未来について考える
 - ⑧(戸沢村) 戸沢村角川地域の新たな特産物開発プロ

グラム

以上、8プログラム

・授業日程

- ①4月9日(火) プログラム説明会(プログラム選択希望調査を同時に行う。)
- ②4月10日(水) 当選者発表
- ③4月19日(金) 16:30～18:00 オリエンテーション(プログラム顔合わせ・役割決め・フィールドラーニング上の留意点について)
- ④5月11日(土)～7月7日(日) フィールドラーニング活動期間(土日2回、計4日間)、報告練習2回
- ⑤7月26日(金) 16:30～18:00 活動報告会

【学習の方法】

- 1) 安全第一を心がけ、積極的に活動に参加してください。
- 2) 専門分野の方法論や数値的なデータだけではなく、フィールドラーニング(あるく・みる・きく)で集めたデータをもとに考えるよう心がけてください。「現場で考える」「体で考える」(もちろん頭も使います)ことが合言葉!そして、自分の想像力を大事にしてください。
- ・学部の行事や、サークル活動(大会)と予定がバッティングしないように気をつけてください。必ず確認すること。
- ・メールでのお知らせや掲示板での情報がありますので、必ず確認してください。

・授業時間外学習へのアドバイス

- 1) オリエンテーションで配布される「しおり」を熟読し、内容を理解して授業に臨んでください。
- 2) オリエンテーションでの詳細説明に基づき①事前学習、②中間学習、③最終レポートに取り組んでください。また、フィールドラーニング中はこまめに記録ノートを作成するよう努めてください。
- 3) フィールドラーニング終了後、活動報告会に向けて準備を進めてください。方法については説明会を開催し、発表指導を2回行います。

【成績の評価】

・基準

- 1) 地域での活動により課題を発見し、探求により深め、活動報告会の発表により他者に伝える事が出来たかどうかを評価の基準とする。
- 2) 一連のグループ学習の中でコミュニケーション能力や主体的学習力、社会性などを発揮できる事を評価の基準とする。

3) 現地講師による活動評価、受講態度や、指示に対する達成度を数値化しそれを参考に教員が相対的に評価を実施する。

・方法

前提として、現地活動にはすべて参加していること、また最終レポート提出が基本条件。

フィールドラーニング活動への参加度 40%
 活動報告会での発表の完成度(ポスター含む)30%
 現地講師による活動評価 20%
 受講生による相互評価 10%

【学生へのメッセージ】

フィールドラーニングとは、山形大学オリジナルの学術用語で、学部専門で学ぶであろう、フィールドワークの入門編として設計されました。フィールドワークでは全て、みずからの関心で調査する事に対して、フィールドラーニングとは、提示されたプログラムを通して、課題発見などを行なう教育プログラムになっています。最上地域は、学生諸君を温かく迎え入れてくれるでしょう。是非、もがみを見て、聞いて、感じて(味わって)、「共生の森」のパワーを体全体で吸収してきてください。この講義をきっかけに、多くの学生が最上地域での課外活動に参加してきました。教員を目指す学生や、地域でのボランティア、地域活動を体験したい学生にはお勧めです。本授業は宿泊や実技体験を伴いますので、参加費が必要となります。(詳細は、プログラム説明会の際に説明します。)

【オフィスアワー】

原則として Webclass のメッセージで質問を受け付けます。対面のオフィスアワーとして「阿部研究室」(基盤教育1号館2階東側)において、予約制で受け付けます。会議や出張等で不在にすることもあるため、確実に面談したい場合は事前に Webclass のメッセージで予約をお願いします。3人の教員が担当していますが、基本的には阿部へ連絡をください。

Ⅲ 受講者数

プログラム No.	開講プログラム	受講者
1	地域課題は宝? 「空き家」を通して暮らしを見つめ直すプログラム	5人
2	山形くらし「なりわい体験」	4人
3	最上町の木を使った楽器を全世界に広めよう	8人
4	里地里山の再生 I	10人
5	子どもの自然体験活動支援講座	15人

6	知られざる大蔵村の歴史と文化、郷土の食を求めて	10人
7	鮭川歌舞伎 地域の伝統文化の未来について考える	5人
8	戸沢村角川地域の新たな特産物開発プログラム	14人

Ⅳ 活動報告会

フィールドラーニングー共生の森もがみ
 日時: 7月26日(金)16:30~
 場所: 基盤教育2号館222教室



Ⅴ 授業改善アンケート結果について

本年度に実施した授業改善アンケートについて、64人(回収率90.1%)から回答があった。

アンケート結果については、表のとおりであり、基盤共通教育科目全体の平均値と比較してみると、総じて学生の満足度が高いことが読みとれる。

表:「フィールドラーニングー共生の森もがみ」の授業改善アンケート結果と基盤教育科目全体の平均値との比較

質問項目	FW	全体平均
この授業に対する1週間あたりの平均勉強時間	90.5分	64.2分
この授業を総合的に判断して良い授業だと思うか	4.8	4.6

第3章 もがみ専門科目

I 地域教育文化学部

“新庄市での教育実習（もがみ教育実習）”

山形大学大学院教育実践研究科 江間史明

1 「もがみ教育実習」の18年の歩み

新庄市での教育実習プログラムは、学生が、実習期間中（3週間）、新庄市内に合宿して実習を行うという現地滞在型の教育実習である。「小規模から中規模までの学校を実習校に選べる」など、学校での授業実習に加えて、地域懇談会など地域と関わった教育実習を行えるという特徴を持つ。この教育実習は、新庄市教育委員会が、全面的にバックアップしている。この教育実習で学んだ学生の中から、最上地域の市町村で初任教师として第一歩を踏み出す学生が生まれている。地域と大学が連携し、地域を担う教師を育てるという取組が、具体的成果を生みつつあると言える。

この教育実習は、2006(平成18)年度にスタートし、次の表1のように実習生が参加してきた。

表1 新庄市の教育実習実施状況

年	2年基礎実習 (1週間)	3年実践実習 (3週間)	栄養実習	合計 (人)
2006	8			8
2007	18	10		28
2008	15	11		26
2009		14		14
2010		14		14
2011		12		12
2012		18		18
2013		20	2	22
2014		25	4	29
2015		20	6	26
2016		24	4	28
2017		12	6	18
2018		16	6	22
2019		21		21
2020		4		4
2021		8(3)		11
2022		7(2)		9
2023		9(2)		11

()内は、4年生の副実習で外数。

2009(平成21)年度から、基礎実習(1週間)は、附属学校での実施になり、新庄市教育実習では実施しなくなった。栄養教育実習は、2013(平成25)年度より2018(平成30)年度までの実施であった。

2020(令和2)年度は、新型コロナウイルス感染症の世界的感染に直面した。2月末からの全国一斉休校は3ヶ月に及び、大学でも授業はオンラインとなった。新庄市教育実習でも、合宿形式は、集団生活が密な環境となるため実施できなかった。2020年度は自宅から実習校に通える学生4名のみでの実施となった。

2021(令和3)年度は、新型コロナウイルスの感染再拡大への対応から、自宅と新庄市のビジネスホテルから通える学生に限っての実施となり、3年生8名(小学校)と4年生3名(中学校)の11名が実習を行った。2022(令和4)年度の教育実習は、新型コロナウイルス感染症に対応しつつ、山屋セミナーハウスを利用した。

2023(令和5)年5月には、新型コロナウイルス感染症の法的な位置付けが変わり、アフター・コロナの社会での教育実習がスタートした。2020~2022年度は、新型コロナウイルス感染症への対策から、地域懇談会を中止せざるをえなかったが、2023年度、3年ぶりに地域懇談会を再開した。

2 新庄市教育委員会からの申し入れと実習生

2024(令和6)年度の新庄市教育実習については、2024(令和6)年1月12日付で、新庄市教育委員会よりエリアキャンパスもがみのキャンパス長あてに「山形大学地域教育文化学部教育実習の新庄市での実施について(要望)」(新学発第5471号)という文書が、提出された。

要望書は、2023(令和5)年度教育実習において、「実習校においても、教育実習生を受け入れることを大きな刺激として受け止め」ていたことを述べ、「新庄市ならではの少人数指導、小中一貫教育、地域と密着した教育活動」を活かし、令和6年度も引き続き新庄市での教育実習を継続実施するよう要望していた。新庄市教委は、平成25年度より教育実習の宿泊施設である山屋セミナーハウスの使用料(一人あたり1人1030円×20泊及び冷房使用料)を予算化して、充実した教育実習ができるように、市をあげて大学との協力体制の整備を行っている。この要望書と並行し、12月13日(水曜)にもがみ実習オリエンテーションを行い、参加者を募った。その結果、2024年度の新庄市の教育実習には、3年生(小学校3名、中学校1名)と4年生(中学校6名)の合計12名が希望した。

3 2024年度 教育実習への準備と指導体制

2024（令和6）年度の新庄市の教育実習は、次のように行われた。

2024年8月27日（月）～9月17日（火）3週間

○教育実践実習A（小学校、3年:5名）

○教育実践実習B（中学校、3年:1名、4年:6名）

小学校実習校は、3校（新庄小、日新小、明倫学園前期）、中学校実習校は、4校（新庄中、日新中、明倫学園後期、萩野学園後期）であった。

なお、実習期間中の宿泊場所は、男子学生も女子学生も山屋セミナーハウスを利用した。自転車通勤を基本とするが、雨天時には、タクシーの乗り合わせによる実習校への通勤体制を整えた（今回の教育実習期間のタクシーの実利用は6日間）。

この実習への準備として、2024年8月5日（月）に「山形大学エリアキャンパスもがみ教育実習打合せ」を、新庄市民プラザで行った。江間が実習生と参加した。ここが、学生と実習校との顔合わせの場所になる。学生には、「今日から実習が始まるつもりで参加してください」と指導している。実習校からは、実習担当の教員が参加する。全体打合せでは、中西正樹学部長から、ビデオ録画で挨拶をいただいた。そのあと、学生は、自分が実習を行う学校を訪問して打合せをした。学生には、実習に臨む時の希望（実践してみたい教科等）を実習校に伝えることや、実習で授業を行う単元の候補について確認するように伝えている。教育実習前の教材研究を進めるためである。その後、宿泊場所となる山屋セミナーハウスを見学し、実習への準備をすすめた。



打ち合わせ会の様子 8月5日

教育実習期間中の指導体制については、地域教育文化学部又は教育実践研究科の教員が研究授業を参観し、事後研究会にも参加することとした。これは、山形市など村山地域の実習校と同様の指導体制であった。

4 「地域懇談会」の再開

地域懇談会は、9月6日（金）の夕方に、新庄

市民プラザを会場に開催された。懇談会には、新庄市教育委員会、各実習校の校長および保護者代表者が参加し、大学からは、江間が参加した。

地域懇談会は、新庄市教育実習の特色の一つである。学生にとっては、学校と地域の関係を直に学ぶことのできる貴重な機会である。



地域懇談会の様子 9月6日

新庄市教育委員会の津田浩教育長の挨拶のあと、「家庭や地域と学校とのつながりを大切にした活動」をテーマに、実習生、校長、保護者をまじえたグループで意見交換を行った。

新庄市内の各学校の取組みは、多彩である。実習生は、「日常的」な関わりが印象に残ったと話していた。あいさつ運動や読み聞かせに加えて、例えば、毎週火曜の午前中に、地域の方が学校に来て授業支援などに参加する。学校内の地域交流ルームでコンサートやフラワーアレンジメント教室を企画し、地域の方が学校に入ってこれるようにする、などである。これらの取組みについての校長先生の考えや、保護者の意見も出された。学生を真ん中において、学校と地域が向き合う場になっていた。江間からは、「挨拶や立ち話」といったゆるいつながりの持つ積極的な意味を「場の文化」という点からコメントした。

5 学生の受けとめと今後の課題

このように、2024年度は、アフター・コロナの通常の実習の実施となった。新庄市の実習に取り組んだ学生の感想は、後述の資料1と資料2の通りである。では、学生は、2024年度の実習をどう受け止めたのだろうか。

資料3の実習生の今回のアンケートは、回収数11（回収率92%）であった。アンケートからは、次の3点を指摘できる。

第一に、実習の前と後で、教職への意欲・関心（問2）が、「大幅に高まった」7名（73%）「少し高まった」3名（18%）「あまり変わらない」1名（9%）とする学生がいたことである。9割の

学生が教職への意欲を高めた点で、本教育実習が、高い教育効果を持ったことを指摘できる。

第二に、実習を体験して勉強になった点(問4)について、回答者の9名(82%)が、「②授業の進め方(板書・発問・展開・等々の仕方)」と「⑥個々の児童生徒の理解と受容の仕方」の両方をあげていることである。これは、実習生が、授業の基本的な進め方とあわせて、個々の児童生徒へ向き合い方を、同時に学んだことを示している。後述する学生の感想には、次の指摘があった。

今回の実習では、学習指導案で考えた活動の中でできないもの、時間を短くしたものがあつたり、時間がかからないと思っていたところがかかたりなど予想外のことが1つの授業で次々に起こりました。(略)授業のどこに重点を置くのか、どこで多様な意見が飛び交いそうか、そのために指示はどうするとわかりやすいかなどを予想しながら授業をつくっていく必要性を学びました。(資料1 田崎敦司さん)

担当教諭からの提案で、同じ学習指導案の授業を、1組と2組の2クラスで行わせていただいていた。初回の授業では児童の雰囲気や理解度に大きな差があることを実感し、同じような授業を考え、行ったことを深く反省していたことを覚えています。

(資料2 尾形洋敬さん)

2人の実習生が、児童理解をベースに授業を構成することの大切さと難しさに気づいていることを指摘できる。

第三に、回答者の9名が、「最上地域の学校で実習ができたこと」を「よかった」と回答している(問12)。7名が「保護者や地域の人を交えた懇談会」、5名が「指導主事による学習指導案等への指導」を「よかった」としている。山屋セミナーハウスについては、次の指摘があった。

「山屋セミナーハウスで共同生活をしながら、他の学生に刺激をもらって教育実習に集中できる素晴らしい環境でした。」

最後に、来年度への課題についてである。

今年度は、4年生の教育実習生が多く、実習期間中に教員採用試験の2次試験があった。実習を中断して採用試験を受けたあと、宿泊を増やし実習校に実習期間を当初より延長していただく対応をとった。教育実習に専念する点から、実習校アンケートにも実習日程を検討事項とする意見があ

った。当面は、個別対応を続けていかざるをえないと考えるが、課題として指摘しておきたい。

実習校のアンケートには、大学での事前指導は適切であるという意見の一方、次の意見もあった。「学習指導要領をきちんと読み込んでから実習に参加してほしい」「実習日誌の書き方などは、実習担当校ではなく、学生が自分で大学に問い合わせるなどしてほしい」。これらは、学生の教育実習に臨む姿勢に関わるものである。引き続き、教育実習に自分のテーマや希望をもって参加するなど、積極的に実習に臨むよう指導していきたい。なお、大学の指導体制について次の指摘もあった。「教授も遠方来ていただき丁寧に指導くださり、私たち指導教員の方も大変勉強になりました。良い機会を与えていただき感謝しております。」

充実した教育実習となるように、引き続き、新庄市教育委員会と協議をしながら進めていきたい。

資料1

日新小学校での3週間を振り返って

児童教育コース 3年 田崎敦司

私は今年度、新庄市立日新小学校にて3週間の教育実習をさせていただきました。今回の実習では、3年生を担当させていただき、教科指導、生活指導、5人の先生方(校長、教頭、主幹教諭、養護教諭、栄養教諭)からの講話、小中一貫研修、地域懇談会など多くのことを経験させていただき、学ぶことができた教育実習でした。多くの子どもたち、先生方との関わりの中で得た貴重な知見・体験を教壇に立った際に活かせるようにしていきたいです。ここからは、3週間の教育実習から学んだ中でも特に大切だと感じたことを3つ述べていきます。

1つ目は、新庄市教育委員会の取り組みの1つである小中一貫教育の良さです。今回の実習では日新小学校の先生方と一緒に日新中学校にて行われた授業研究会に参加させていただきました。日新小学校の子どもたちのほとんどは日新中学校に進学します。小学校の先生方は以前担当した子どもたちが中学校に進学してからどのように学んでいるのか、小学校のときと比べた子どもたちの変化等を見ていました。また、授業のスタイルやレベルなど先生方同士の授業づくりのヒントにもなると考えました。例えば、「中学校の外国語では本文を読む時間を多くとっているが、自分がしている外国語では中学で躓かないだろうか?」「社会の授業で膨大な資料を用いて授業をしているけ

れど、これに慣れるために今どのくらい資料を用意して授業すべきか？」など、特に初任の際は自分がしている授業を見つめ直すきっかけにも考えました。他にも、合同挨拶運動等の小中学生の交流の場も多く用意されており、日新学区全体で学校を良くしていこうという動きの一部が今回みられました。改めて、小中一貫教育の良さを知ることができた実習でした。

2つ目は、授業は終わらせるものではなく、楽しむものであるということです。今回は道徳、社会、体育、国語、算数、理科、外国語と様々な教科を経験させていただきました。しかし、すべての教科で楽しみながら授業をできておらず、「授業を終わらせる」という思考に無意識になっていました。これまで大学で模擬授業を何度かしてきましたが、書いた学習指導案の内容はほぼ終わり、発言も大学生が考えているものですから似たものになりました。指示が曖昧でも、大学生であれば何となく動いてくれます。しかしながら、今回の実習では、学習指導案で考えた活動の中でできないもの、時間を短くしたものがあつたり、時間がかからないかと思っていたところがかかたりなど予想外のことが1つの授業で次々に起こりました。さらに、大学生が考えつかないことを子どもたちは発言してくれるため未知の回答に対する掘り下げに手間取ることもありました。これらのことが積み重なり、最初の「子どもたちの多様な意見が飛び交う楽しく授業がしたい」という気持ちから「何とか終わらせなくては」という焦りに無意識に変わっていきました。

昨年の基礎実習で学習指導案の半分も終わらない先輩の授業を見た後で、自分は学習指導案の内容をすべて終わらせたので、安堵していました。しかし、終わらせることはそれほど重要ではなく、それよりも熟達した参加者としていかに楽しむことができたかが大事であることに改めて気づかされました。

授業を終わらせるのではなく楽しむために、授業のどこに重点を置くのか、どこで多様な意見が飛び交いそうか、そのために指示はどうするとわかりやすいかなどを予想しながら授業をつかっていく必要性を学びました。教師になってからは、すべての授業で丁寧に学習指導案をつくる時間もあまりないため、どれだけ引き出しを持っているかも授業中の対応ではっきりすると思いました。教師になっても、「今、授業を楽しめているだろうか？」と自問自答しながら授業していきたいです。

3つ目は、教師は周りの人たちの純粹さによって助けられているということです。指導教員の先生や多くの先生方に様々なところで気遣っていただき、支えていただいたおかげで、今回の教育実習は「楽しかった」と思って無事終わることができました。しかし、振り返ると周りの人たちは支えたり、助けたりしているつもりはなくても、自分にとっては助けになっていることが多々ありました。

自分は授業研究会の日、直前の中間休みで授業の準備をしようと考えていました。しかし、子どもたちが遊びに誘ってきて断るのが苦手であったため、準備ではなく遊びを優先しました。遊んでいるときは少し焦っていましたが、途中から純粹に楽しみ、中間休みが終わり、授業が始まってからも終始笑顔でいることができたと思います。子どもたちは純粹に遊びたかっただけかもしれませんが、しかし、彼らのおかげで自分はいつも以上に楽しみながら授業を行うことができたと思います。

他にも、学年団の先生方が授業研で用いた資料を使って私のクラスでも授業をしたいと言ったり、子どもたちが失敗し改善点が多く残ると思った授業で「楽しかった」と言ってくれたり、フルーツバスケットで「敦司先生のことが大好きな人！」と言って子どもたちが動いてくれたりなど、ただ純粹な言葉や気持ちに救われることが非常に多かったです。

日新小学校の子どもたちや先生方及び新庄市教育委員会の皆様におかれましては、この度ご多忙のところ実習生として迎え入れて下さり誠に有難うございました。教育実習生として学ぶことはもちろん、今後の教師人生で役立つことや人として成長するために必要なことを多く学ばせていただきました。心より感謝申し上げます。この3週間の新庄市教育実習は今後決して忘れることは無いと言い切れるほど濃く、かけがえのない経験でした。最上地区で、そして日新小学校で実習できてよかったです！



資料2

新庄小学校での教育実習を通して

児童教育コース3年 尾形洋敬

私は今年度、新庄小学校で3週間にわたり教育実習をさせていただきました。新庄小学校での実習を通して考えたことを以下の4つの視点からまとめます。

1つ目は多様性についてです。初めて新庄小学校に行った際、髪を染めている児童が数名いることに驚きました。高橋校長先生から、新庄小学校では多様性を重視しており、髪を染めることは児童の自由であるとの説明を受けました。また、髪色だけでなく、シャープペンシルの使用や授業を受ける教室にも制限がない、とのお話をうかがいました。このような新庄小学校の校則や校風は、私がこれまで受けてきた教育や、昨年度実習を行った学校とは大きく異なり、大変驚きました。

ただ、児童の多様性を重視する校則への変化は、教育現場における大きな改革だと感じました。児童が髪を染めるという行為一つをとっても賛否両論があると思います。しかし、新庄小学校は「学校」というイメージにとらわれず、従来の固い校則から脱却し、児童の個性を尊重する姿勢を持っていると感じます。他の学校でも、これまで「良くない」とされた行為が本当にそうなのかを問い直し、校則や校風が児童の思想や個性を制限していないかどうかを検討する必要があると思います。自分自身が教師になってから、配属先の校則、校風に疑問を持ったなら率先して改善を訴えかけたいと思いました。

2つ目は、授業についてです。新庄小学校では、授業スタイルに独自性がありました。1つ目の多様性について書いた文章でも触れましたが、例えば、算数が苦手な児童は自分の所属している教室ではない、別の教室で同じ単元の授業を受けることができる、という仕組みがあります。これにより、児童は自分の理解度に合わせた学習が可能となり、とても魅力的であると思いました。しかし、その分教師の数を増やしたり、教室を増やしたりする必要があるため、このような授業スタイルは多くの学校では行うことが出来ないと思われます。

また、新庄小学校では、児童が自ら考えて答えを導き出すことを目標にした授業が行われています。私は5年生担当でしたが、他学年(1~4年生および6年生)の算数の授業も見学させていただきました。大学の授業課題で、学習指導案作成や模擬授業などは行いましたが、新庄小学校のスタ

イルのような授業は行ってきませんでした。そのため、学習指導案作成には苦戦しましたが、回数を重ねるにつれ、少しずつ児童に考えさせる発問や工夫ができるようになったと思います。担当教諭からの提案で、同じ学習指導案の授業を、1組と2組の2クラスで行わせていただいていた。初回の授業では児童の雰囲気や理解度に大きな差があることを実感し、同じような授業を考え、行ったことを深く反省していたことを覚えています。それぞれのクラスの雰囲気にあった授業構成を考える必要があるのだということを理解しました。

また、クラス内での学力差を埋めることの難しさや、予習の進度など、考えることが多くありました。特に予習については、課題が多いと感じました。1組は教科書を事前に読んで授業を受ける児童が多い一方、2組は教科書を事前に読んで授業を受ける児童は数人しかいませんでした。授業進度は1組の方が圧倒的に早かったのですが、教科書を予習している児童は、思考が教科書通りであり、なぜそのような思考になるのかを説明できなかったり、他の思考が出来なくなったりすることが多かった。2組の児童は、授業進度は遅かったですが、様々な思考がでてきたり、自分で発見したりする児童が多くいました。本来目指すべき姿は2組のような児童であると考えられます。しかし、予習を制限することは出来ないため、1組のような児童に対して、どのような発問をすると深く考えることができるか、多くの児童の姿を見て研究していく必要があると感じました。

3つ目は、教師の姿についてです。担当教員の中嶋先生をはじめ、他学年の教師の姿を見て、叱ることの大切さを学びました。中嶋先生は児童からの信頼も厚く、優しい先生でした。児童が良くない行動をした際には頭ごなしに叱るのではなく、児童自身が「どうすれば良いのか」「どうすべきだったのか」に気付けるような叱り方をしており、大変勉強になりました。

また、職員会議での教師の姿も印象に残りました。私が出席した職員会議では、児童の目指す姿について、学年ごとに分かれて議論を行っていました。大学の講義ではあまり詳しく教わらないため、教育実習ならではの体験でした。持っている学年によって各教師の描く児童のイメージが異なっていたため、様々な意見が出ていました。私の思考と別視点の考えが沢山あり、成長に繋がったと考えています。

他にも、他学年の先生であった室谷先生にも影響を受けました。何が児童のためになるかを考え、

率先して行動する姿が印象的でした。宿泊研修の際にたくさん話をしてくださり、私の目指す教師像、生き方の方向性をはっきりさせることができました。

4つ目は児童の優しさについてです。新庄小学校では特別支援が必要な児童もクラスの中に混ざり、学級活動を共に行っていました。その際、特別支援が必要な児童とも自然に一緒に活動し、温かい雰囲気を作り上げている姿が印象的でした。

また、2つ目の授業について、で触れましたが、ある特定の授業で他の教室に行く子に対しても、相手を馬鹿にしたり非難したりすることなく接している姿が見られました。新庄小学校の児童は、違和感なく様々な人々と共に活動することを行うことができるからこそ、学校でのびのびと生活することができるのだと感じました。新庄小学校の教師が児童に対して率先して多様性の理解を促しているため、このような児童が沢山いるのだと思います。

今回のもがみ教育実習の経験を踏まえ、学校生活における、多様性を重視したより良い取り組みを研究し、将来教員として児童の成長を支援できる力をつけていきたいです。

最後になりますが、私たち実習生を受け入れ、ご指導して下さった新庄小学校の先生方、新庄市の教育委員会の方々、地域の方々、に深く感謝申し上げます。ありがとうございました。

次年度も、もがみ地域での中学校実習でお世話になります。よろしく願いいたします。

資料3

2024 もがみ実習、実習生アンケート（別紙）

教育実習に関するアンケート(もがみ教育実習)結果

以下の質問について該当する選択肢に☑してください。

1. あなたはどこで教育実践実習(以下「実践実習」)を行いましたか。

- ①小学校
- ②中学校

①
②
計

5
6
11

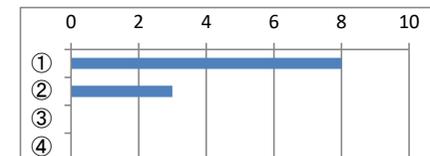


2. 実践実習体験前の教職への意欲・関心

- ①大変高い
- ②少し高い
- ③少し低い
- ④大変低い

①
②
③
④
計

8
3
0
0
11

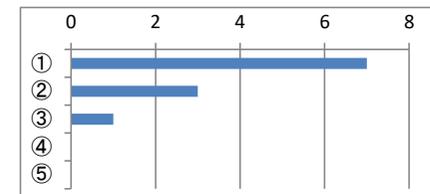


3. 教育実践実習(以下、「実践実習」)体験後の教職への意欲・関心の変化

- ①実習前より大幅に高まった。
- ②実習前より少し高まった。
- ③実習前とあまり変わらない。
- ④実習前より少し下がった。
- ⑤実習前より大幅に下がった。

①
②
③
④
⑤
計

7
3
1
0
0
11



4. 問3で④または⑤を選択した方は、その理由を記入してください。(自由記述)

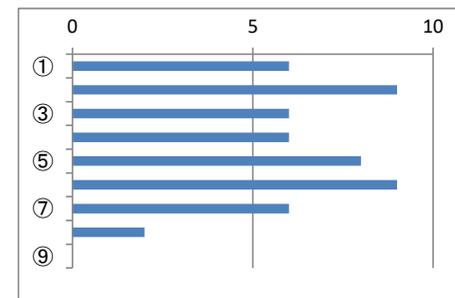
回答なし

5. 実践実習を体験してどんなところが勉強になりましたか。(複数選択可)

- ①教科・道徳の指導案の書き方
- ②授業の進め方(板書・発問・展開・等々の仕方)
- ③教材研究の方法
- ④学級経営の仕方(個性に合わせた指導の仕方・学級会やHRの進め方など)
- ⑤児童生徒集団の理解の仕方
- ⑥個々の児童生徒の理解と受容の仕方
- ⑦教具・教育機器の活用の仕方
- ⑧特別活動(児童会・生徒会活動・クラブ活動・学校行事)の指導の仕方
- ⑨その他()

①
②
③
④
⑤
⑥
⑦
⑧
⑨
計

6
9
6
6
8
9
6
2
0
52

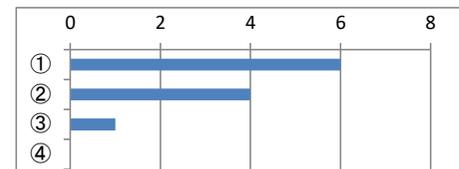


6. 実践実習体験前の大学での学習への意欲・関心

- ①大変高い
- ②少し高い
- ③少し低い
- ④大変低い

- ①
- ②
- ③
- ④
- 計

6
4
1
0
11

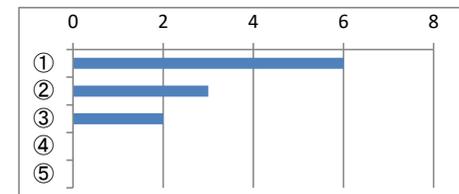


7. 実践実習体験後の大学での学習への意欲・関心の変化

- ①実習前より大幅に高まった。
- ②実習前より少し高まった。
- ③実習前とあまり変わらない。
- ④実習前より少し下がった。
- ⑤実習前より大幅に下がった。

- ①
- ②
- ③
- ④
- ⑤
- 計

6
3
2
0
0
11



8. 問7で④または⑤を選択した方は、その理由を記入してください。(自由記述)

回答なし

9. 大学の授業の効果について

・小研・特研を行った教科と、役立ったと思う授業科目名を記入してください。

・国語、道徳

・小研:英語 授業の進め方、教材分析の仕方、指導案の書き方、授業に至るまでの児童生徒の理解など、英語に限らず色々な授業で磨かれたことが総合的に活かされたと思う。

・小研:国語→初等教科法Ⅰ 算数→初等教科法Ⅰ・Ⅱ 理科→初等教科法Ⅰ

社会→初等教科法Ⅰ・Ⅱ、社会の教材分析A 道徳→道徳教育の理論と実践

体育→初等教科法

外国語活動→初等教科法、英語科教育法、英語の教材分析B、英語表現(英会話)基礎

特研:社会→初等教科法Ⅰ・Ⅱ、社会の教材分析A

・小研:社会 社会科実践演習、初等教科教育法ⅠⅡ(社会)、社会の教材分析A

・小研:道徳 道徳教育の理論と実践 特研:国語 国語科教育法、国語の教材分析A

・小研・特研:音楽 道徳

・特研:外国語 外国語

・特研:算数 初等教科教育法Ⅱ(算数)

・特研:社会 社会科実践演習

・特研:社会科 社会の教材分析A

10. その他実践実習で役立ったと思う授業科目名を記入してください。

- ・生徒指導・進路指導(3)
- ・特別支援総論(2)
- ・教材開発演習(2)
- ・道徳教育の理論と実践
- ・教職論
- ・学習心理学
- ・発達心理学
- ・学級経営
- ・教育課程編成論
- ・教育実践基礎実習(幼・小)
- ・障害児教育総論
- ・音楽
- ・特別課題演習
- ・初等教科教育法I・II(国語)

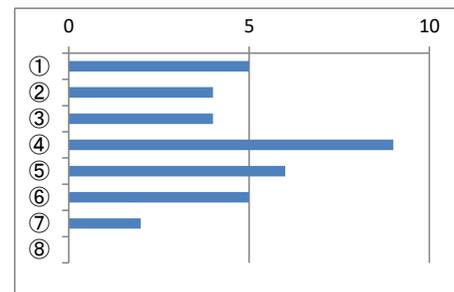
「これが役立った！」とパツと出てくるものはないが、教育相談や生徒指導・進路指導、各教科の初等教科教育法の授業は役に立ったのではないだろうか。何よりも2、3年次に経験した基礎実習、実践実習Aが役に立った。

11. それらの授業が役立ったところはどんな点ですか。(複数回答可)

- ①教科の内容の理解
- ②教科・道徳の指導案の書き方
- ③学級経営案の書き方
- ④児童生徒集団の理解の仕方
- ⑤個々の児童生徒の理解と受容の仕方
- ⑥教材研究の仕方
- ⑦授業の進め方(板書・発問・展開等々の仕方)
- ⑧その他()

- ①
- ②
- ③
- ④
- ⑤
- ⑥
- ⑦
- ⑧
- 計

5
4
4
9
6
5
2
0
35

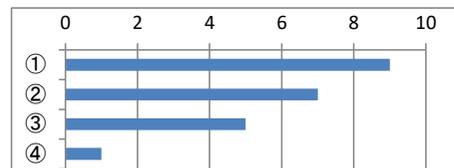


12. 「もがみ教育実習」の内容で、よかったのはどんな点ですか。(複数選択可)

- ①最上地域の学校で実習ができたこと
- ②保護者や地域の人を交えた懇談会
- ③指導主事による学習指導案等への指導
- ④その他(教員がやさしい)

- ①
- ②
- ③
- ④
- 計

9
7
5
1
22



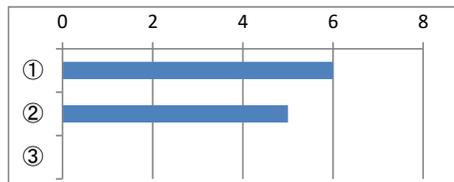
13. 「基礎実習」(2年次)の効果について

(あなたは、「基礎実習」の経験が役立ったと思いますか。)

- ①大いに役立った
- ②少し役立った
- ③あまり役立たなかった

- ①
- ②
- ③
- 計

6
5
0
11



14. 問11で答えた理由・改善して欲しい点など(自由記述)

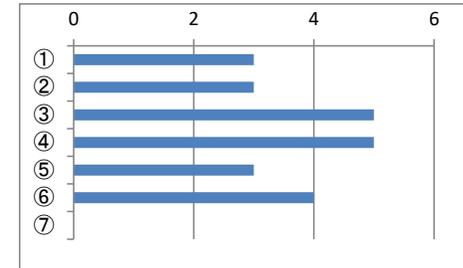
- ・基礎実習での反省点を本実習で活かせるから
- ・児童の置かれている環境や発達段階が異なりすぎていたから。
- ・基礎実習等で子どもと関わったり授業をしたりした経験があったからこそ、どのように実習生として挑んでいくべきか、考えることが出来たから。そのための準備もできたから。
- ・あまりにも附属中学校の生徒が大人すぎる。ただ初めて実習する、となると他の中学校に比べて生徒との距離感は掴みやすい。
- ・教育実習という環境で、教師として振る舞うことに慣れるために必要な経験だったと感じています。
- ・どんな点を意識して学ぶかを考えて取り組めたことや、基礎実習と比較して地域ごとの学びの違いを知ることができたから。

15. 「基礎実習」の経験で役立ったところはどんな点ですか。(複数選択可)

- ①教科・道徳の指導案の書き方
- ②学級経営案の書き方
- ③児童生徒集団の理解の仕方
- ④個々の児童生徒の理解と受容の仕方
- ⑤教材研究の仕方
- ⑥授業の進め方(板書・発問・展開・等々の仕方)
- ⑦その他()

- ①
- ②
- ③
- ④
- ⑤
- ⑥
- ⑦
- 計

3
3
5
5
3
4



16. 実践実習の前に、学習・準備しておくことについて自由にご記入ください。

・子どもたち、先生たちが温かく迎えてくれます。実習生は、「これからよろしくお願いします！楽しむぞ！」という強い気持ち、そして一人一人へのリスペクトの気持ち、出会いに感謝する気持ちを忘れずに行きましょう。

また、実習生の授業は、実習生と子どもたちがつながることができる大切な時間です。実習生は自分の授業に子どもが一生懸命取り組んでいるのを見たりとか、子どもが楽しそうに自分の授業を受けているのを見て、「うれしいなー、頑張ろう」と思えます。

子どもも、実は「実習生の授業おもしろい！」「実習生頑張ってる！」と心の中で思っていたりしてんですよ。

そういう点で、授業するということは、子どもとの信頼関係につながると思います。ぜひ、実習生のみなさんには、子どもの姿を想像して、授業づくりに精一杯取り組んでほしいと思います。

- ・該当する学習指導要領を読んでおくこと
- ・教材研究は3週間前から細かく進められたのが良かった。
- また実習校挨拶の時に、どの範囲を担当するのか細かく聞いておくのも役に立った。
- ・事前に実習校との打ち合わせがある場合、やりたい教科を決めて、実践するとしたらどの単元を行うことになりそうか質問し、自分なりに教材研究を行うべき。
- ・自分の担当学年及び教科の学習指導要領に目を通しておくことよいと思います。
- また、担当する教科や単元等が分かっている場合は、事前に学習指導案をある程度作成しておくこと授業づくりがスムーズにいくと思います。
- ・授業の構想(どのように単元を計画していきたいか、どのような工夫をしたいかなど)

・授業の中で実際に学校の先生が取り組んでいることや授業実践の良いところを見取しておくことや教育実習での授業と大学の模擬授業での子どもたちの反応の差の乖離を最小限にするために学生はより一層自分や受けて下さる学生さんが小学生になったり、相手にするつもりで授業をすると良いと考えた。

- ・もがみ実習は他の協力校より授業を多く持つことができるため、授業をしたい科目を考えておくこと良い。
- ・マスク

17. もがみ教育実習について、改善すべき点等があればご意見をお聞かせください。

- ・電動自転車がほしい。
- ・黒い自転車の中の1台がハンドルが曲がっていて危なかったため修理をお願いしたいです。

- ・特にありません。充実した教育実習でした。
- ・特にありません。山屋セミナーハウスで共同生活をしながら、他の学生に刺激をもらって教育実習に集中できる素晴らしい環境でした。
- ・特にありません。実習を幅広くサポートしていただき、ありがとうございました。

第二部 授業記録

○「フィールドラーニングー共生の森もがみ」プログラム

1. 地域課題は宝？「空き家」を通して暮らしを見つめ直す
プログラム 23
 2. 山形くらし「なりわい体験」 27
 3. 最上町の木を使った楽器を全世界に広めよう 32
 4. 里地里山の再生Ⅰ 38
 5. 子どもの自然体験活動支援講座 46
 6. 知られざる大蔵村の歴史と文化、郷土の食を求めて 56
 7. 鮭川歌舞伎 地域の伝統文化の未来について考える 63
 8. 戸沢村角川地域の新たな特産物開発プログラム 67
- フィールドラーニング担当教員コラム 76

令和6年度 山形大学フィールドラーニング授業プログラム

プログラムテーマ：地域課題は宝？「空き家」を通じて暮らしを見つめるプログラム（新庄市）

		1 回目	2 回目
		【1日目】5月25日（土）	【1日目】6月22日（土）
日 程		8:42 山形駅発 9:52 新庄駅着（公用車にてのくらしへ移動） 10:10 のくらし着 自己紹介/アイスブレイク 10:30 オリエンテーション1 「万場町のくらし」と地域活動について 11:00 万場町散策・商店街の人達と交流(1) 12:00 昼休憩 13:00 「空き家の状況」について （おむすび不動産 代表 小林純 氏） 13:30 (FW)空き家ツアー 14:30 暮らしの変化により変化したもの ① 万場町商店街「市神様」について ② 「共有・町有林」について （かなぐや 佐藤 安則 氏） 15:30 まとめ 16:00 山屋セミナーハウスへ移動 のくらし⇒山屋セミナーハウス（公用車）	8:42 山形駅発 9:52 新庄駅着（公用車にてのくらしへ移動） 10:10 のくらし着 10:20 前回の振り返り（発表）各自3分 10:45 オリエンテーション2 「にわとり・たまご」 -祭りが先か、人の商いが先か- の話 ・「市神様」の維持管理についての話 11:45 昼休憩 13:00 「祠」の修繕作業 説明 ~ 作業 ~ （かなぐや 佐藤 安則 氏） 完成・作業終了 15:30 まとめ 16:00 山屋セミナーハウスへ移動 のくらし⇒山屋セミナーハウス （公用車で移動）
		【2日目】5月26日（日） 9:40 山屋セミナーハウス出発 10:00 下万場町共有林（五日町・梅ヶ崎）集合 案内(かなぐや 佐藤 安則 氏) 山小屋で「町の共有林」について説明 杉・竹林をみてもらい散策 12:00 昼休憩 13:00 （里山作業）薪割り・きのこ棺木並べ 15:00 振り返り、休憩 15:30 終了 （活用・意見など1ヶ月間考えてみる） のくらし出発（公用車で新庄駅へ移動） 16:14 新庄駅発 17:23 山形駅着	【2日目】6月23日（日） 9:40 山屋セミナーハウス出発 10:00 のくらし集合 （振り返り）自己学習 3日間を通じて、感じたこと 12:00 昼休憩 13:00 地域の人向けに、FL を通じて感じたこと 個人レベルでできることを各自発表 14:30 まとめ 15:00 のくらし出発（公用車で新庄駅へ移動） 16:14 新庄駅発（舟形駅は16:21 発） 17:23 山形駅着
	電車降車後の移動手段	新庄駅⇄新庄市内…公用車（送迎）	新庄駅⇄新庄市内…公用車（送迎）
	宿泊料金	山屋セミナーハウス 22-3527 1泊 1,250円（夕食・朝食なし）	山屋セミナーハウス 22-3527 1泊 1,250円（夕食・朝食なし）
必要経費	各自の食事代など（朝食・昼食・夕食）	各自の食事代など（朝食・昼食・夕食）	
小 計	1,250円	1,250円	
合 計	2,500円（各自の食事代等は徴収しません。目安は10,000円程度）		
学生が準備するもの	筆記用具、雨具、作業可能な服装（長袖・長ズボン）、汗拭きタオル、洗顔用具、入浴用具、スマートフォンまたはPC	筆記用具、雨具、作業可能な服装（長袖・長ズボン）、汗拭きタオル、洗顔用具、入浴用具、スマートフォンまたはPC	
留意事項	事前に各自で新庄市万場町について事前学習。（あれば）出身地の商店街・暮らしの様子などを調べてみて、イメージをしておいてください。		

授業記録

○活動レポート「私はもがみで考えた！」

人文社会科学部 Mさん

私はこの2回のフィールドラーニングを通して、新庄市万場町商店街は住民、店主たちが主体的に一丸となって商店街の活性化や人の呼び込みのための策を講じており、住民同士の強いつながりによる協力が大きな役割を果たしていることを発見した。計三日間の体験でそのつながりの強さを感じた3点を紹介する。

万場町共有林

山は人が手をかけないとすぐに荒れてしまう。下草刈り、木の加工など体力が必須な仕事が多く、作業効率を考えると人手も必要だ。若者が適任ではあるが万場町共有林ではベテランがノウハウを生かし少ない人手で管理していた。ベテランから山の楽しさを教わり、虫や不便さだけの偏見から自然を生かした知恵や初めてに溢れた体験を子供たちや若者ができる機会づくりの必要性を感じた。

万場町商店街

まず、のくらし前の道路について考えてみる。道幅は狭く、車通りも少ない。人通りも地元の方が稀に出歩いているくらいのととても静かで落ち着いている印象だ。商店街としての活気は過去のものになってしまったのか。しかし、だからこそその利点が生きている。道向かいの商店の店先からでも声かけられ、顔の見える会話がすぐにどこでもできるのだ。

次に、告げ触れという習慣についてだ。告げ触れとは伝言ゲーム式の情報伝達術であり、万場町では地域の集会の連絡などで普段から活用されている。小さな町で人口も少ないからこそ可能な方法だろう。それは日々からの地域のつながりを深め、災害時などの緊急時にもインターネット環境に関わらず活用できる伝達網として有効である。

市神様

祠の修繕を通し市神様について学んだ。市神様は万場町の氏神で、周辺に住む氏子たちで管理保存に当たっている。かつては地域住民同士の交流イベントの中心だったが、不景気、人口減少の煽りを受け下火になっていた。現在は十日市に代わるよろず市なるイベントで賑わいの再生、神社への関心の深まりが期待される。

今回のフィールドラーニングでは手間のかかる山、小さな商店街、古ぼけた祠など一般には「町の問題」として捉えられるものでも決して悪い点ばかりではないことを知った。「だからこそ」の強み、共に解決する為自然に会話が生まれ住民主体でアクションを起こせる力がある。

商店街の方の何気ない話の中に大学生の私にとって

は新鮮な昔の話、知恵が沢山詰め込まれており学びが多かった。今の私にできることは、話や行事に「参加」し混ざる挑戦をし、その街を「知る」ことだ。

人文社会科学部 Sさん

私は、今回のフィールドワークを通して、様々な体験や調査をした。それらを4つの項目に分け、まとめていく。

1. 万場町

今回のフィールドワークの主な活動場所である万場町だが、そこで感じたことは、万場町の人々の距離の近さである。万場町に住んでいる人々は、みな知り合い以上の親密な関係であり、すれ違ったりする際にあいさつだけでなく世間話で盛り上がっていた。また、情報がすぐ町中に広がっていることが多くあり、私たちが万場町で活動していることを宣伝したわけでもないのに、近所の人からうわさを聞いて訪れてくれたり、手伝いをしてくれた。これも万場町の人々の親密な関係ゆえのものなのだろう。ほかにも万場町には、山形県に3つしかない猟銃を扱うお店があるなど、様々なお店があったり、よろず市を開催することで、盛り上がっている。これは、万場町が昔、華の万場町と呼ばれるほど栄えており、万場町でそろわないものはないほど商店があったなごりが残っているからだろう。万場町は栄えている規模は違うが、今も昔も盛り上がっている。

2. 山

第一回のフィールドワークで新庄市内の山に訪れさせてもらい、まき割りやキノコの菌床づくり、シイタケ収穫や散策をさせてもらった。そこで感じたのは、こういう活動は都会や町の中ではできない田舎ならではのことであるということである。こういうこと以外にそこでしかできないものを考え、広めていくことで田舎の発展につながると思った。

3. 空き家

今回のフィールドワークのプログラムの一番の目的である空き家だが、万場町だけで30以上あり、新庄市全体でみれば1000以上あるということを知り、想像以上に空き家は増えていることを実感した。いままで空き家なんか壊せばいいだけだと思っていたが、解体費に300万円や400万円以上かかることもあり、壊したところでその土地代は空き家があったときより高くなるなど他にも様々な費用がかかることが分かり、空き家問題はなかなかすぐに解決できるものではないものだと思った。

4. ほこら（市神様）

市神様とは、万場町が昔、遊郭などで栄えていた時にある人がつくったものである。しかし、その人が死んでから管理する人がいなくなり、整備されなくなっ

た。その後、万場町の人々全体で市神様を残そうと協力し、今も残っている。そのなかで生まれたのがよろず市である。市神様は万場町の中心なのだと思います。まとめ

今回のフィールドワークを通して、万場町のように町全体で協力していくことが発展していく際に不可欠になることが分かった。私たち大学生が空き家を減らすためにできることは、SNSなどで空き家の現状を発信し、空き家の活用方法なども知ってもらうことや今回空き家について教えてくださったゆうみさんのような実際に空き家を活用している人にお話を聞くことなどだと考える。



人文社会科学部 Iさん

私はフィールドラーニングで「万場町」を訪れ様々な体験を行った。1回目のフィールドラーニングでは万場町商店街を散策、空き家についての説明を聞き実際の空き家を訪問。また町の共有林の散策を行い薪割りやシイタケを植える活動をした。2回目は「市神様」という町の祠を綺麗にすることや、祭りの旗を地面に入れるための穴を掘る等の地域整備をした。

これらの活動をする中で感じたことや考えたことをここでは2点にまとめた。

1つ目は万場町では住民の皆さんが自分たちで地域課題を解決しようとするところだ。仙台出身の私は、地域課題は行政が主体となって解決するものだと思っていた。しかし万場町では空き家は不動産会社が買い取ることで売れる状態にしたり、地域おこしは住民が自分たちでイベント等を企画し盛り上げようとしたり、「市神様」は住民が主体となって整備したりと地域課題を自分たちで解決しようとしていた。

2つ目は何もないところから住民が主体となって作り上げるところだ。1つ目と通ずるところがあるが、やはり地域おこしは行政や市民団体が行うイメージがあった。しかし万場町は市場の再開やイベント、共有

林の開発など一人の住民がやりたいと思ったことをみんなで協力して行っていた。

このようなことは町民同士がみんな知り合いで信頼関係がある小さな町だからこそできるもので、そこがまた魅力であると感じた。「何もないからこそできることがある！！」とおっしゃっていただいた方がいらっしゃったが、この言葉は大きな施設もなく、人も減っているが、人が少ないからこそ信頼関係があり、責任をもって町を盛り上げようとする意識が住民にあるからこそ自分たちのやりたいことなどできるという意味だと考えた。

フィールドラーニングを行うなかでたくさんの万場町の方々に声をかけていただいたり、協力していただいたりした。しかしその中で気付いたことは若い世代の方々と出会わなかったことだ。

新庄市のスーパーに行ったときは小さな子どもや若い家族が多くいたのにも関わらず、万場町では出会わなかった。よって私は市内市外関わらず万場町に若い人を呼び込む必要があると考えた。人が少ないことは良い面もあるが若い人がいないと町自体がなくなってしまふ。この授業を通して地域課題は視点を変えたら魅力的で地域を盛り上げるチャンスだと分かった。だからこそこの地域課題を若い人にとって住みやすく魅力のあるものにするものにし、逆にチャンスにしなければならぬと考える。地域課題は万場町だけでなく全国に存在する。だからこそ県や市だけでなく国全体で考えていくべき問題だとこの授業を通して改めて感じた。

人文社会科学部 Aさん

今回のフィールドラーニングでは、1日目には実際に空き家を見て、課題を探した。2日目では、万場町商店街の氏子総代の所有している山に行きキノコ植、薪割を体験した。3日目は商店街の、いちがみさまを掃除し、今後行われるお祭りに向けて、旗を立てるためのポールを埋めた。4日目では、活動を通して課題をまとめ地域の方々に発表した。その中で見つけた万場町にあって地元にはない良さ、空き家についての課題についてまとめていく。

1. 万場町にあって山形市にない良さ

今回の活動ではおもに万場町を中心に活動したがその中で万場町の良さを発見した。まずは、商店街の人々と地域の深いかかわりだ。地域の中で、協力しあう関係があると感じ、関係性に温かさを感じた。ほかには、大人になっても遊び心をもっているとかんじた。商店街では、仕事に楽しみを持っていた。地域のイベントには、人が少ないからと言いつつも、意見に賛同し、楽しんでいると感じた。古民家カフェの優実さんがイベントを計画しやすいのも地域の温かさといいい関係性を待つ万場町だからできることだと思う。

2. 空き家について

万場町で実際に空き家を見て、空き家に興味を持ち、空き家を活用して、万場町がもっと発展していくためにはどのような対策があるのか考えた。

まず、空き家の定義は、移住、その他利用されていない建物である。原因としては後継者がいない問題、思い入れがあって壊せない、買い手がつかない、解体費用が350万いじょうかかるなどがある。このような理由で全国で約900万以上、山形県内で約6万2000以上、万場町だけでも30以上の空き家がある。空き家があると、町の景観を壊したり、衛生面の問題、特に雪国では倒壊の危険性が大きくなる。

私は、この空き家問題が地域を盛り上げて活性化させるチャンスだと考える。人口減少や空き家問題は、最上地域だけの問題ではなく、全国的に対策しなければいけない。しかし、空き家を活用して、人を呼べたり、地域の活性化につながればチャンスになる。空き家のリノベーション例では、万場町のゆうみさんが作った古民家カフェ「のくらし」や、蕎麦屋、シェアオフィス、ブックカフェ、民泊、旅館など様々ある。これらは、空き家の良さである古さやあじをうまく活用してリノベーションしている。訪れた「のくらし」でもゆうみさんの行動力で空き家のリノベーションだけでなく、地域のイベントや祭りに新しさとが加わり、町の賑わいがとり戻されてきていると知った。

3. まとめ

今回のフィールドラーニングを通して新庄市の問題と良さについて考えることができた。私たちにできることとしては、大学生としてこの空き家の問題を広め知ってもらおうことだと思う。ボランティアなどに積極的に参加し、様々な問題を深ぼりしていきたい。

人文社会科学部 Kさん

今回私がフィールドラーニングで訪れた万場町は、地域共同管理の意識がしっかりと反映された町であった。町内の清掃を業者に委託したり、回覧板を廃止したりする地域が増えつつある現代において、これほど活気にあふれる町があることは驚くべきことだ。そして私は、この町でのフィールドワークを経て、人と人とのつながりが地域課題発生までの過程に影響を及ぼし、発生した課題の解決のハードルを下げる力があると考えた。

フィールドワークで主な活動拠点となった「のくらし」は、かつて仕立屋だった空き家を改装して作られたもので、現在は地域住民の交流場所として活躍している。趣のある店内には仕立屋時代のミシンが桐たんす置かれており、ほかにも当時のそろばんや仕立屋のハンコ等が保管されていた。そこにはただの元空き家としてではなく、仕立屋への敬意が見られたのだ。空き家は倒壊の危険だけでなく街の景観を損ねたり、衛生を害したりす

るおそれがあるため、地域住民の嫌悪の対象になりやすい。しかし、万場町は家の元持ち主について知ることによって、空き家という地域課題への向き合い方に丁寧さと敬意が表れていると感じた。そして、その意識は実際に地域課題が発生した際に他人事だと感じさせない力となり、地域共同管理の意識へと発展しているのだと考えた。

その他にも、二回目の活動で屋外作業をした際は、多くの通行人が私たちに声をかけてくださり、中には励ましやアドバイスをくださる方もいた。また、共有林で育てた竹を地域イベントに使用したり、キノコの菌植えや収穫に人を呼ぶなど、共有林管理のモチベーション維持の工夫や、定期的な交流を設けてつながりを絶やさない工夫が見られた。他人ごとにはさせない、思わせない雰囲気作りと交流が万場町の強さであり、この町を活気づける要因だと感じた。

一方でこの町が抱える課題は、新しい人を呼び込めない点にあると考える。万場町には突出した特産品が存在せず、有名漫画家の出身地という魅力をもってしても、観光資源が豊富であるとはいえない。また、新庄市は新庄駅に新幹線と呼び込むため新庄駅の改装、および駐車場の拡大を行ったが、新幹線には人を呼び込む可能性と同時に人を流出させる危険性もはらんでいる。たとえ地域活動が盛んであれ、その意思を引き継ぐ人がいなければ町の衰退は避けられないだろう。この課題は少子化する現代においてそう珍しいものではないが、地域活動が盛んな万場町であるからこそ、その活気は守っていくべき価値があるものであると考える。



山形大学フィールドラーニング授業プログラム

プログラムテーマ：山形暮らし「なりわい体験」(金山町)

		1 回目	2 回目
日 程		<p>【1日目】6月22日(土)</p> <p>※山形-新庄間の移動は、原則電車となります。 降りる駅を明示してください。</p> <p>8:42 山形駅発</p> <p>9:52 新庄駅着(東口集合) 町バスにて金山町に移動</p> <p>10:30 金山町到着 「株式会社ここから」による街並み案内 町の強み・課題の共有</p> <p>12:00 昼食・休憩</p> <p>13:30 「株式会社ここから」 取り組み説明・意見交換</p> <p>16:00 ホテル移動 宿泊</p>	<p>【1日目】7月6日(土)</p> <p>※山形-新庄間の移動は、原則電車となります。 降りる駅を明示してください。</p> <p>8:42 山形駅発</p> <p>9:52 新庄駅着(東口集合) 町バスにて金山町に移動</p> <p>10:30 神室トラウトファーム到着 イワナ養殖業の継業説明 お仕事体験 イワナ解体・料理ワークショップ 神室ファーム昼食・休憩(ホテル) 振り返り・発表準備 ホテル近辺自由行動</p> <p>15:00 中間発表 教育委員会職員との意見交換</p> <p>16:00 終了・ホテル宿泊</p>
		<p>【2日目】6月23日(日)</p> <p>8:40 ホテル出発</p> <p>9:00 明安食学校 取り組みレクチャー(大豆ミート関連) お仕事体験</p> <p>12:00 昼食(大豆ミート)</p> <p>13:00 移動⇒中央公民館へ(町バス)</p> <p>13:30 振り返り ※時間に余裕があれば町内周遊</p> <p>15:20 金山出発(町バス)</p> <p>16:00 新庄駅到着</p> <p>16:14 新庄駅発 17:23 山形駅着</p>	<p>【2日目】7月7日(日)</p> <p>8:40 発表準備(ホテル会議室)</p> <p>12:00 昼食</p> <p>13:00 移動⇒中央公民館へ(町バス)</p> <p>13:30 発表会・意見交換会・振り返り</p> <p>15:20 金山町出発(町バス)</p> <p>16:00 新庄駅到着</p> <p>16:14 新庄駅発 17:23 山形駅着</p>
電車降車後の移動手段		移動に関してはすべて町バスを手配します。	移動に関してはすべて町バスを手配します。
必要経費	宿泊料金	シェーナスハイム金山(ホテル)へ宿泊 9,800円(税込み) 町補助あり ⇒ホテル宿泊料金5,000円を超える金額に対して、最大5,000円まで ※シングル5部屋予約済み	シェーナスハイム金山(ホテル)へ宿泊 9,800円(税込み) 町補助あり ⇒ホテル宿泊料金5,000円を超える金額に対して、最大5,000円まで ※シングル5部屋予約済み
	必要経費	街並み案内ガイド料(昼食込み)2,000円程度 夜ごはん(各自コンビニ・スーパーなどで対応) 朝ごはん(各自コンビニ・スーパーなどで対応) 昼ごはん(大豆ミート)1,500円程度	昼ごはん(イワナランチ)1,000円程度 ホテル会議室使用料3,300円(学生で割り勘) 夜ごはん(各自コンビニ・スーパーなどで対応) 朝ごはん(各自コンビニ・スーパーなどで対応) 昼ごはん(町内飲食店にて各自対応)
	小 計	8,300円程度	6,500円程度
	合 計		15,000円程度を想定

<p>学生が準備するもの</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・2日目は農作業も想定されますので、外作業ができる動きやすい恰好（半ズボン、スリッパなどはNG） ・長くつ、長袖、長ズボン、帽子 ・必要に応じて日焼け止め ・軍手、筆記用具 	<ul style="list-style-type: none"> ・1日目は養殖作業も想定されますので、外作業ができる動きやすい恰好（半ズボン、スリッパなどはNG） ※水に入るために必要な胴長は町が準備します。 ・長くつ、長袖、長ズボン、帽子 ・必要に応じて日焼け止め ・軍手、筆記用具
<p>留意事項</p>	<p>令和6年度からの新しいプログラムとなります。受け入れる側も初めての内容となります。天候などの条件に応じて、臨機応変に「良い学び」を目指して内容が修正される場合もあります。このプログラムを通して、授業以外にも金山を訪問したくなるような、人との出会いに期待します！</p>	

授業記録

○活動レポート「私はもがみで考えた！」

人文社会科学部 Iさん

私が4日間、金山町で活動をして一番感じたことは、金山町はワークライフバランスの課題や女性非正規雇用、キャリア支援不足など様々な課題に直面しているということである。本レポートでは、キャリア支援不足に重点をおいて課題を解決するための適切な施策を検討し、地域社会の持続的な発展に貢献する方法を探求します。

金山町におけるキャリア支援の不足は、地域の人材育成や産業振興に深刻な影響を与えています。若年層や中高年層を含む労働者が、自己成長やキャリア形成の機会に乏しい状況が続いており、将来に不安を抱える人々が多く存在しています。特に、地域内の中小企業や産業の多様性が不足していることから、職業選択やキャリアパス構築の幅が狭く、労働者のキャリア発展が阻害されていると言えます。この課題解決のためには、まずキャリア支援制度の充実が重要です。金山町では、教育機関や地域団体と連携し、若年層から中高年層まで幅広い層に対するキャリア支援プログラムを積極的に展開する必要があります。これにより、個々の能力や志向に合わせたキャリアプランの策定やキャリアカウンセリングの提供が実現し、労働者が自己実現と成長を図る手助けとなるでしょう。さらに、地域の産業構造の多様化がキャリア支援にも必要不可欠です。金山町が新たな産業やビジネス分野の育成に注力し、雇用機会やキャリア選択の幅を広げる取り組みが求められています。地域固有の特性や資源を活かした産業振興や地域おこしの取り組みを通じて、労働者が多様なキャリアパスを選択しやすい環境を整備することが重要です。また、キャリア支援の不足を解消するためには、地域社会全体での協働が欠かせません。地域の行政機関、企業、教育機関、労働組合などが一丸となって、キャリア支援プログラムの充実や人材育成の推進に取り組むことが必要です。地域の魅力向上や地域ブランディングを通じて、金山町が知識やスキルを持った人材を育成し、持続可能な経済発展を促進することが期待されます。金山町がキャリア支援の充実に成功すれば、労働者の能力開発や地域の活性化が促進され、地域経済の発展を支える重要な要素となるでしょう。結果として、金山町が持続可能な社会を築くための一歩として、地域全体の発展に貢献することが期待されます。

金山町におけるキャリア支援の不足に取り組むことは、地域社会の持続的な発展に向けた重要なステップです。適切な施策の実施と地域全体での協働を通じて、

労働者の働きやすい環境を整備し、キャリア形成の促進を図ることで、金山町が豊かな未来への道を切り拓くことができるでしょう。



医学部 Sさん

私たちは、金山町で「なりわい体験」をしてきました。その中で昔のままのなりわいと新しい世代に引き継がれた伝統的ななりわいの2つの形のなりわいを体験しました。

昔のままのなりわいとして、蔵の会のお母さんたちのお抹茶交流会です。山形新幹線が新庄延伸したとき、他の地域からのお客様も増えるかもしれないと考え、女性たちも金山を訪れる方に何かおもてなしをしたいと思ったそうです。その結果、金山町の女性団体、商工会女性部、連合婦人会、茶道愛好会、黎真会の皆さんが集まり、現在もなお続く、お抹茶での接待が始まりました。当時、活動資金が乏しく、役場に依頼するのも難しい状況でしたが、各団体が協力して2千円ずつ出し合い、お茶やお菓子を準備したそうです。お客様との会話を大切にし、金山町の情報を熟知するために努力していました。その後、役場の方々が町の情報をまとめた冊子を蔵史館に提供してくれるようになり、お客様がいない時にはみんなで読み合わせて勉強していたそうです。そして、その形が今でも変わらずに残って、毎週温かいおもてなしを届けています。実際に体験してみて、蔵の会のお抹茶のひとつときは本当に気の休まる居心地のいい時間でした。温かい雰囲気と心が落ち着く空間で、おもてなしの気持ちが溢れている場所でした。

新しい世代に引き継がれた伝統的ななりわいとして、いわなの養殖体験をしました。40年前、小沼さんは国の転作方針に従い田畑を開墾し、養魚場を独学で切り開いたそうです。最上水系金山川で自ら釣ったイワナとヤマメを自宅の池で親魚まで育て、その魚を採卵し、稚魚から成魚、そして再び親魚と代々守り続けてきま

した。この40年間続いたイワナやヤマメの養殖は、1年前に地域おこし協力隊の方が後継しました。かつての養殖を引き継ぎながら、新たに釣り堀を作り、観光産業にも力を入れたり、養殖場を拡大したりするなどの計画をたて、現状維持にとどまらず、さらなる発展を目指して楽しそうに活動していました。実際のいわなの養殖体験を通して印象に残っているのは、金山町に古くからある地域資源を最大限に活用していることです。ここでいう資源とは、土地、人々、自然環境、精神的な価値、歴史、伝統技術、そして先人の知恵など、すべてを指します。機械化ではなく、昔ながらの道具と知恵を使い、愛情を込めて一匹一匹を育てるなりわいの形に、温かさや金山らしさ、そして魅力を感じました。

団塊の世代が40代の働き盛りだった頃、産業は大きく発展しました。しかし、その団塊の世代が80代になり始める今、その頃、各地域を支えていた産業が衰退しつつあります。多くの地域で、その担い手がいなく、伝統技術の後継者がいないという問題が顕在化しています。現在私たちは、地域の昔ながらのなりわいを新しい形に再構築し、次の世代に継承していく必要があります。なぜなら、体験を通して、昔ながらのなりわいには、優しさ、温かさ、感謝の心、おもてなし精神が詰まっていて、それらのなりわいには豊かな心を育む素晴らしさがあるということを実感したからです。たとえ形が変わったとしても、失うことなく、未来に残していきたい、そんな町のなりわいが今、各地で消滅の危機に瀕しています。地域の資源を活かし、若い世代の私たちのアイディアでワクワクするものに育て上げて、この衰退をとめ、次の世代にも残していきたいのです。私たちは今、昔ながらのなりわいを進化させ、未来に継承していく段階にあると考えます。

工学部 Cさん

私は計4日間、金山町へと訪れ、実際に現地を見て、学び、感じたこと、そこから考えた課題をいくつか挙げる事ができました。

まず、現地で学んだことは、山形県、特に最上地区では、過疎化の進行具合が著しく、人を定住化させるどころか、人を集めること、さらにその町の名前も知られていないことが多いことである。金山町のプログラムは、履修希望者4人とサポーター1人の計5人行われ、そのうち3人が山形県民であったにもかかわらず、「金山町」をこのプログラムを知るまで聞いたことがなかったということだった。そして、金山町の人口も「町」の基準である人口5000人をつい最近切っしまい、人口減少も目に見えて分かった。

次に、この学んだことから感じたことは、町の名前が知られていないことや人口減少に歯止めがかからな

いもってもらしい理由は、町を象徴するもののインパクトが弱いという点である。金山町のアピールポイントを伺うと、金山杉やドイツの街並みの雰囲気を取り入れていること、イギリスの旅行家「イザベラ・バード」が訪れたことのある町であることといったように、ピンと来ないようなものが挙げられていた。しかしながら、金山町にも良いと感じた点は多々あります。例として、人口が少ないからこそ、町の人の暖かさや、シェーネスハイム金山周辺(有屋)のアクティビティ等の充足度が挙げられる。

そして、これらから考えられる課題は、金山町としての認知度の低さである。金山町は、確かに森や田畑が占める割合が多いかもしれないが、楽しめる場所が一切無いわけではない。山形県民でさえ知らない人もいるというその知名度の低さが原因で、人を呼びつけることができなくなっていると考え。この現状を打破するには、まず金山町の存在を知ってもらうことが第一であり、存在を知ってもらうことではじめて、金山町とはどのような町なのか、何があるのかについて知ろうとするのではないかと考える。そこから、実際に「観光客」として金山町へと訪れ、町の空気を吸ってもらうことで、その雰囲気をその身で体験してもらうことができる。

最後に考察を示す。人口減少が止まらないもってもらしい理由は、出生率の低さと死亡率の高さであると考え。都市圏への人口流出も要因の一つであると言えるが、前者が圧倒的な要因である。これは、全国的に深刻な問題とされている少子高齢化問題により、子供を産む世代を作ることができず、高齢者だけは死んでいくという負のサイクルが出来上がっているからである。これを解消しない限り、人口増減を横ばいにまで持っていったとしても、増加させることはできない。

農学部 Kさん

私は10年ほど山形県に住んでいるが、活動当初は金山町の特産品もわからなければ町の所在地がどこかもわからない状態であった。全4日の活動を経て「金山町は穴場スポットが多い」と私は思った。言い換えれば「残念ながらまだまだ知名度が低い」である。

穴場スポットとして挙げるならば、金山町役場周辺と神室エリアである。

金山町役場周辺は条例が定められているわけではないが、住宅をこげ茶色と白色のコントラストで彩られたものを建てたり、元の住宅の色を変えたりするなど、町全体が協力して街並みに力を入れている。また、建築・美術系の学生などが電飾や橋の設計などを行うことによって、景観づくりにより拍車がかかっているように感じた。もちろん日中の街並みも美しいが、夜間は幻想的な雰囲気が漂い街並みはより美しく見える。

SNS においてはとても話題になりそうな要素が至る所にある。

神室エリアはキャンプ場を中心としてキャンプ好きや金山町周辺に住む家族連れが集まるエリアである。そして、「地域おこし協力隊」の活動によって今後ますますの発展が見込まれるエリアでもある。神室トラウトファームは首都圏から移住してきた方が、先代のイワナをはじめとする魚の養殖を行っていた事業を引き継いだもので、養殖にあたって使われる場所や装置は40年ほど前から変わっていない。現在は養殖場がメインであるが釣り堀も始めようと考えているようで、今後、金山町の名所となるだろう。また、シェーネス・ハイムという宿泊施設では仙台から移住してきた協力隊の2名が、施設内の長年使われていなかったバーを Kamuro hütte という形で復活させて経営している。金山の人・自然に魅せられたおふたりは、バーを通じて金山を訪れた人に楽しく過ごしてもらいたいという想いで活動している。加えて、移住する前に仙台を中心に SNS やコミュニティ新聞の広告などを利用して宣伝をしていたようで、まだまだ足を運ぶ人は多い見込みだとのこと。

ここまで私が思う穴場スポットについて書いてきた。どちらのスポットにも共通して言えることは、外部からののはたらきかけによって金山町は魅力的な町へと進化しているということだ。このことから私は、外部からの意見を取り入れることの良さやそれらを聞き入れることや受け入れることの重要性を学んだ。また、本プログラムは「なりわい体験」であるので、街並み案内や新規事業の仕事体験など様々取り組んできた。体験をしていくうちにその事業の素晴らしさがわかると同時に、関わった方全員が外部の人に対してあたたかさを持っていると感じた。そのあたたかさを金山町を訪れた人にはぜひ体感してもらいたいと思う。



山形大学フィールドラーニング授業プログラム

プログラムテーマ：プログラム名 最上町の木を使った楽器を全世界に広めよう（最上町）

		1 回目	2 回目
日 程		【1日目】 5月18日（土） 8:42 山形駅発 9:52 新庄駅着（舟形駅は9:44着） 11:00 最上町立中央公民館 到着 講師紹介・活動紹介等 12:00 お昼休憩 13:00 ワークショップ （楽器演奏体験等） 15:45 ワークショップ終了 17:00 宿到着	【1日目】 6月29日（土） 8:42 山形駅発 9:52 新庄駅着（舟形駅は9:44着） 11:00 最上町立中央公民館 到着 ワークショップ（演奏練習等） 12:00 お昼休憩 13:00 ワークショップ 15:45 ワークショップ終了 17:00 宿到着
		【2日目】 5月19日（日） 8:30 宿出発 9:00 ワークショップ（楽器演奏等） 12:00 お昼休憩 13:00 最上町巡り 15:00 最上町出発 新庄駅へ 16:14 新庄駅発（舟形駅は16:21発） 17:23 山形駅着	【2日目】 6月30日（日） 8:30 宿出発 9:00 ワークショップ （町の楽器演奏団体と交流） 12:00 お昼休憩 13:00 活動まとめ 15:30 最上町出発 新庄駅へ 16:14 新庄駅発（舟形駅は16:21発） 17:23 山形駅着
	バス降車後の 移動手段	教育委員会による送迎	教育委員会による送迎
	宿泊料金	瀬見温泉 松葉館 6,750円（夕・朝食付） ※入湯税込み	瀬見温泉 松葉館 6,750円（夕・朝食付） ※入湯税込み
必要経費	講師謝金 1人2,000円（予定） ※参加人数によって変更あり	講師謝金 1人2,000円（予定） ※参加人数によって変更あり	
小 計	8,750円+α	8,750円+α	
合 計	17,500円+α		
学生が準備 するもの	1日目の昼食・飲み物・タオル 作業できる服装・着替え・帽子・運動靴 必要に応じて常備薬	1日目の昼食・飲み物・タオル 作業できる服装・着替え・帽子・運動靴 必要に応じて常備薬	
留意事項			

授業記録

○活動レポート「私はもがみで考えた！」

人文社会科学部 0さん

私はフィールドラーニングで失敗を恐れず、挑戦することの大切さを学んだ。

フィールドラーニングでは主に艶やかな音色を奏でる楽器を演奏したり、最上町の美しい自然を感じることが出来る観光場所を訪れたりした。最上町で訪れた封人の家や大赤松の跡地などは歴史的背景も多く存在し、町人との物理的だけでなく精神的な強い関わりやつながりを感じた。

楽器の演奏についてだが、その楽器は最上町に数年前まで存在した日本一の大きさを誇っていたアカマツから作られたものだ。数年前に枯死と診断され伐採されたアカマツだったが、その木材を活かして作られて楽器は、町人たちの思いが楽器に込められていると感じた。そのアカマツのハープ(私たちは「もがみハープ」と名付けたハープ)を演奏するのがフィールドラーニングのメインの活動だった。

私は今まで学校の活動でしか楽器に触れたことがなく、上手に演奏することができるか、失敗して周りの足を引っ張ってしてしまうのではないかと、という不安で緊張していた。

フィールドラーニング初日、私たちは簡単な楽器での活動導入から始まった。その後、もがみハープの演奏を始める前に講師の泉谷先生は、私たちに「演奏することを、失敗することを恐れないこと」を教えてくれた。その中で、「演奏者は、上手で綺麗な音色を観客に届けようとしているが、観客はそんなことは気にしてなく、観客は演奏している人を見ている。楽しく演奏することこそが音を最も美しくする。」という話が、私の音楽に対しての印象を大きく変えた。失敗を恐れなくていい、という考え方のおかげで、私は音楽をより楽しめるようになり、初日の活動では、もがみハープの美しい音色を十分に楽しむことができたと思う。

2日目の活動では、地域の演奏している人たちとの交流を行い、演奏する上での心構えができたと思う。そして、発表に向けての準備をした。発表する際に演奏を行うことで、もがみハープの魅力をより伝えることができると思った私たちは発表の終わりに演奏を行うことにした。その曲を決めたり、もがみハープ用に楽譜を作ったりするのに難儀したが、協力し意見を交換することで、なんとか作ることが出来た。私たちは、演奏をする上で、仲間たちと心を通わせて失敗を恐れずに音を楽しむということが重要だと理解し、練習を重ねてより良い演奏を目指して練習した。その結果、先生たちから良い評価を得ることができた。このこと

は、今回の活動の中で最も嬉しく、達成感を感じた瞬間だったと思う。

このフィールドラーニングで私は、失敗を恐れずに挑戦し続ける努力をすることが重要だと感じた。このことは、楽器の演奏だけでなく、最上町の取り組みにも言えることだろう。最上町の人々は地域の特産品や観光資源などをもとに、新たな取り組み・挑戦を行っている。少子高齢化などの様々な問題を抱える中で、より良い未来を目指して、日々挑戦し続けているのだ。最上町を実際に訪れ、最上町を肌で感じたからこそ、わかったことだと思う。私たちはフィールドラーニングで感じた最上町の魅力を、素晴らしさを発表伝えなければならないのだ。



人文社会科学部 Iさん

1. はじめに

今回のフィールドワークを通して、私たちは最上町の魅力について学びを深めた。中でも、最上町で採取されたアカマツという木を使って作られたもがみハープという楽器を演奏した。そこから得られた魅力や素晴らしさについて少し紹介したいと思う。また、その活動以外にもたくさんの自然や文化に触れたので、それらの活動から学んだ経験も紹介しつつ、楽器の魅力と結びつけて考えたいと思う。

2. 大アカマツの歴史と最上町の魅力

もがみハープは、日本一の幹回りを誇るアカマツという木を使って作られた素晴らしい音色を奏でる楽器で、誰でも簡単に演奏できるというメリットがある。アカマツは東アジアを中心に広く分布している常緑針葉樹であり、日本国内において北海道南部から九州南部にかけて自生している。その中でも最上町に存在した東法田のアカマツは、その巨大な大きさから大アカマツとよばれており、樹周は8.56メートル、標高は26メートル(平成20年)、樹齢は推定600年と素晴らしい歴史を誇る木として知られていた。しかし、樹勢は年々衰弱し、平成30年5月ごろには葉の急激な変色が樹冠上部まで一気に進行した。早急に大枝の切除や薬剤散布等の

対策が講じられていたが、樹齢回復には至らず、その後、枯死状態にあるとの診断がなされた。(令和元年8月) 枯死の原因特定はできないが日照不足や根の傷み、欠損箇所からの腐朽菌侵入といった様々な要因が重なり枯死に至ったと専門家は推断した。そして令和3年6月10日、地域の人々に別れを惜しまれながら伐採工事が決行された。しかし、令和四年に(日本一の大アカマツ跡地植樹祭)が行われ、二代目アカマツが誕生した。この歴史あるアカマツを使ったハーブの魅力を広めるためには、人や自然、観光などと結び付けて考えることが一番の近道だと私は考える。地域の有名な観光スポットで演奏会を開き、人々が集まりやすい高原や温泉街などの自然、文化と結び付けて考えるのも一つの策として挙げられる。地域の人々が一体となって楽器の魅力や町の魅力を広める工夫を行うべきだ。

3. 結論

最上町を自分の肌で体感したことで様々な魅力について考え、それをたくさんの人に知ってもらうための提案や策について考えを深めることが出来て良かった。まずは地域の同士で話し合いをし、そこから人や自然、文化や観光などと結び付けて考えることで、一人でも多くの人にたくさんの良さを知ってもらえる機会を作ることが出来るのではないかとわたしは考える。

地域教育文化学部 Kさん

私はこの2回、計4日間のフィールドワークを通して、ここでしかできない経験というものを体験することができました。

私がこのテーマを選択し参加したいと思ったのは、自分の新たな音楽経験の獲得を見込んだからでした。今まで積み重ねてきた経験を活かしつつ、新たな経験をしてみたいと考えていました。

今回のこのフィールドワークは、まず、最上町のテーマの主体である、最上町のオオアカマツで作られた楽器と、その最上町について知るところから始まりました。はじめに行った事前調査では、班の人と手分けをして最上町の現状や楽器について調査を行いました。それぞれ何に関して調査を行うかを話し合った時には、自分では思いつけなかった視点が話し合いの中で生まれ、自分にとっても新たな考え方を身に着ける1つとなりました。実際に現地に初めて訪れた1回目は、楽器に触れてその魅力を体感して試みるのが中心でした。初めて訪れた場所ということもあり、目に入るものほとんど全てが物珍しく映りましたが、その中でも特に、最上町の楽器は特徴的だと感じたのが第一印象でした。誰でも演奏できて楽しめる、そんな楽器の美しい音色に、私は魅力を感じました。楽器の背景や最上の特性との結びつきについて知ったうえで実際に演奏を経験し、最上町の景勝地を訪れて現地の方からお話を聞いて

最上について理解することで、より楽器に思いを寄せることができました。また、泉谷先生から教えていただいた演奏のコツは、今までの音楽経験に捉われていた自分の考え方に変化をもたらすことができるもので、だれかと協同して音楽をつくる楽しさを改めて感じることができました。そうして体感したことを自分なりにまとめ、班全体で話し合いながら言語化していく過程は、テーマの最終的な目標に対するてがかりとなるだけでなく、自分自身の考えの整理にもつながり、具体化・言語化という手段の有効性に気づくことができました。

中間学習を挟んで臨んだ2回目のフィールドワークでは、1回目に得た知識や経験を活かして、より具体的なテーマへのアプローチ方法の模索が主となりました。現在最上町内外で楽器を使用した演奏会などに参加されている方々からお話を聞くことができた時には、今の自分たちに求められていることやできることを理解して、自分たちなりの最終的な解答を生み出すことができました。

フィールドワーク全体を通して、普段の学習では感じることでできないことを多く経験することができました。人との関わり方や自分自身との向き合い方、そして誰かと共通の目標に向かって動くことの難しさと楽しさを、今まで以上に認識することができたと感じています。お世話になった講師の方々、そしてともに活動した班の人たち、本当にありがとうございました。

医学部 Sさん

私が今回のフィールドラーニングで最上町を訪れて学んだことは「音楽は楽しむもの」ということです。私はこれまでピアノや吹奏楽を通じて音楽と向き合ってきました。その中で音楽は楽しいものである、とはわかってはいたものの、練習は大変で、ミスをしてはいけない、完璧に演奏をしなければいけないと考えてきました。もちろん完璧に演奏ができたらうれしくそのために練習をするのですが、今回のフィールドラーニングで泉谷先生の話聞いて気持ちが変わりました。泉谷先生は楽器演奏の際に様々なアドバイスをしてくださいました。その中で少し例を挙げると「ミスしたら隣の人を見る」「緊張したら怒ってみる」など今までに聞いたことのないものでした。しかしその根幹には「音楽を楽しむ」というものがあり、それはミスをしないことや完璧な演奏をすることよりも、とても大切なものであるということに気づくことができました。また、「演奏は弾くものではなく聞くものである」という言葉に感銘を受けました。演奏者が一番素敵に見える姿は、演奏者が音に耳をすませて演奏する姿であるため、自分の出した音と周囲の出す音とをよく聞き演奏することを心掛けたいと思いました。これから音楽

を続ける上で演奏中に聞くことを常に意識したいです。

最上町の楽器に触れて感じた魅力は柔らかく温もりのある音色で、独自の楽器のため決まった型がなく、だれでも弾きやすいということです。間違っただけでも大丈夫なため、演奏し始めるにあたりかなりの練習量が必要となる楽器がある中でこの最上町の木を使った楽器は音楽を楽しむ上で素晴らしいものであると考えます。この楽器を世界に広めようといったテーマで始まったフィールドラーニングですがただ世界に広めたいだけならSNSを使えば少なからず世界に広まるでしょう。しかし、ただ認知されることが目標ではありません。この楽器の魅力を経験して知り、音を聴いてほしいです。そして自然とこの楽器が広まっていくことを望みます。

この経験を通して音楽の楽しさと最上町の木を使った楽器の魅力を実感しました。最上町の木を使った楽器は音楽の魅力を最大限に引き出すことのできる手段で新たな文化として自然と広がってほしいです。今後も音楽を続け多くの人に音楽の魅力を伝えていきたいと思っています。



医学部 Mさん

序論

フィールドラーニングでの演奏体験や町探訪を通じて、最上町には最上の楽器をより広めるという目標があることがわかった。本レポートではフィールドラーニングの主な活動内容を報告し、先述の目標を達成するための方法を考察する。

本論

活動内容

1 回目のフィールドラーニングの最上の大アカマツを使った楽器の演奏体験では、簡単な質問をしながらの演奏などのゲーム、ペアでパート分けしてハーブのような楽器（本レポートでは便宜上もがみハーブと呼

ぶ）の演奏をした。ミスをおそれないことや周りの音を聞きながら演奏すること等の演奏する際の心構え、ミスをした時の対処法やパートごとに役割があることを学んだ。その後、最上の木を使った楽器の魅力を発表し、その楽器にあう曲を考えて演奏した。

また、封人の家、境田分水嶺、ヤナ茶屋もがみを訪れ、最上町の歴史や農業について学んだ。

2 回目のフィールドラーニングでは報告会に向けて最上町の抱える課題とそれに対する提案、最上の楽器の魅力等について意見を出し合い、報告会で演奏する曲決めや演奏練習もした。町の楽器演奏団体とも交流し、交流人口の増加や音楽を開始・再開したい人に最上の楽器を広めることを目標としていることなどが分かった。町長の話聞いて、行動・成果目標を達成する方法を考えることの重要性を学んだ。

さらに、前原高原、大アカマツが生えていた東法田に訪れた。

このフィールドワークで宿泊した瀬見温泉は自然や歴史を感じられ、落ち着いて過ごせる素敵な温泉地だと感じた。

課題に対する提案

フィールドラーニングを通じて、最上町には最上の楽器をより広めるという課題があることがわかった。この課題に対して4つの方法を提案する。

1 つ目は最上観光の玄関口にある最上駅に大アカマツで作られた楽器を設置することだ。それによって、多くの観光客が楽器に触れる機会をつくることのできるだろう。

2 つ目は観光資源と結びつけることだ。歴史を感じられ落ち着いた雰囲気が漂う封人の家や瀬見温泉にもがみハーブの上品で温もりのある音色があうと感じた。瀬見温泉や封人の家、東法田等の観光地でもがみハーブでの演奏音源を流すことで楽器の魅力をより広めることが期待できる。

3 つ目は県の市町村 CM 大賞に応募することだ。市町村 CM であれば現地に赴かなくても音を体感できるため、最上の楽器の知名度を上げられるだろう。

4 つ目は前森高原や公園などで最上の楽器演奏体験会を開くことだ。実際に演奏することで最上の楽器のよさをより強く感じられるだろう。

これらの方法を組み合わせることで、観光客や地元の方、最上に訪れたことはないが音楽に関心がある方に最上の楽器の魅力を広めることが期待できる。

結論

フィールドラーニングを通じて演奏する上で大切なことを学び、最上町は歴史ある観光資源に恵まれ自然豊かであることを知り、最上の楽器の魅力は大アカマ

ツからできていることだけではなく、その上品で温かみのある音色や型がなく初心者でも気軽に演奏できることにもあると感じた。主に音楽に興味がある人の間で最上の楽器が徐々に広まること、最上の観光資源をきっかけに最上の楽器の魅力を知る人や最上の楽器をきっかけに最上のさらなる魅力を知る人が増えることを願っている。

今後の課題として、本論で述べた4つの方法をより具体的に検討し、最上の楽器の魅力を深堀したい。

医学部 Mさん

私がもがみで体験した楽器「最上ハーブ」は、推定樹齢600年の大アカマツを材料として、ルネサンス時代の古楽器であるプサルテリーをモチーフに誰でも簡単に弾けるように設計されている。プサルテリーを参考にしているものの、もがみの雰囲気に適した柔らかな音色を奏でるよう、形に丸みを帯びさせる工夫がなされており、楽器製作者である泉谷先生のオリジナルの楽器であるといえる。

私が実際に最上ハーブを弾いて感じたことは、音色がとてもきれいで、初心者でも簡単に音楽の世界に没入できるということだ。泉谷先生の「失敗を恐れなくていい」、「自分にできないことを無理にする必要はない」というご指導の下、音楽初心者である私でも自由気ままに音楽を楽しむことができた。一緒に演奏している仲間の姿をみると、なんとなく安心感が湧いてきて自分の弾いている音に集中することができた。

もがみでの体験を通して、私は駅構内に自由に演奏できる最上ハーブを設置することを提案する。最上ハーブの最大の魅力は、誰でも自由に演奏できることである。その強みを最大限生かすには、音楽初心者の人でも気軽に最上ハーブを演奏できる環境を整えることが必要である。そこで私は、駅ピアノから着想を得た。駅ピアノの特徴は、簡単に利用しやすいこととその場にいる人を巻き込む公共性である。最上ハーブで同様のことが可能となれば、誰でも簡単に演奏できる環境を確保するとともに、最上ハーブの上品で透き通るような音色を多くの人と共有することができ、最上ハーブの魅力に共鳴する人が集うようになると期待される。

駅最上ハーブについて、より具体的に考察していく。

まず、設置場所の候補としては新庄駅の公共スペースである「ゆめりあ」が挙げられる。私はフィールドラニングの帰りにゆめりあを見て回ったが、広場は若者を中心に多くの人で賑わっていたため、人々に最上ハーブの存在を伝えるには適した場所だといえる。

次に、演奏方法がわからない人に向けて、演奏方法を簡単に紹介する動画を流す。最上ハーブを設置した近くに小型の液晶ディスプレイを置き、かんたんな演奏動画を流すことで、見よう見まねで演奏してみよう

とする人が増えるのではないかと。

最後に、設置期間について、最初は1日単位で試していくのがよいと思われる。最上ハーブは貴重な大アカマツを材料としており、壊されてしまうと大きな損害となってしまふ。そこで、最上ハーブを長く大切に奏でていくためにも、駅に設置した際の使用ルールを細かく決めていく必要がある。

私はこのフィールドラニングで様々なことを実感をもって学んだ。最も心を惹かれたのは、最上ハーブをとりまく大アカマツと地元の人々の物語である。最上ハーブの美しさに人々が共鳴し、集っていくことに大きな感動を得た。私自身も、自然と人が集ってくるような、真に価値あるものをもつ人間になりたいと強く思う。

医学部 Fさん

私は最上町で一度目のフィールドワークでは封人の家や分水嶺などの最上町の魅力となる場所に行き、楽器を用いたゲームを行う事で音楽に親しみました。また、演奏や作曲を通して今回のフィールドワークで一番印象に残った考え方である、「演奏をする際には間違いを少なくすることよりも大切な事がある」という事を学ぶ事ができました。そして二度目のフィールドワークでは、今回演奏した楽器の材料となった世界一のアカマツが生えていた場所に行ったり、有名なシャンプーやトリートメントの広告に用いられた桜の木のところに行ったりして、最上町の自然の大きさを再認識し、実際にアカマツから作られた楽器を演奏する活動をしている方にインタビューを行い、話し合いを通して私たちが発表で伝えたいと考える事柄について深めました。私が今回のフィールドワークで考えた事は、山形県内でアカマツから作られた楽器に触れる機会を増やす事ができれば最上町内だけでなく海外の方にも楽器の魅力を伝える事ができるのではないかとという事です。インタビューを行った際に活動を始めたキッカケとして音色がとても好きで演奏したくなった、他の楽器よりも心に響く音色をしているという考えを聞き、深く共感しました。初めて最上ハーブを見た時、私は見た目が琴と似ていたため、音色も琴のように鋭く響くものを想像していました。しかし、実際に演奏してみるとその音色がとても柔らかく温かいもので意外に感じました。その後演奏中に考えることや曲を選ぶ際に指針としている事を知るにつれて最上町の楽器と楽器に関連する場所や考え方は一貫して温かく私たちに寄り添ってくれるものであると感じました。これは、他の地域に比べて山などの自然が身近にあり、人や自然との共生を大切にしてきた最上町だからこそ生まれたと考えました。調査によって封人の家や山に現在多くの外国からの観光客が訪れているという事がわかり

ました。そのため最上町の雰囲気や自然が好きな人の中には今までの音楽との関わりの有無に関わらずアカマツから作られた最上町そのもののような雰囲気の楽器に興味を持ち、魅力を感じる人が多くいるのではないかと考えました。



工学部 Kさん

最上町のフィールドラーニングでは、「森から生まれた楽器」を町の子供と大人が楽しむ場所をつくり、その楽しみ方を発信し最上町を拠点として、町外・国外での交流を促進し同様に楽しむ人を増やすことテーマに活動している。今回はこの活動の新たな可能性や楽器の楽しみ方や楽しむ場所づくりを提案することを目的にフィールドラーニングを行った。目的達成のために事前学習と最上町の大アカマツから作られ、ハープの弦を使用した楽器（最上ハープ）を弾いた。2回のフィールドラーニングを通して学び、得られた成果を述べる。

第1回の活動では、「木と音の会」の代表である大アカマツ伐採材を利用して楽器を作った講師の泉谷先生から楽器が作られた経緯や楽器を弾く際の心構えを学び、楽器を弾いてみて感じた魅力やキャッチコピーを考え発表した。町探訪では、松尾芭蕉が訪れた「封人の家」や「境田分水嶺」、地域材のものがみ杉で作られたローソンものがみ店を訪れた。第2回の活動では自分たちで合奏する曲「テルーの唄」（谷山浩子）の楽譜を作成・練習し、最上町の可能性について話し合い発表した。町探訪では、日本一の大アカマツがあった東法田と前森高原を訪れた。

今回のフィールドラーニングで、今までは楽器とは決まった場所を正しい方法で弾くイメージだったが、正解がなく自由に弾けるだけでこんなにも初めての楽器に対して抵抗がなく弾けるのかと驚いた。演奏団体に演奏している方は最上ハープの音色に惹かれて演奏を始めたと話していた。現在、町民の思いが引き継がれるように大アカマツが生息していた場所には2代目の大アカ

マツが移植され成長中である。私は最上ハープの魅力キャッチコピー「大アカマツの可能性 最上の音色を世界へ」と表現した。大アカマツが楽器として生まれ変わり、人々に最上の音色を届けていることに感銘を受けた。

町の面積のうち森林が全体の84%を占める山形県内でも有数の林業地の一つである最上町では、スギなど人工林が伐採適齢期を超えており、それらを活用していくことが課題だ。すでに最上町ではその活用法として、最上の木から作られた数種類の楽器で演奏する団体や間伐材をチップにしてバイオマス発電する木質バイオエネルギー事業、ものがみ杉で作られたローソンものがみ店、間伐材を暖炉や薪ストーブの燃料に使用するなど取り組んでいる。最上の新たな可能性を話し合う中で、初めは町おこし的手段としてSNSの活用など提案したが最上町が求めていることと違うことが発覚した。観光事業と最上ハープを結びつけること、誰でも体験できるように最上駅や新庄駅に最上ハープを設置すること、駅メロに最上ハープを活用するなど、実際に弾き、町探訪して魅力を知ったからこそ考えられたことを提案できた。

最後に、フィールドラーニングで最上町には知らないだけで素晴らしい魅力・場所が沢山あることに気づかされた。最上ハープを演奏することを通して、演奏や人前で発表する際の心構え、緊張した時の対処法などを学んだ。私は最上の木から作られた楽器を活用して、観光業や駅と結びつけ、最上に来た人が最上の音色を聴ける機会を作ることを提案する。

授業記録

○活動レポート「私はもがみで考えた！」

人文社会科学部 Wさん

きゅうりの栽培は子供の頃から身近なものであるため、この授業で一からきゅうりの定植が体験でき、感慨深かった。オランダのきゅうり栽培は気候の影響でハウスに限られているが、日本の場合は畑できゅうりを育てることができる。舟形町はオランダの住んでいた村と同じような大きさとはいえず、より田舎だと思われ、自然であふれており、非常にきれいであった。そのため、この自然であふれている環境できゅうりの栽培ができたのは印象に残るはずである。

きゅうりの栽培仕方としてはまず土壤に穴を開け、次に薬を入れて混ぜ、最後にきゅうりの苗を定植する過程である。最初日、これはかなり時間がかかったが、だんだんみなが上手になり、最初日に全日かかったのは最後の日 2 時間にすぎなかった。定植が終われば、茎が折れないように誘引棒を立てる必要がある。これも最終日に指示がなくても自らするようになり、グループの効率と協調性の証拠だと考えられる。栽培自体以外、畑の準備もした。その準備は風防止のネットを張ったり、フレームを立てたりすることである。フレームを立てるのに、金属製の棒を定め、プラスチックの紐を張り、最後に網をかけることが必要である。風防止のネットの高いところや一番上の棒を定めるのが身長が高いため私の役割であり、特別な役割があったのがなんとかわれしかった。

舟形町は日本全体と同じように少子高齢化が最も大きな問題である。例えば、堀内地域では平成 27 年に 51%は 65 歳以上であり、高校もないから高校生の年齢になると新庄などの方へ行くしかない。そのため、舟形町に残る若者が珍しいと言われた。高校を創立しても、生徒が足りないだろう。なおさら、担当の大山さんも言った通り、私たちの大学生のような若者の声は重要である。

ほかの問題は舟形町の伝承野菜が人気ではないことである。西又かぶなどの伝承野菜は舟形町にしかなく、独特にもかかわらず、あまり知られていない。大山さんはこの野菜の売り上げがどのようにあげられるか、オンライン販売は可能ではないかと課題として提供した。一回目と二回目のミーティングでこれが話題になり、最も大事としたのはその野菜の調理方法と販売であった。調理方法の例として、伝統的に漬けたりし、「とりあえず揚げる」などの提案であったが、購買する人にも教えることが大事とされた。販売方法として、みなは私が提案したミールキットのような伝承野菜を配るサービスを気に入った。

最後に、大山さんとサポーターの木村さんのおかげ、この 4 日間のフィールドラーニングがスムーズに進め、楽しい時間を過ごすことができ、ありがとうございます。料理人は常に別の鍋でベジタリアンの料理を作ってくれたのが感謝しております。

人文社会科学部 Dさん

今回の里地里山の再生というフィールドラーニングで、舟形町の農業体験活動を通じて作業の大変さを感じて、地域に自分の力を貢献したい気持ちが強くなった。農村の過疎化や少子高齢化が進んでいることはただニュースではなく、むしろ目の前に直面している深刻な課題だ。

農作業をしたことがない私にとって、野菜の定植活動から貴重な経験を積んで農業に関する知識も増えた。四日間のグループ活動は、具体的に支柱立て、防風ネット張り、穴掘り、肥料入れ、きゅうり定植など多くの作業を体験して、普段に食べた野菜はどのように栽培しているのか知ることができた。特に、植え付けの際にきゅうりの茎が折れるのを防ぐために誘引棒を立てて、まっすぐネットに絡むようにする必要があつて、防風ネットの結束バンドをしっかりしないと壊れやすいなど細かいところを重視しなければならない。私たち十人のグループは長時間がかかった定植作業は実際にただ四人だけが作業を行っている。農業の若い人材の不足は現在の日本が直面している最大な問題点であり、中国も同様だ。私たち若者はこの現状を改善するために、今から少しでも何ができるか考えるが必要だ。

農業体験活動以外なら、最も印象に残ったことは若あゆ温泉だ。温泉から眺めた景色がとても美しく、温泉の値段も安いからほとんどの人は舟形町の住民だ。都会で希薄な人間関係と比べて、近所の付き合いが多いことが深く感じた。

舟形町の課題について、一つ目は大山さんが言った目玉がない点に対して、西又かぶ、長尾かぶ、くるみ豆など伝承野菜はポリフェノールなど目にいい栄養素を持って食べやすいから、目玉として全国に伝えたい。地域に還元するなら、舟形町の学校給食だけではなく、山形大学をはじめ近くの大学にも給食すればいいのではないだろうか。例えば、舟形フェアなど期間限定のテーマを作って、まずは山形大学の学生に舟形町の野菜の美味しさを宣伝する。二つ目は、コロナの時期に一度中止した都会との農業体験活動を再開したほうがいいと思う。都会の子供たちは人間と自然のつながりを感じさせて、農家の大変さも知るべきだと考える。

今後は、今回の活動で学んだ舟形町の魅力と野菜の美味しさを山形県、日本全国或いは中国にも発信していきたい。



理学部 Eさん

今回のFLにて訪れた舟形町は、一般的な地方郊外自治体と同じく、超少子高齢化社会とそれによる農業従事者の高齢化・減少や耕作放棄地の増加が、町体を維持する為の主要な課題となっていると考える。なので僭越ながら私は、舟形町を農業一本だけでなく観光地としても再興する計画を考えた。

まず、我々が宿泊した施設の付近にある「猿羽根峠の地蔵」は、地元の方のお話によると、縁結びの地蔵として有名だそうだ。私が見た限り、その地蔵がある場所に続く道の分岐路の入口に大きい鳥居があったので、是非訪れてみて欲しい。次に、「最上炭田」の所謂「歴史資料館」化はどうだろうか。地元の方のお話を聞くと、「堀内」地区には、昭和初期～中期にかけて「沢内」集落がかつてあり、その周辺の亜炭鉱山の労働者が居住し集落を形成していたという。今となっては、その鉱山は閉山し集落は放棄されたという。この時の村の繁栄の様子の資料が現存しているのなら、その資料を展示する為の施設を作って観光資源化するのもアリなのではないか。それに加えて、舟運についての資料館もどうだろうか。我々がお世話になった施設に、舟形町と合併したであろう「堀内村」の古地図とその説明が展示されていた。その図によると、作図当時(17世紀中盤～後半)の堀内村は今より下流に位置していて、最上川を通じて行われる舟運の関所となっていたが、後世の土砂災害により壊滅し現在の場所に移住したという。これも当時の舟運の記録などを観光資源として活かせるのではないだろうか。最後に、舟形町北部の温泉施設「若あゆ温泉」もいかがだろうか。山の中腹に位置する温泉施設であり、我々が立ち寄った所であるが、(温泉好きの為私情が混入しているかもしれないが)私の感想を述べると、素晴らしい温泉であった。サウナと水風呂がセットで配置されており、露天風呂からの景色はやはり息をのむものであった。露天風呂の向きは、小規模な集落や田畑とそれを取り囲む山々を眺望できるようになっており、眼下には森が広がっている。特に夏場の日没の時間帯の、雲に反射して鮮

やかに変色した夕焼けを見ながら入る露天風呂は格別だろう。日頃の疲れが溜まっていたり、また精神的に少し疲れたり参っていたりする人は、一度この温泉に来て「心の洗濯」をしてみてもいいだろうか。また、別にそうでなくとも、この露天風呂から見える景色は絶景であり、一見の価値があるので、一度足を運んでみることをオススメする。

理学部 Mさん

私は二回のフィールドラーニングで、実際に農作業を体験し、現地で農業をする「堀内ファーム」の方から話を聞いた。堀内ファームでは高齢化した地域を持続可能にすることを目標としている。

活動を通じて、舟形町の農業を持続可能にする上で二つの大きな課題があることを知った。

一つ目は、若い後継者がいないことだ。現在、舟形町では少子高齢化が進んでおり、農業に従事する人の多くは高齢者となっている。若い人が少ないことで、新しいアイデアが出づらく、インターネット販売のような新しい取り組みも難しくなっている。また、高齢化により農業の人手が足りなくなっていくことが予想される。

二つ目は、舟形町が目玉といえる作物がないことだ。舟形町には伝承野菜と呼ばれる、舟形町で古くから育てられている野菜があるものの、現在の生産量は少なくスーパーには並ばない。

これらの問題に対して、堀内ファームでは農業の法人化、機械化、伝承野菜の販路の開拓などに取り組んでいる。

私は、これらの問題を解決するためには、舟形町の農業を多くの若者に知ってもらうことが効果的だと考えた。舟形町の農業に興味を持つ人が増えれば、舟形町で農業にかかわりたいと考える人が増え、人手不足が緩和されると共に新たなアイデアが生まれるきっかけになることが期待できる。

私は今回の活動を通じて、舟形町の地理、歴史、現在の取り組みなど見聞きしたことで、農業により一層興味を持った。また、農業にはその土地の事情が大きく反映されていること、農業は自分が考えていたよりも機械化が進み負担が軽減されていることを知った。この経験をほかの人にもしてもらえば、舟形町の農業を知る人、興味を持つ人が増えると考えた。

舟形町の農業を多くの人に知ってもらうきっかけとして、伝承野菜のマルシェが最適だと思う。舟形町の伝承野菜は舟形の地理がよく表れているからである。例えば、伝承野菜の一つである西又カブは山の斜面でも育ち、肥料もあまり必要ない。このような性質が山間に位置する集落にあっていたため、舟形町で長く育てられてきた。このような伝承野菜の特徴と、この伝

承野菜の生産数が減少している現状、それに対する取り組みを知ってもらうことが舟形町の農業について興味を持つきっかけになると考えた。マルシェは農業体験に比べて手軽に参加できることも多くの人に知ってもらうという目的に合うと思う。また、伝統野菜の知名度が上がることで、伝承野菜が地域の目玉となることも期待できるだろう。

以上のように、私はフィールドラーニングでの体験から、舟形町の農業を持続可能にする方法を考えた。今後は班での話し合いを通じて舟形町の課題への理解を深め、よりよい発表を目指していきたい。



医学部 Kさん

1日目は、大山さんの説明を聞きながらきゅうりの苗を定植した。「マルチ」という雑草除けや地熱上げのための覆いがあり、触れるとマルチのない地面よりも暖かく感じた。川からの風よけのための防風ネットや、畑の見栄えをよくするための道具があった。素人だとみられないように、と笑って言っていたが、私はそれ以外にも、農業をする人自身のモチベーションに繋がると考えた。実際に自分が育てていくことを想像したら見栄えのよい畑の方が作業しやすいし気持ちも良いと思ったからだ。きゅうりは守られながら大切に育てられていることを感じた。

収穫には4人は必要で、現在は雇用しているそうだ。朝の5時から8時、夕方の16時から18時に行くと聞いて、ちょうど自分が学校へ行っている時間と正反対だと知り、驚いた。だが市場に出る際の鮮度等を考えると腑に落ちた。

手伝ってくれる人が増えれば農地を増やすと言っていた。ここに人材の不足が見えた。

大山さんは何度も「地域に還元したい」と言っていた。実際に収穫時の雇用をしたり、給食に作物を提供したり、子どもたちに体験を提供したりと行動に移していることが印象に残っている。

農家は個人経営で集まる機会がないと言っていた。しかし、温泉では観光らしき人以外にも地域の方が多くいて賑わっていた。このことから人口が少ない地域だからこそ近隣との繋がりが強いと考えた。

舟形には高校が無く、地域に愛着が湧かないと言っていたので、高校を新しく作らずに中学までの教育で地域に愛着を持ってもらえるようなきっかけを作りたいと考えた。舟形の子も達は自分の家が農家で、農業に興味がなく工業や商業に従事すると言っていた。自分の家が農家だからこそ、その基礎知識を活用した、農業に興味を持ってもらう行事ができるのではないかと考えた。例えば作物の成長をじっくり見る機会を作るといったことだ。2回のフィールドラーニングの間の1週間で作物の成長が見てとれて、育っていく様子を見たいと感じたからだ。

現在はコロナで停滞しているが、舟形は東京の白金との交流や、商店街や夏祭りへの出店、東京と舟形のホームステイなど、都心との繋がりを持っているようだ。このつながりが発展すれば舟形のことや作物を知ってもらえると思った。

インターネットで発信や通販の利用といっても、炎上した時の対応が分からない、使い方もよくわからないと言っていた。確かに実際にインターネットを活用するときのことを考えるとハードルが高いように感じた。インターネットを活用すればいいと漠然と考えていたが、安直な考えだった。しっかりと見通しをもち想像することが大切だと感じた。

冬の間は雪が降って農業が出来ないので、主に除雪をしているようだ。他の雪の降る地域ではどうなのか調べたが、他の地域でも冬は雪室か除雪を行っていると分かった。ねぎを作っている所は2月から苗づくりを始めるようだ。この雪を活用できる事例としては、先に挙げた雪室があり、新潟の人参が有名である。寒さから体を守ろうとする結果苦味が消え、甘くなるようだ。話を聞いただけでも食べたいと感じた。西又かぶを雪室にすることで漬物以外の1つのアピール方法になると考えた。

伝承野菜の栄養素について質問すると、西又かぶはポリフェノールが多く、くるみ豆はたんぱく質が豊富だと言っていた。一般的なかぶや大豆の栄養素と変わりはないようであった。西又かぶには一般的な白いかぶよりサクサクとした食感だそうだ。また、芯まで赤くその色は加熱しても消えないという特徴があり、この食感と色味を両方活かした調理方法を、大山さんの言うマリネやサラダ以外も考えたいと思った。

地域の特徴は何かと聞いたときに、わからないと言われた。この時、自分の地元は地下水の美味しさで有名であるが、実際に生活しているとそのことを意識しないという現象に似ていると感じた。つまり、その地域で「当たり前」でも周りから見るとそれが特徴的な場合があると感じ、難しさを感じたと同時に、新しい視点、つまり

地域外の人々の視点が重要だと考えた。

お米の名を見たときにふとその由来が気になったので聞くと、「はえぬき」が一番という意味だそう。伝承野菜の「くるみ豆」は胡桃の味がし、「西又かぶ」は西又地域で作られている。聞くと当たり前のように思うかもしれないが、名前の由来を知ることその作物を知ることには繋がると実感した。

フィールドラーニングを行う中で、過疎・人材不足・高齢化といった問題は舟形だけでなく日本全体にも広げて考えることが出来ると感じた。その中で最上独自の課題を見つけるのは難しく感じたが、地域の魅力が子ども達や地域外の人に伝わっていないことではないかと班員の中で意見が出て、その意見に共感した。魅力を伝えるためには、単なる情報発信では不十分で、体験を伴うものが良いと考えた。文章や図表、写真から得られる情報には限度があると今回の体験で体感したからだ。

普段自分が食べている野菜は農家の方々が作ったものであるが、それを意識し、どのように作られているか考えることは今まで無かった。お店で売られている完成した食べ物を見るのがほとんどだったため、畑づくりや定植、肥料といった工夫を見て、農作物について学習することが出来た。これは体験でないと得られなかったと思う。

事前に農業や舟形について調べたが、現地ですぐに学べるほうがとても大きかったし、調べたときの舟形への漠然としたイメージが一変し、良さが見えたと感じた。今回の体験で農業や舟形について多くの学びを得ることが出来た。また、地元では畑や田んぼは全くと言って良いほど見られないし、お店で売られているものがどのように作られているかといった農作物の裏側は普段中々考えないので、貴重な体験だった。畑やマイクロバスから見た風景や感じたことを忘れないでいたいと思う。日常生活で農作物を見たときに、今回の学びを思い出し、感謝の気持ちを持って食べていきたい。

最後に、貴重な体験をさせていただいた舟形町の方々に感謝を申し上げたい。

工学部 Aさん

私は舟形町という地域で5月18～19日、25日～26日の計四日間キュウリの植生や育てるためのネットを設置したりなど、色々な体験を行いました。普段は1～3人程で作業するらしいのですが、農業を一人でやることはとても大変だと感じました。特にキュウリを育てるネットを張るときはゲート型の支柱の両方からネットを引っ張り、その張った状態を結束バンドで固定しなければいけません。これを一人でするのはとても難しいと思いました。また良い作物を育てるために細かな工夫がされていました。例えば連作障害を抑えるため接ぎ木ということを行います。キュウリに連作障害に強いカボチャを接ぎ木することでその障害を起りづらくできるそうです。

このように植え方一つを取っても様々な工夫がされていて感心しました。今回は植生が主な活動で収穫を体験しなかったのですが、次は是非やってみたいです。

舟形町の課題として農業機械、農薬、肥料の価格が高く、生産者米価低いため採算が合わないという点があります。この問題解決のため舟形町に使う伝承野菜の活用を考えました。舟形市にはくるみ豆、長尾かぶ、西又かぶ、青黒というこの地域特有の野菜があります。例えば西又かぶは内側も外側も鮮やかな赤色をしており、煮込むと甘みが出る特徴があります。これを活用しスイーツを制作し特産物することで収益が増加するのではないかと考えます。しかしこのような特産品を作ったとしても、農業を継承するひとがいなければいずれ廃れてしまいます。そこで課題の中にもある、農家の高齢化と後継者不足解決のために、若者と高齢者が農業やイベントなどを通じて交流する機会を作ることが大切だと考えます。この体験で二回地域の温泉に行きました。その際親しげに会話をしている人々は多く見られました。私の実家のある地域では、そのような光景をあまり見たことがなかったのが驚きました。この住民同士の仲の良さがあれば人が集まりやすくなると思います。

工学部 Iさん

1日目、きゅうりを土ほり、肥料をいれ混ぜる、苗を平行になるように植えるという手順で定植した。きゅうりは、4か月の間に収穫でき、単価が高いなどの利点がある。育てた野菜を学校給食に出すことで、地産地消している。港区や世田谷の学生が舟形町に来て芋煮や、餅つき、ホームステイをして自然体験を東京の人にしてもらう活動が行われていたが、コロナ禍で一気に過疎化してしまった。来年から野菜、花の苗を作り、自分たちで1から作ったものを定植する新たな取り組みをしようとしている。これからの課題は、今やっている活動を継続しつつ、若者に農業をやりたい気持ちを芽生えさせることである。2日目、舟形町では西文かぶ、長尾かぶ、くるみ豆、青黒などの伝承野菜があるが、販売はされていなく、学校給食や食堂、モニターとして地域の人に配布するなどしている。また、かぶの漬物は硬く、高齢者の方が食べられず、若い世代の需要がないため、若い人が食べるような、薄切りにしてマリネ風にするなどの調理法にするなどの提案があった。かぶはポリフェノールという目に効果がある成分があり、効果を教えて食べてもらうなどの意見もあった。また、舟形町には、高校がなく、隣の新庄市に行ってしまう、地元で愛着が湧かず、過疎化が進んでしまうことが考えられている。舟形町では、雪むろ貯蔵という、野菜を0℃で保存し、自分を守るために糖をだすことができる貯蔵をしている。甘いという評判があり、野菜特有のえぐみがなくなる。そこで、雪の中でも収穫できる雪の下にんじんやかぶを目玉にしたいと舟形町の方は考えている。3日目、きゅうりの

ネット張りをし、少人数ではとても難しく、時間がかかるため、高齢化が進んでいるが、若い人材が必要だと感じた。雪がある2、3月に山菜をハウス栽培で育てることで付加価値があげることができるが、ハウス栽培は室温をあげるため、お金がかかり、商品の単価があがらなると難しいことを知り、雪国の農業の大変さを改めて感じた。そこで、舟形町では経費をかけず、雪のない地域と同じような農業をすることを課題にしている。また、舟形町では人が少なくなって減田しているが、その分をアスパラを育てている。だが、畑作は機械だけではできず、労力が必要で、高齢化して人材がなくなっている。4日目、伝承野菜はその土地にあったもので、舟形町の西又かぶは、東西にひらけていて、田畑も少なく、山の斜面で収穫できる。また、かぶはあまり肥料を使わないで育てることができる。昔は、肥料があまりなく焼畑をして、灰を肥料にしていたが、今は山林に火をつけることが難しい。今回のフィールドラーニングを通して、私は舟形町の目玉となるものをつくること、高齢化を食い止めるため、若い世代に農業に興味を持ってもらい若手を増やすことが課題だと感じた。そのため、目玉をつくるため、伝承野菜の若者ウケするような食べ方を考え、学食にすることや、若手を増やせるように、コロナ前のように農業体験などを色んな人にしてもらい、興味をもってもらえるような活動をするプランを考えていきたい。

農学部 Fさん

私は、舟形町で実際に農業を体験した中で知った現状や、現地の方のお話から学んだ課題とそれに対する取り組みについて、自分なりに調査し考察しました。

人手の課題

舟形町のような過疎化が進む地域では、農家の高齢化が深刻化している。子供は町から出て行ってしまうため、農業の維持に必要な知識や技術を継いでくれる若手の人材がない。また、若手の志願者が出ても安定した賃金や町に定住できる環境がなく、農業の即戦力にできないなどの点で課題がある。

町の取り組み

少しでも町の子供に農業に対する興味を持ってもらい、若手の働き手を獲得するために、学校の給食の時間に、町で作った野菜の紹介や宣伝をしている。また、学校の運動会を町内の住民全員参加制にしたり、堀内田植え踊りや盆踊りなどの祭りを開催したりすることで住民同士の結びつきを強めることができ、住民に舟形町への愛着を持たせて、人口減少を防ぐなどの取り組みをしている。他にも、農作業の機械化や自動化を導入することや、米に鉄コーティングを施すことで米の種を直接田んぼに植えられるようにするなどの工夫をし、省力化

に取り組んでいる。

考察

このフィールドラーニングのような、だれでも参加できる農業体験ツアーや、最上川や田んぼ、自然を生かしたツアーのような事業を増やして、舟形町の魅力を多くの人に伝えたり、お店や娯楽施設などを増やすことで暮らしやすい町にしたりすることができれば、住民に働く場所を提供できるとともに、町の人口維持や移住者の確保も望めると考える。

伝承野菜の課題

舟形町では、「西又かぶ」などの伝統的な野菜があるが、人手不足により生産量を増やすことができなく、町外にあまり販売できていない。それどころか、次世代への継承も難しい状況である。もし、町外に販売できるだけの伝承野菜を生産しても、認知度が低い買い手が見つかりづらい。よって、人手不足を解消したうえで、認知度を上げるためSNSなどの新しい方法での宣伝と販売が必要である。

町の取り組み

伝承野菜の継承のため、小学校で伝承野菜について説明し、学校給食でこれらの野菜を提供することで、次世代への認知と継承を目指している。

考察

伝承野菜の継承についての課題も、地域の過疎化も、人手不足が原因で起こる問題であると考え。人手不足を解決するには、私たちのような舟形町の現状を知った人たちが、舟形町の祭りや伝承野菜などの魅力を世間に伝えることや、SNSで伝承野菜の「西又かぶ」の特徴を生かした新しい料理の紹介などの、インパクトのある投稿をすることで効果的な宣伝ができ、多くの人に興味を持ってもらい、認知度を上げることが可能であると考え。



農学部 Sさん

私はフィールドラーニングで、きゅうりの定植を行いました。きゅうりの定植では、きゅうりを植えるための穴を掘り、穴一つ一つに農薬を入れ、農薬が偏らないように攪拌し、葉に着けたきゅうりの苗を地面に平行になるように植え、きゅうりを誘引するための棒を、まだ柔らかい根を傷つけないように苗の手前に挿すということを行いました。また、舟形には最上川が流れており川からの風が非常に強く、きゅうりの苗が折れて育たなくなってしまうので、畑の周りに暴風ネットをはり、きゅうりが育ちツタを張るためのネットを設置しました。このような作業を2人で行っていると聞いて、農業の大変さや人手不足であることを身に染みて感じました。また、今回私たちにきゅうりの定植を教えていただいた大山さんから舟形の農業の現状や課題、取り組みについてお話を聞きました。舟形には、先人から代々受け継がれてきた伝承野菜というものがあり、西又かぶ、長尾かぶ、くるみ豆、青黒というものがあるそうです。伝承野菜を絶やさないために販路の開拓や学校給食を通して子供たちに知ってもらう取り組みをしているそうです。農業は自然に左右されやすく安定した収入を得ることが難しいことが大きな課題で、解決策として、ビニールハウスでの作物の栽培があるが、ビニールハウス内の暖房の維持費など育てる際に経費がさらにかかり、収支がプラスにならない可能性があるということを知り、このような農業の難しさが農業を始める若者が少ない理由の一つだと思いました。大山さんはきゅうりがある一定の長さになったら自動で収穫してくれるスマート農業も行っていました。しかし、スマート農業を普及させるには多額のお金がかかり、お金を稼ぐには安定した広範囲の農業をする必要があります。人手が足りない現状ではスマート農業の普及は難しく、このままでは高齢化が進み、農地の維持が難しくなり、耕作放棄地が増加してしまうのだと思いました。舟形の農業では農業者の高齢化や後継者不足などが大きな課題となっていました。

大山さんのお話を聞いて、農業の後継者である若者の参入が舟形の農業を持続できるものにするためにも欠かせないものだと思いました。そこで、舟形の強みである自然の豊かさや美しい風景、伝承野菜の特徴やおいしさを多くの人の知ってもらうことが大切だと思いました。また、私たちのように農業をやったことがなく大変さを知らない若者が農業体験をして、現状を知ってもらうことが、農業の課題解決への第一歩だと思いました。

農学部 Sさん

私は舟形町での二回のフィールドラーニングで、キ

ュウリの定植活動を行いました。結果として960本のキュウリ苗の定植ができました。商品として出荷する大規模なその量に驚きました。また、連作障害を防ぐためにカボチャなどの苗と接ぎ木をする、液肥と肥料を使い分けて収量を増やすための努力をしていることなど、沢山のことが分かりました。今回は防風ネットをかけ、誘引ネットを張り、苗を植えて、誘引棒をネットに引っ掛けるなどの体験をさせていただきました。その一連の行動にも細やかな配慮が必要で、自然に左右されながら「生命」を生み出すことの大変さを知りました。

舟形町の課題として、まず少子高齢化によって農家の数が少ないこと、また農家を継ぐ人も少ないこと、舟形町で目玉の商品がなく魅力が伝わっていないこと、雪国であるため冬の間は農作業ができないため、その期間の収入を増やす方法がないことなどが挙げられました。また以前は東京や千葉などで農業を通して交流をしていたけれど、コロナによって途絶え、それが過疎化につながったのではと考察されていました。

そこで私は「舟形町の目玉商品を作る」ことに着目し、舟形町で最上伝承野菜である西又かぶやくるみ豆、青黒、長尾かぶが主に栽培されていることを知りました。これらの野菜は販路が少なく、主に学校給食や郷土料理に使用したり、地域の人々に配布したりしているそうです。中でも西又かぶは中まで真っ赤で火を通すと甘くなるという特徴があります。また、舟形町の堀内ファームさんは地域づくり活動として雪むろ冷蔵による農作物の甘熟を促したり、長期保存を可能にしたりする活動を行っているそうです。

販路がないなら作ってしまえばいい。そのためにはまず知名度を上げることが重要であると思い、古今東西の人々が集まるこの山形大学で「最上伝承野菜を利用した」商品を作り販売することでその足掛かりになると考えます。そこで少しでも『山形の舟形町にはこんなに良いところがある！』という魅力を知ってもらいたいのです。私は、舟形町ではかぶを漬物に利用しているが、若い人達にはあまり好まれないということから、「ふながた野菜チップス」を作ることを提案します。具体例としては、山形大学の学食でその野菜チップスを販売する、また舟形町で作られた農作物を利用したメニューを提供することなどが挙げられます。それによって舟形町に興味を持ってもらい、町が抱える課題について理解してもらいたいと思います。

二回のフィールドラーニングでお世話になった大山さんから、「自分たちにできることで地域に還元したい」「広い目で見て、農村だけでなく日本全体が豊かになる方法を見つけてほしい。」というお言葉をいただきました。今回舟形町で体験したこと、学んだこと、町の魅力、見つけた課題などを周囲に発信して、なおか

つ「伝えるだけ」にならないような活動をした
います。



山形大学フィールドラーニング授業プログラム

プログラムテーマ：子どもの自然体験活動支援講座（真室川町）

		1 回目	2 回目
日 程		【1日目】6月1日（土）	【1日目】6月29日（土）
		08:42 山形駅発 09:52 新庄駅着 10:00 新庄駅発（真室川町のバスで自然の家へ） 10:40 自然の家着 11:00 オリエンテーションで真室川町について学ぶ 12:00 昼食（館内食） 13:00 自然体験活動実習 17:30 夕食 18:30 体験活動の意義についての ワークショップ 19:30 ふりかえり 20:00 入浴 21:30 就寝	8:42 山形駅発 9:52 新庄駅着 企画事業「わんぱく探検隊」活動支援 ※プログラムによっては、自然の家へ移動するか、活動場所へ直接移動するかになります。 （真室川町のバスで自然の家へ） 自然体験活動支援 12:00 昼食 自然体験活動支援 17:30 夕食 自然体験活動支援 21:00 子ども就寝 スタッフミーティング 21:30 スタッフ就寝
		【2日目】6月2日（日）	【2日目】6月30日（日）
		06:00 起床、朝の集い 07:30 朝食 09:00 打合せ（指導員・ボランティア・学生） 10:00 企画事業「めんごキャンプ①」活動支援 自然体験活動支援 12:00 昼食 自然体験活動支援 わかれのつどい 14:30 後片付け・FLミーティング 15:10 自然の家バス発（真室川町のバス） 16:14 新庄駅発 17:23 山形駅着	06:00 起床、朝の集い 07:30 朝食 寝具片付け 09:00 自然体験活動支援 12:00 昼食 13:00 ふりかえり（参加者） 14:00 わかれのつどい 14:30 後片付け・FLミーティング 15:20 自然の家バス発（真室川町のバス） 16:14 新庄駅発 17:23 山形駅着
電車降車後の移動手段		・新庄駅～自然の家および活動エリアへの送迎については、真室川町教育委員会のバス	・新庄駅～自然の家および活動エリアへの送迎については、真室川町教育委員会のバス
	宿泊料金	630 円	630 円
	必要経費	飲食事代、シーツ代、活動費 3,870 円	飲食事代、シーツ代、活動費 3,870 円
	小 計	4,500 円	4,500 円
	合 計		9,000 円
学生が準備するもの		・野外活動に適した服装 ・帽子 ・内ズック ・ズック（トレッキングシューズ） ・長くつ ・着替え ・タオル ・軍手2組 ・洗面用具 ・懐中電灯（ヘッドランプ） ・かっぱ ・筆記用具 ・水筒 ・リュック ・健康保険証 ・大きめのビニル袋3枚	・野外活動に適した服装 ・帽子 ・内ズック ・ズック（トレッキングシューズ） ・長くつ ・着替え ・タオル ・軍手2組 ・洗面用具 ・懐中電灯（ヘッドランプ） ・かっぱ ・筆記用具 ・水筒 ・リュック ・健康保険証 ・大きめのビニル袋3枚 ・水着とその上に着る長袖、長ズボン
留意事項		幼児～小学2年生までの児童とその保護者を対象とした事業「めんごキャンプ①」の班付きスタッフとして、事業のねらいを意識しながら子どもの自然体験活動支援にあたります。活動内容は天候等により変更する場合があります。	小学3・4年生を対象とした事業「わんぱく探検隊～夏～」の班付きスタッフとして、事業のねらいを意識しながら子どもの自然体験活動支援にあたります。活動内容は天候等により変更する場合があります。

授業記録

○活動レポート「私はもがみで考えた！」

人文社会科学部 Yさん

(1) 自然に触れて感じたこと

私は、父親がキャンプを好きな影響で小さいころによくキャンプに行ったり、神室自然の家のような自然の家によく行ったりしていましたが、中学、高校と自然に触れるという機会がほとんどなくなってしまい自然に触れるとはどのような感覚なのか、自然体験とは何なのかを考えるとすらありませんでした。ですから、今回の授業によって約6年ぶりに本格的な自然に触れ、自然体験をすることによって自然の偉大さ、自然の中で過ごす楽しさ、そして自然で過ごす難しさなどを感じました。具体的には、一人の人間を余裕で覆うことのできる森、それおも覆うことができるきれいな星空を見ることで自分のちっぽけさを感じました。そして、川遊び、ナイトウォークなどを体験することで、川に飛び込み、水切り、夜中に森の音などの自然は接し方によって楽しいものになるのだと感じました。ですが、接し方を一歩間違えたら死と隣り合わせになるという自然の危険性をも感じました。

(2) 子供たちと接してみて感じたこと

私が幼稚園生、小学校低学年、中学年と一緒に過ごしてみて思ったのは、こんなにも一年や二年の差で私の対応、感じ方が変わるのかと思いました。例えば、幼稚園生や小学生低学年のみんなと接するときは、子供たちの行動が活発になるときとそうでないときがあるなど思いました、またそのおかげかわかりませんが、余裕が生まれ子供がとても愛おしく感じました。小学生中学年のみんなと接したときは、まず語彙力が幼稚園生、低学年と比べると高いと感じました、そして本当に一日中活発的で私も余裕がなく、もちろん子供はかわいいですけどそれを感じる余裕がないぐらい圧倒させられました。

年齢関係なく思ったのは、子供の発言に対して自分だったらこうだなとか自分の枠の中に入れようとするのではなく、なんでそう思ったのか、その考え方を尊重する意味で共感してあげることが子供の成長そして関係性の向上につながると思いました。もちろん明らかに間違ったことを言っているとき(暴言暴力)は正すべきだと思います。

(3) 神室の皆さんへ

今回は貴重な機会を与えてくださり本当にありがとうございました。今回の経験で得たことを今後の生活に活用していきたいと思います。

人文社会科学部 Tさん

私が参加した真室川町のフィールドラーニングでは、真室川町の神室少年自然の家で子供たちの自然体験活

動をサポートをするという内容で、1回目は年長から小学2年生までの子供と、2回目は小学3、4年生と活動した。

この2回のフィールドラーニングで私は子供の自然体験の大切さを学んだ。そう考える理由は2つある。

1つ目の理由は、実際の火を見たことの無い子供がいたことだ。神室少年自然の家の職員の1人が、「近年の子供に関する課題は明確であり、それは子供たちの自然体験活動がないことだ。現代の子供たちの中には理科の実験で初めて本物の火をみる子供もいる。」と話していて驚いた。実際に活動に参加した子供たちの中に、マッチを使ったことのない子供や、火を見たことの無い子供がいた。確かに私が小学生のころは料理をする時はガスコンロであったし、マッチを使うことも頻繁にあり実際の火を見ることは多かったように思う。しかし今ではIHのコンロが普及している他、マッチを使う機会も減っているだろう。そんな子供たちのために焚き火をするという活動があった。特に1回目のフィールドラーニングの参加者である年長の子供が火を怖がる傾向にあったと感じた。火に慣れていることは、災害時IHが使えなくなった時や火災の時などに落ち着いて対処できるほか、火が必要になったときに必要な力であるため、実際の火を見ることを体験しておくことは大切だと思った。

2つ目は外で遊ぶより家の中で遊ぶ子供が多いと思ったからである。活動の中で子供と普段何をして遊んでいるか尋ねると、ゲームをして遊ぶという回答が多かった。また授業の中でもタブレットやパソコンを取り入れている学校が多く、自分たちが子供のときより電子機器が普及していることを感じた。その分外で遊ぶ機会も減っているため、子供が外で遊ぶ機会を作るべきだと考える。活動の最後に子供たちから感想を聞くと、「外でたくさん遊べて楽しかった。」や「夜に星が見えたのが綺麗だった。」と話していた。木々や星などは普段当たり前に見ることができるものだが、そういったものをゆっくり見る時間は意外にないことがわかり、今回の自然体験活動の中で子供が自然の良さに気づくことが出来ていたため、このような活動は増やすべきだと思った。

以上のことから、フィールドラーニングでは子供の自然体験活動の大切さについて学んだ。私自身も子供のときより外で遊んだり火を使ったりする機会が減っていると感じたので、これからはもっと積極的に自然に触れていきたいとおもった。

地域教育文化学部 Mさん

私はこのFLでの体験を通して、「自然体験および体験の重要性」を学んだ。ここでは、「自然体験」の意味を主体性があり、自立した行動を目的とする体験、「体験」を単純に何かを行う、経験してみる。と定義する。

世の中の風潮が「子供の危険をなるべく排除する」という方向に変化して以降、危険を感じて生活することが少なくなったのではないだろうか？例えば火を知ら

ない、川の流れを知らない、危険な動植物を知らないなどがあげられる。それらの危険を知らずに何でも親にやってもらいながら生きると、共生し、自立することができない人になってしまうと考える。なぜなら、自分で考えて行動するという訓練をしていないからだ。「自然とともに暮らすことはない」と言ってしまうとそれまでだが、「自然体験」ではそれらのかけている力を効果的に育て、伸ばすことができると、自ら体験して考えた。学習観の変化によって起こった「自然体験」の減少問題は、子どもたちの人間形成の面で大きく影響している。それでは実際、どのような力を子供たちは身に着ける、育てることができるのか。

自然の家などの宿泊施設を拠点とし、親元を離れて、自分ひとりでいろいろなことをする「自然活動」では子供たちの自主性が磨かれるチャンスが多いにある。例えば、テント設営。自分が動かなければ、今日寝るところがなくなってしまうため、自分で行動をするしかない。もちろん親などの周りの大人も手助けはするが、手伝うわけではない。また、野外炊飯も例として挙げられる。おそらくいつもは親に作ってもらっていたであろうごはんを自分たちの手で作る。もちろん、失敗しておいしくなくなったり、地面に落として食べられなくなったりなどのことが起こるかもしれない。が、そんな失敗も経験として子供の中に蓄積されていき、経験値として蓄えられる。これらの例に挙げたような経験を「自然体験」の中で重ねていくことで、自分がやることでしか得られない達成感、自己肯定感、失敗を反省、おかしかったところ、うまくいかなかったことを修正する、などのことを経験することができる。また、グループ活動を通して「今自分が何をすべきなのか」「ほかの人は何をしてほしいのか」などの「察する力」を学ぶことができる。この「察する力」は社会で働く、生活していくとなったときに多いに役立つだろう。これらはほんの一例にすぎず、自然の家で過ごすこと。それ自体がすでに「自然体験」であることをFLで子供たちの活動を見ていて考えた。彼らはもとよりそれら経験が足りてなく、自然という存在が真新しいものだからこそ、何にでも興味が持てるし、自然で遊ぶことを楽しみできるのだと思う。

「自然体験」は「私自身もまだまだ自立できていない」と感じるきっかけとなった。私も社会で生きていくための準備をはじめたいと思う。

地域教育文化学部 Sさん

私は真室川町での子どもの自然体験活動支援講座を通し、近年の大きな課題である「子どもの体験不足」を解決するのに声掛けが重要ではないかと考える。なぜなら子どもへの声掛けの仕方によって子どもの安全が左右されるだけでなく自然に対する姿勢や新たな体験にも影響すると考えたからだ。

私がおのように考えるのには2回目の活動が大きく関わっている。2回目の活動では子どもたちの人数が1回目より多くなるだけでなく、一緒に活動する時間も増える。その中で危険だと思った場面が多々あったからだ。ある子どもはトンボを追いかけて道を外れ一人で藪に突っ込んでいたり、またある子どもは急で高い崖を登り始めたりして、つい「だめ!」と言ってしまうときがあった。もちろん危ないことをしているから注意しやめさせることは大切だが、一方で子どもが虫や崖登りに興味を持つこと自体悪いことではないと伝えるべきだと思った。虫に興味があるなら虫について学ぶことができるツアーなどに参加すればいいし、崖登りに興味があるならロッククライミングなどに挑戦してみるチャンスだと思う。危ないからダメだと止めるだけでなく子どもが抱いた興味、関心を尊重しつつ安全にも配慮した声掛けをすることが活動の中で必要だと学んだ。

また1回目の活動では子どもたちが参加する自然体験活動の中に潜む危険をあらかじめ予測し、どういった声掛けをするべきか事前に予測し話し合う時間が設けられた。しかし2回目の活動ではその時間はなく初めから子どもたちの自然体験活動のサポートを行ったので、1回目の活動以上に危険を予測できず、結果的に目の前の子どもたちの対応で手一杯になり視野が狭くなったと感じる。子どもたちの安全を確保しつつ興味、関心を尊重し充実した体験活動を行うためには、事前に起こりうる危険を予測することが大切だ。それにより視野を広く保ち余裕を持つことができ、適切な声掛けにつながるのではないかと考える。

適切な声掛けは子どもたちに多くの体験の機会を与えると施設の方がおっしゃっていたが、私は子どもたちが自然に対し楽しさや面白さなどポジティブな感情を抱くことで次世代の子どもたちの自然体験活動にもつながっていくのではないだろうか。だからこそ、「危ないからやらせない」のではなくどうすれば子どもたちに対し安全に自然の面白さを伝えられるか考え、声掛けを含め適切にサポートしていくことが必要であると考えた。



地域教育文化学部 Nさん

私は2回の子どもの自然体験支援を通して、子どもの自然体験には大人が見守る姿勢が大切であると考えている。子どもにとって初めてのことや、「やってみよう」と思ったことを大人が先回りして何でも手を出してしまったり、子どもの貴重な体験を奪うことになってしまう。大人は最低限の手助けをし、まずは見守る姿勢を見せ、子どもたちが安心して体験活動ができる環境を作ることが大切ではないだろうか。

1回目のフィールドラーニング(めんごキャンプ)では事前に自分たちで危険やトラブルを予測したり、子どもとの接し方についてお話を講師の方から聞いたり、子どもに関わり方をゆっくり考えることができた。その中で、子どもの安全管理と体験の支援についての両立について、どこまで手を出してよいのか境界が難しいという話題があった。当日は一緒にピザづくりをしたり、焚火をしたり、難しいこともあったが、できるだけ子どもたちに体験してもらおうようにした。しかし、実際に子供たちと接してみると、どうしても「～しないでね」「だめ」という行動を制限する声掛けが多くなったり、つい手を出して私たちが作業をしてしまったりすることもあったため、2回目に向けた反省として、禁止を促す声掛けではなく「～をしよう」という前向きな声掛けができるようにしようと考えていた。

2回目のフィールドラーニング(わんぱく探検隊)では、初日から子どもたちと出会い、最初は、子どもたちがどこまで自分でできるのか、どれほど指示が通るのかわからず、自分たちも手探りで活動をしていた。1回目と比べて年齢層も上がり行動範囲も広がり、プログラムもより充実したことで、子どもたちが自分でしなければいけないことが格段に増えていた。指示をするとすぐに動いてくれる子もいれば、勝手に遊びに行ってしまう子、何かに興味を持ち始めると周りが見えなくなってしまう子、子どもたちも個性がはっきりしていた。それぞれに指示を出したり、子どもたちをまとめて行動するのは簡単なことではなく、子どもたちの活動を支援するどころか、自分たちが慌ててしまっていたことが多くあった。しかし、子どもたちのかかわり方について一日目の振り返りを通して冷静に考えることによって、2日目は視野を広げ俯瞰することができ、子供たちの体験をより後押しする前向きな言動ができた。

今回の活動で「体験する」側から「支援する」側になったことにより、子どもたちが自ら体験できる環境を作り、できる限り手を出さずに見守るということの大切さを学んだ。近年では「危ないから」という理由で子どもが自然の中で活動できる場が減少している。公園では遊具が減少し、木登りや水遊びを禁止しているところも多

くある。もちろん、子どもの安全を守ることは必要である。しかし、危険を排除するあまり、子どもたちが身をもって危険を知る経験ができなくなり、自然体験不足により深刻化してしまうのではないかと考えている。必要なことは危険をなくすことではなく、万が一の危険に対応するための見守りである。自然の家のスローガンである「3つのC」、「チャンス・チャレンジ・チェンジ」を大切にし、子どもたちの体験を後押しすることが必要である。

医学部 Sさん

私はこの2回の自然体験支援を通し、協調性の発達を感じました。

これを特に感じたのはピザ作りをしているときです。ピザ作りは、1回目の小学校低学年の子供たちが対象の「めんごキャンプ1」、2回目の小学校中学年の子供たちが対象の「わんぱく探検隊～夏～」の両方で行いました。めんごキャンプの前日には「危険を考えるワークショップ」を行い、子供どうしの衝突を避けるために役割分担をさせるべきだという意見が出たため、ピザ作りの前に話し合いをし、役割や順番を決めました。やりたい作業を譲ってくれる子がいたので、円滑に進めることができました。集団で活動すると自分の思い通りにならないことが多々あるはずですが、そんな中、自分の思いを優先するのではなく、集団の利益を考えられることに驚きと感動を覚えました。わんぱく探検隊では、作業人数を伝えただけで子供たち自身で役割決めを始めてくれました。役割が当たった子が作業をしているときは、他の子は言葉でのアドバイスをしたり、ボウルを押さえるなどのサポートをしていたりしました。めんごキャンプでは、言葉で伝える前に振り分けられていない作業もやってあげようとする場面が見受けられたので、低学年と中学年の違いが感じられました。

また、子供への接し方についての気づきがありました。これに気づけたのは一日の活動の振り返りをしているときです。この振り返りも両方のキャンプで行いました。めんごキャンプでは子供たちがご両親に報告する形で振り返りを行い、わんぱく探検隊では班ごとに活動の感想を伝え合いました。めんごキャンプでは、ご両親が子供の話を聞いている所を見学させていただき、大人側の聞き方の工夫が発見できました。それは具体的な質問をするということです。例えば、「キャンプはどうだった？」ではなく、「ピザ作りではどんなことをしたの？一番難しかったことは何？」と聞きます。ご両親がこのような聞き方をした結果、子供たちは作業行程の説明や役割分担をしたことなど、様々な話ができていました。子供が言葉に詰まっても、我々の働きかけによって言語化できるようになるのだと学ぶと

同時に、我々聞き手の傾聴力や質問の仕方が大きな要素であると感じました。これを受けて、わんぱく探検隊の振り返りでは適切な聞き方を心がけました。わんぱく探検隊の子供たちは、想像していたよりも感想を自分自身でまとめて言語化することができていて、我々が質問する必要がない場面もありました。感想が短く終わった子には、上手くいったことやいかなかったこと、難しかったこと、そしてそう感じた理由などの質問をしました。どの子も素直に質問に答えてくれて、記憶が整理できていたように感じました。私は 2 人称視点で活動に当たっていたので、子供の 1 人称視点の感想や、他の大学生による 3 人称視点の感想をほとんど興味深かったです。

2 回のフィールドラーニングを通し、様々な学びと発見がありました。貴重な体験を経て得ることができたこれらの気づきを、将来子供と接するとき役立てていきたいです。



医学部 Tさん

私は真室川町での活動を通して、子供の自然体験を支援する機会が与えられた。現代における子供は以前に比べて自然とふれあうことが少なくなっていることが明らか問題視されており、そのことを踏まえて私はそんな子供の自然体験への主体性を欠かさないことを主に、体験を支援することを考えた。

第1回の活動では低学年の小学生が主に参加しており私自身はサポーターであったことから主観的でなく客観的に子供の安全性や危険性を考慮することに努めた。子供の包丁を扱う様子や火への距離感が私たち大人とは異なっているため不慣れであることや端から見ると危なっかしい様子が多くあった。そのため小学生やその小学生のペアの大学生へ声かけを行い、けがすることなく活動ができたが、子供へは単純に「だめ」というだけでは子供が行おうとしていた体験の機会を奪ってしまうと考えたため、別の方法を提示することや手本を見せ

ることを意識することによって危険な状況を避けることができたと考える。

第2回の活動では中学年の小学生が主に参加していた。第1回に比べて子供たちの年齢が上がったことによって、子供の中で自身のやりたいことやしたいことが明らかになり活動が活発的、積極的になったことで大学生らの指示が通らなくなる様子が見受けられた。木の棒を持ったり、ふとすると他の班にいつてしまったりとすることがあり、第1回ときとは異なり危険性の観点から「だめ」とはつきりという必要のある場面があった。このことは安全の確保をするためでもあるが他の子供を妨害することで体験の機会を奪うことがないようにするためでもあると考える。しかし場合によっては大学生が進行をすることなく積極的に活動に参加しており、自然を体験することを進んで楽しんでいう様子が見られた。体験の感想を聞いてみてはしっかりとした意見を持っていたことや隙間時間を見つけて自主的に調理器具を洗うことから考えられる。

子供の状況や年齢によってこちらの対応の仕方も異なり、特に主体性を奪わないことを考慮しながら子供の行動について指摘や注意することの難しさを感じることができた。このことを念頭に置いて子供の活動を支援し、自然体験の大切さを伝えることが重要だと考える。

医学部 Nさん

私は2回のフィールドラーニングにおいて、子どもたちができるだけ自分の力で取り組めるようにするにはどうすれば良いか考えながら活動した。また、活動を振り返ってみて、5才程度の子どもと8才程度の子どもでは考え方や行動に違いがあると感じ、それぞれに合わせた支援を行う必要があると思った。

1回目のフィールドラーニング(めんごキャンプ)では年長から小学2年生の子どもたちと一緒に活動した。5才前後の子は、自分の周りに対する興味がとても強く何でもやりたがるが、経験が少ないことや身体的な発達が不十分であることによって、事故を起こしやすいことが課題だと思われる。子供たちと活動する前日に、活動に潜むリスクとその対策についてディスカッションを行った。そのときに一番大切にしようと思ったのは、私たち大人が手伝えることを最小限にし、可能な限り子どもたちが自分で実践できるようにすることである。例えば、ピザ作りにおいてソーセージを包丁で切る必要がある際に、大人が切れば危険はほとんど生じないが、子どもたちの経験の機会が失われてしまう。そこで、私たちの班では子どもに包丁を持たせる前に、みんなでソーセージを抑える手を猫の手にする練習をし、大人がお手本で1本切って見せるという案を考えた。当日はお手本を見せる過程を忘れてしまったものの、みんなで猫の手の練習を行い、切っている間も必要に応じてアドバイスをを行った結果、ケガなく作業を終えることができた。この経

験は支援を行う上で私にとって大きな自信になった。

2回目のフィールドラーニング(わんぱく探検隊)では小学3~4年生の子どもたちと一緒に活動した。8才前後の子は、5才程度の子と比較すると自分の意思やこだわりを強く持ち、周りの人に自分の意思をはっきりと提示するようになって感じた。子どもがやりたくないことや苦手なことを回避しようとする中で、できるだけそれらに取り組んでもらうためにはどうすれば良いかを考えた。そのために意識したのは、「チームで取り組む」ことと、「前向きな声かけをする」ことである。例えば、テントを立てるといふ仕事があったときに「3人でやると早くできるよ!一緒にやろう!」と声かけをし、一緒に乗り越えるという意識を作ることでミッションを達成することができた。

また、班の中で一人家に帰りたくなくなってしまった子がいた。その子は比較的おとなしく、班の活発な子たちと別々になりがちだった。施設の方から、彼が仲間に入れるような、人と人をつなぐ支援を意識してほしいとのアドバイスをいただいた。私は、班の中で会話が生まれるような話題の提供や、「一緒にやろう!」という声かけを積極的に行った。結果的に、彼は目の前のことに注目するようになり、最後までキャンプをやり遂げることができた。後から振り返ると、彼が気持ちを正直に言葉で伝えてくれたからこそ、自分の学びにつながったのだと感じた。

以上の経験から、私は子どものやりたいという気持ちを尊重し、課題と一緒に協力してクリアしていくという姿勢をこれからも大切にしたいと思う。

医学部 Kさん

山形県真室川町の神室少年自然の家でフィールドラーニングをさせていただき、子供たちの自然体験活動支援を行ってきた。

真室川町は、山形県の北部に位置し、秋田県とも接している町だ。町域のほとんどが森林で占められていて、古くから林業で栄えてきた、という歴史がある町でもある。

子供たちの自然体験支援をする前に、最近の技術の進化により子供たちの自然体験が減ってきているというお話を聞かせていただいた。例えば、家にあるのがガスコンロではなくIHのため火を見たことがないという子供がいる、などだ。いろいろなことを子供たちにやらせずに、自分たちがやれば、子供たちが怪我をすることなく活動を終わることができる。しかし、それでは、子供たちの自然体験をする機会を減らしてしまうことになる。そのため、今回の自然体験活動に参加してくれる子供たちに、できるだけたくさんの自然体験活動を安全に行ってもらえるにはどうしたらいいのか、を考えながら活動した。

1回目のフィールドラーニングの時には、幼稚園の年

長さんと小学1、2年生の子供たちと活動した。ピザを作ったのだが、その際に具材を包丁で切るときがあった。包丁を使うことに少し不安を感じたが、子供たち自身で切ってもらうことにし、切る前に一緒に「猫の手」を作ってから切らせたり、切っているときも「猫の手だよー」と声をかけたりして、安全に調理を行えるようにした。声掛けのおかげもあってか、猫の手を維持したまま最後まで切ることができ、怪我無く調理を終えることができた。

2回目のフィールドラーニングでは、小学3、4年生と1泊2日のキャンプをした。焚火をしたのだが、その際には、薪をくべるのも、マッチで火をつけるのも、全部小学生にしてもらった。燃えている最中に薪を入れたりするのが、やけどをしないか少し不安だった。しかし、焚火をするということは、現代の普通の生活ではめったに経験することができないので、せっかくの機会をつぶさないように小学生自身にやってもらうようにした。危ないことがあると悪いので、「もう少し離れていれてね」とか、「しゃがんでいれるんだよ」というような声かけをするようにした。怪我をすることなく、しかもとても楽しそうにしている、とてもよかったと思う。

2回のフィールドラーニングを通して、子供たちの好奇心の強さを感じた。いろんなことに対して、「自分がやる!」と言ってくれた。自然体験は普段の生活ではあまりできないものだから、その好奇心を大切にしてください。皆さんのことに挑戦できる環境が増えたらいいなと思った。



医学部 Mさん

私は「子どもの自然体験支援講座」に参加し、2度のフィールドワークを通じて、子供たちが成長する過程で自然と触れ合うことがどんな影響をおよぼすのかについて考えながら活動に参加した。なぜなら、最近では「火」を見たことがない子供がいたり、自然と触れ合う機会が少なく、虫に慣れていない子供がいたりすることが多くあることを知ったからだ。

1回目の活動では、5～6歳を対象としてピザ作りやキャンプファイヤーを行った。活動全体を振り返って、5～6歳の子供たちは好奇心旺盛で色々なことを聞いてきたり、ピザを作っている最中でも興味のあることがあったらそっちへ走って行ったりと危ない場面もあったため、安全面に配慮することが重要だと感じた。また、自分のことを自分ですることが難しく、私たちが手伝うこともあったが、この活動を通じて子供たちの成長をはかるためにもできるだけ子供たちが主体となって活動するように必要以上に手伝うことがないように心がけた。

2回目の活動では小学3、4年生を対象としてピザ作り、キャンプファイヤー、テント建て、夜の散歩を行った。1回目の子供たちと比べて、自分のことは自分でできるが多く生活面ではあまり手伝いは必要なかったと感じた。しかし、少し目を離している間に遠くへ行ってしまうと探すということがあり、2、3人でも子供たちを同時に面倒見ることの大変さを痛感した。また、1回目の活動を振り返って注意すべき点や次回に気を付ける点として、ピザ作りでの包丁の使い方やキャンプファイヤーでの火に近づきすぎないなどが挙げられ、それらを意識して活動することができた。夜の散歩では、明かりなしで暗闇を手探りで進み、コースを一周した。暗闇の中、ゆっくり気を付けながら歩くことで、昼間には気づかなかった虫の音や木々や枝が揺れる音を聞き、自然を五感で感じられたいい機会だったと感じた。

2度のフィールドワークを通じて、子供たちが自ら体験したいという気持ちを大切に、子供たちの好奇心を尊重することが大切だと感じた。子供たちの成長過程で自然体験は子供たちの好奇心をはぐくみ、五感を刺激して、感受性が豊かになる影響を与えると考えた。また、今回の活動を通じて子供たちが自分で自分の身の回りのことができる力や問題を解決する力が養えたと考えた。このように自然体験によって身につく能力はたくさんあり、子供たちの成長にも役立つため、もっと多くの子供たちが自然体験をする機会が設けられればいいなと感じた。

医学部 Wさん

私は、2回のフィールドワークを通して子供たちとの関わり方を学びました。近年、世の中が便利すぎて子供達は自然と触れ合ってきてなかったり、自然体験をしてなかったりしています。オール電化の家が増えてきて火を見たことのない子供達が増えてきています。そこで、私は今回のフィールドワークではできるだけ子供達にやらせることを意識して子供達と関わるようにしました。

1回目のめんごキャンプは、幼稚園生と小学校低学年の子供達でした。私は、担当の子供はおらず、サポート係として子供達の面倒を見たり、子供達と関わっている大

学生のことをみていました。ピザ作りと焚き火体験をしました。ピザ作りでは大学生たちがわかりやすい言葉を使って、作り方を説明していました。また、こねるときは全員がこねることができるように交換しながらこねてました。材料を切るときは自分の分は自分で切らせ、大学生の分もきらせてい子にきらせていました。包丁を使わせるのは危ないのではないかと思いましたが、猫の手ができてたり、ゆっくり丁寧に使えたりしていたので安心しました。勝手にできないと思いついてはいけないのだなと感じました。次に焚き火体験をしました。子供達の中には、火を怖がる子がいたり、逆に火を触ろうしたりする子がいました。どこまでやらせていいのかわからず、最初は火を見せるだけだったが、後半は木をいれさせたりしました。めんごキャンプではすぐにどこかに行ってしまったり、よく話せなかった子がいました。みんなに向かって話しかけると、自分のことだとは思ってくれない子供達が多かったので、一人一人の名前を呼んで話しかけたりしました。また、注意するときは命令口調にならないように心がけ、してはいけないのではなく、こっちの方が良いと思うと提案をするようにしました。そうすることでいうことを聞いてくれました。

2回目のフィールドワークは小学3、4年生でした。今回のフィールドワークは担当の子供達がいました。小学3、4年生は幼稚園生と比べてやりたいことがはっきりしていたので、より自由な子供が多かったです。最初にテント張りをしました。指示を聞く前に動いてしまう子供が多かったり、自分のやり方があってると思って、大学生の意見をなかなか聞かない子もいました。次に、ピザ作りをしました。こねたい子供が多く、みんなが手を伸ばしてしまい上手にできなかったため、1人十こねずつして交換しながら回していきました。具体的な数を言うとすんなり理解してくれました。その次にナイトハイクをしました。怖がってる子がとても多かったです。ゴールしたときにたくさんの星と蛍を見ることができ、自然と触れ合うことができました。最後に川遊びをしました。チーム内で魚をとりたい人、泳ぎたい人、水が怖い人がいて全員がバラバラな行動をとりたがっていました。全員が納得できるようなことをするのが難しく、泳ぎたい子供達に譲ってもらい、浅いところで魚をとりました。めんごの子達には優しく丁寧に関わることを心がけたが、わんぱくの子達には時には厳しく関わるようにしました。

今回のフィールドワークでは同じ子供でも年齢が違っていると関わり方が違うということを学びました。

医学部 Tさん

私は、フィールドラーニングを通して、自然と触れ合う体験活動が私たちに良い刺激を与えてくれることを再確認した。今回の活動で行った非日常的な経験の数々は、私たちの五感を研ぎ澄まさせ、知見を広げ、そして必ず今後の糧となるものばかりであった。また、今回の

活動では、自身が体験活動をするだけでなく、自然と接する子どもたちの様子を間近で見られたことで、より一層体験活動の有意義性を感じ取れることが出来た。

今回の活動で、ピザ作りやたき火、テント泊やナイトハイク、さらに川遊びなど様々な日常では味わえない刺激を得たわけだが、特に五感が研ぎ澄まされたと感じたのはナイトハイクだ。暗闇の中、森を進んでいくと、段々と瞳孔が開いて薄らと見える木々や、自分や他の誰かが踏む木の枝の音、足元の土の感覚や子どもが怖がりながらしがみついてくる感覚など、とても良い経験が出来たし、この経験から、夜中に森を自身の五感に頼りながら歩くと昼間に何気なく歩くのとは全くもって違った感覚が味わえることを学んだ。そして、2回のフィールドラーニングの中で最も印象に残っていると言えるのが川遊びだ。ここでは、自然の面白さも怖さも感じる事ができた。具体的には、自身もそうであったが子どもたちの中には川の少し流れが急な場所で流されるのが怖かったり、飛び込むのに勇気が出なかったりして、ここでまず自然の怖さを感じたと思う。ここで、自然の怖さを知ることは自然災害への興味関心にもつながりとても良い経験になったと考える。そして、その一方で、特に川への飛び込みは一度してみるととても面白いことに気付き、その後何度も飛び込んだ。また、川に流される時も足を前にして正しい姿勢をとっていれば天然のウォータースライダーを子供たちと一緒に、とても楽しむことが出来た。そして自然の面白さに気付かされた。このように、非日常的な経験は、私たちに自然に対して考える機会を与え、知的好奇心や自然に対する知識を育んでくれると考えた。

また、自然体験をする子どもたちを見て、自然は子どもたちを活発にし、そして自立するのを助けてくれると感じた。時には、勝手に森の中に走っていきこうとしたり、棒を振り回したりと活発過ぎて危険だと思う部分もあったが、かけっこをしたり、木登りをしたり、私たち大学生を誘って鬼ごっこをしたりと予定されていた活動以外の自由時間でもずっと自然の中で元気に動き回っていた。そして、特にピザ作りやたき火、テント設営において、大学生の方から全て説明して指示するのではなく、自分たちで考えて行動する場面も多く見受けられ、一生懸命な姿が見られた。加えて、分からないときは私たち大学生をはじめとした大人に質問することもあり、このようにしてひとつずつ学んで、自分のものにしていくのだと考えた。

今回、子どもと話をし、ひとつとても衝撃的だったことがある。それはお昼の休み時間は校舎内でタブレット等を用いて友達と遊んでいる子が多いということだ。私たちのような学校にタブレット等がなかった世代は、休み時間と言ったら校庭で鬼ごっこをしたり、サッカーやバスケットボールをしたりと活発に体を動かしていたが、今はもう違うのだと気づかされた。このようなこ

ともあり、今の小学生たちは自身の体で直接自然と触れる機会が少ないのだと考えた。フィールドラーニングの初日で聞いた、神室少年自然の家の職員の方の「今は火を一切見ずに育ってきた子がいる」という話も衝撃的だったが、2回のフィールドラーニングが終わってからどこか納得した。そして、今回自身が体験活動を通してたくさん学びや気づきがあったことや、自然と触れ合う子どもたちが全員充実した笑顔を見せてくれたことなどから、自然体験をより多くの子どもたちにしてもらえるように、教育委員会や自然の家が連携して自然体験不足の子どもたちに体験活動の機会をより多く与えられるようにすることが必要だと感じた。

医学部 Aさん

子供が安全に活動を行うためにはどのような支援をすべきなのだろうか。

現在子供の自然活動の機会は減少している。子供の活動を支援する上で何を大切にしていけばよいのだろうか。今回のフィールドラーニングを通して学んだことを基にレポートを書きたいと思う。

活動について

今回のフィールドラーニングでは子供の自然活動を支援した。第1回のフィールドラーニングでは幼稚園の年長から小学校2年生までの参加者とめんごキャンプを行った。子供一人に対し大学生一人が付き、活動を行った。第2回では小学校3年生から4年生までを対象に宿泊を伴うキャンプを行った。子供5人の班に大学生2人で活動をした。

子供の自主性を尊重する支援

今回の活動では幼稚園の年長から小学校4年生の子供の自然活動体験の支援を行った。活動では火を扱ったり川に入ったりなど危険が伴う活動が多くあった。その活動を行う中で子供が「やりたい」と思う自主性を尊重することが大切だと感じた。子供が安全に活動を行うことのみを考えれば危険な活動はさせない方がよいだろう。しかし、子供の豊富な活動を支援する上では様々な体験を提供すべきである。そこで今回学んだことは子供を抑制することで安全に活動するのではなく、事前に考えられる危険を予測して注意を促すということが大切ということだ。

具体的には、焚火を行う際に子供が火に薪をくべるという行動に対して「危険だから離れて見ているだけにしなさい」というのではなく、「火にはしゃがんで近づくように」と注意をし、活動は制限しないということが挙げられる。このような支援こそが子供に豊富な経験を提供し、かつ安全性を担保する最適なものであると考えた。

集団に対する支援

1回目のフィールドラーニングでは子供1人につき

大学生が1人ついての活動であったため子供の「やりたい」を尊重しやすかった。しかし、2度目のフィールドラニングでは子供5人に対して大学生2人であったため、個人の「やりたい」を尊重することと集団行動の2つを両立させることは非常に難しかった。1人の活動のために他の班員の活動機会が奪われてしまう場面や集団行動が取れないといった問題も発生した。

このような集団に対する支援活動では、子供の発達速度が人それぞれ違うということがわかった。集団行動を意識して活動が出来る子供もいればそうでない子供もいる。そのうえで安全に活動するためには支援する側のスタッフや大学生間での情報共有が欠かせないということがわかった。

活動を通して感じたこと

今回の活動を通して子供に安全性を担保し、豊富な活動体験をさせるための方法や支援メンバー間での情報共有の大切さや子供との関わり方について多くのことを学んだ。今後の人生において子供とかかわる際には今回学んだことや体験したことを生かし、自信を持って楽しく子供と関わっていきたいと考えた。

医学部 Kさん

今回のフィールドワークの中で自分の思い通りにいかなかったことが多くあった。講師の方に「思い通りにいかないことが当たり前だ」と言われたとき、あったとしても予測できる範囲内だろうと感じていた。しかし、活動していくと予想外のことだらけだった。

一回目の活動では、幼稚園年長から小学二年生の子を対象とし支援を行った。支援を行う前に班ごとに起こりえる危険な場面を予想し、模造紙にまとめる活動を行って事前に気を付けるべき場面を確認しあった。幼少期の子供たちの目線に立つことは難しく、危険になりえるケースを挙げていったとしてもどうしても普遍的なものしか出てこなかった。更に、大前提として、子供たちの自然体験活動に制限をかけないことが重要であり、活動の規制線をどこでかけるのか、その線引きが難しかった。

二日目の実際に支援する時は前日の活動もあって問題に発展するようなことは起きなかった。危険が起こり得そうなことを事前に挙げ、対応策を練ることが自然にこの結果に繋がっていたと思う。

二回目の活動では、小学三年生と四年生を対象とした支援を行った。一回目よりも年齢を重ねた子供たちを相手にするため、ずっと注視しなければならないわけではなく、危険なこともそこまで起こらないと考えていた。しかし、実際はそうではなかった。前回よりも活動内容がより充実し、一緒にいる時間も長く、そして何よりも予想外だったのは皆が活発的であったことだ。私が一回目で担当した子は人見知りでおとなし

い子であった。二回目で担当した子は皆が積極的に自分から動いてくれる子で、自由時間もたくさん動いていた。自然体験活動に参加経験がある子が多かったからかもしれない。

一日目の夜には班のメンバーでうまくいかなかったことや共有したいことを伝えあう話し合いの場が設けられた。二人程のメンバーに対して子供五人の活動をサポートしていたため、班全体を俯瞰して支援していなければならなかった。ただ、私は子供の支援活動を行うのが初めてだったため、支援する中で至らない点が多かった。例えば、他の子を見ている中で見ていない子がどこか行ってしまうケースが異常に多かった。毎回気にしようと思うのだが、一瞬の隙を作ってしまうと所在が分からないことがよく起こった。二回目の活動は大半が班活動だったため、初めは協力し合う関係性の構築が難しく、手間取ることばかりだった。そのため、二日目からは子供同士と一緒に活動しあう機会を多めに作り、注視する範囲を減らすことと親睦を深める機会を増やすことを念頭に支援を行っていった。それがどう影響したかは一日のうちで判断できなかったが、次にまた子供たちが出会い、ともに活動するときに影響を与えられていれば幸いだ。

他の班もそれぞれ反省点を述べ、対応策を考えたことで二日目はそこまで苦戦してはいなそうだった。一日目の夜にそれぞれの悩みを共有しあったことで、自分たちの班活動に他の班の方の意見を反映することができた。この支援体制の中には、子供と私たちだけでなく、支援する側での情報共有も重要であることが分かった。



農学部 Hさん

私は子供の自然体験活動支援講座で「めんごキャンプ」「わんぱく探検隊」の活動に参加して子供たちと触れ合うことになって、子供のうちに様々な体験をして事の大切さや子供たちの何でもやってみようとするチ

チャレンジする気持ちの大切さを学んだ。

第1回目は6月1～2日の日程でめんごキャンプに参加して年中から小学校2年生までの子供たちと一緒にピザづくり体験や焚火体験を行った。1日目は大学生だけでめんごキャンプでの活動を事前に体験して子供たちが苦戦しそうなどころや注意すべき点を確認したり、その対策などを話し合った。自然の家のスタッフの方から「火を見たことのない子供もいる」という話を聞いて驚いたし、2日目の活動がうまくできるか不安に思った。2日目はピザづくりや焚火体験を行った。子供たちと顔を合わせてアイスブレイクをして体験活動に移ると前日に感じていた不安は子供たちの活動への取り組み方からあまり感じなかった。様々なことをやらせてとっていたり大学生に話しかけて遊んでいた。ピザのレシピや刃物や火を扱う上での注意事項は安全に楽しく活動してもらうためにも大切なことだと思った。年中から2年生までの子供たちは目を離すと大変だというように考えていてあまり自由にしてあげられなかったと思ったがその中でもできる事できない事に関係なく様々な活動に積極的に参加して子供のパワフルさを感じた。家に帰ってからもピザを作りたいと言ってくれた時はうれしかったし子供たちの自主性や探求心が養われていくのを感じた。

第2回目は6月29～30日での日程で「わんぱく探検隊」に参加して小学校3～4年生の踊裳たちと一緒に様々な体験を行った。1日目はピザづくり、テント設営、ナイトハイク、焚火体験などを行った。今回私はサポートとして各班の補助をメインに活動した。今回は子供たちの年齢が上がっていたことで自分のことは自分で出来るという子が多い印象だった。テント設営で「やったことがある」と言って私や周りの子を引っ張って行ってくれた子がいた。ほかにも整列の時に進んで周りを並ばせようとしてくれた子やナイトハイクの時に「足元が暗いから気を付けて」と周りに気を遣うことのできる子もいた。前回と違って子供たちが自分なりに考えて行動できるようになっていて自主性やリーダーシップ、協調性が高まってきていることが感じられた。2日目は川遊びをした。子供たちはとても冷たい川でもぐんぐん進んでいって虫を捕まえたり、川に流れたりして遊んでいた。自然の家のスタッフの方に生物の捕まえ方を教わり各々好きな場所で生物を捕まえ、知っている生き物がいると説明してくれて知らない生き物は私たちに質問をしてくれた。子供たちの未知のものへの好奇心は特に強いものがあった。川下りの活動の時に私と一緒に活動していた子が体調を崩してしまい子供と関わるときの体調管理の大切さやより周囲へ目を向けることの大切さを感じた。

私は今回のような活動は未経験で少し不安もあったが子供たちの元気な姿や成長を見ているうちに不安も

なくなりどうしたら楽しんでもらえるか、どうしたら安全に活動できるかということを考えることができた。子供たちの自由な姿から考えさせられることも多く自分自身も少し成長できたように感じた。

山形大学フィールドラーニング授業プログラム

プログラムテーマ：知られざる大蔵村の歴史と文化、郷土の食を求めて（大蔵村）

		1回目	2回目
日 程		【1日目】5月25日（土） 8:42～9:44 山形駅発 ～ 舟形駅着 9:45～10:20 舟形駅 ～ 肘折いでゆ館 10:25～11:20 オリエンテーション 11:30～12:30 昼食 12:45～15:15 肘折温泉街散策 15:30～15:45 「肘折のこけし」制作見学 15:45～17:00 こけしストラップ作り 17:00～17:10 移動（つたや肘折ホテル） 17:10～18:00 ホテルチェックイン・自由時間 18:00～19:00 夕食 19:30～20:00 「肘折温泉の湯治文化」について 20:00～23:00 入浴・レポート記入・自由時間 23:00 消灯	【1日目】6月1日（土） 8:42～9:44 山形駅発 ～ 舟形駅着 9:45～10:10 舟形駅 ～ 赤松生涯学習センター 10:15～10:25 オリエンテーション 10:30～11:30 笹の葉採り・下処理 11:30～12:45 昼食 12:45～14:00 笹巻作り 14:00～14:20 移動（中央公民館） 14:30～17:00 大蔵トマト見学・農業体験 17:00～17:30 移動（赤松生涯学習センター） 17:30～18:00 休憩 18:00～19:00 夕食 19:00～ 入浴・レポート記入・自由時間 23:00 消灯
		【2日目】5月26日（日） 6:30 起床・肘折朝市見学 7:30～8:30 朝食 8:30～8:45 荷物準備・集合 8:45～9:00 移動（四ヶ村地区の棚田） 9:05～9:20 棚田保存活動について 9:30～11:30 棚田田植え体験 11:30～11:50 移動 11:50～12:50 昼食（そば処 寿屋） 12:50～13:30 移動（赤松生涯学習センター） 13:30～14:45 「合海田植え踊り」体験 14:50～15:50 レポート記入・荷物整理 15:55～16:10 赤松生涯学習センター ～ 舟形駅 16:21～17:23 舟形駅発 ～ 山形駅着	【2日目】6月2日（日） 6:30 起床 7:30～8:30 朝食 8:40～10:00 レポート記入 10:15～10:30 移動（合海地区） 10:30～11:30 「合海田植え踊り」見学・参加 11:30～12:00 移動（赤松生涯学習センター） 12:00～13:00 昼食 13:00～13:15 移動 13:15～14:45 「大蔵わさび」加工体験 15:00～15:50 レポート発表・評価 15:55～16:10 赤松生涯学習センター ～ 舟形駅 16:21～17:23 舟形駅発 ～ 山形駅着
電車降車後の移動手段		公用車	公用車
宿 泊 料 金 必 要 経 費 小 計 合 計	宿泊料金	6,500円	0円
	必要経費	3,500円	6,000円
	小計	【当日現地で支払】10,000円	
	合計	16,000円	
学生が準備するもの		<ul style="list-style-type: none"> ・屋外で活動するため汚れてもいい動きやすい衣服、靴 ※「田植え体験」の際は、上下ジャージに裸足（サンダル可）で行います。ハーフパンツも持参してください。（汚れてもいいように、着替えは多めにお持ち下さい。） ・洗面用具・お風呂セット・着替え・屋外活動用バッグ（リュックサック等）・筆記用具・メモ帳 ・雨具（カッパ・ポンチョ等動きやすい物）・汗拭きタオル・カメラ（班で1台・スマホでも可能） 	
留意事項		○荒天の場合、一部スケジュール変更となる場合があります。	

授業記録

○活動レポート「私はもがみで考えた！」

理学部 0さん

私は大蔵村に実際に足を運んで、画面上では気づくことができない大蔵村の魅力に気づくことができました。その一方で、大蔵村の方々はその魅力を維持するためにさまざまな困難に直面していることも知りました。

まず、大蔵村が抱える問題として、文化を継承する若者がいないことが挙げられます。大蔵村には、肘折地区唯一のこけし職人の鈴木征一さんがいらっしゃいますが、現在は弟子をとっておらず、伝統ある肘折こけしや鈴木征一さんの技術が受け継がれません。他にも、村の歴史や肘折に残る伝説、湯治文化を語り継げる人がどんどん減っているという状況もあります。具体的な改善策は、村の歴史や肘折に残る伝説、湯治文化に興味を持ってもらうことと映像や文書に残すことだと思います。

その次に、農家の高齢化が挙げられます。大蔵村にはおいしい食材や特産品がたくさんあり、トマト農家の伊藤貴之さんは、若者が職業選択するときには農家になるという選択肢がないことが大きな要因だとおっしゃっていました。具体的な改善策は、農業を趣味としてはじめ、そこから職業にしていくことだと思います。趣味として始めるのも、まず体験してもらい楽しいと思ってもらうことが必要不可欠です。現在、農業を始めるための知識やノウハウは周りの農家の方々から教えてもらうことができ、初期費用もあまりかからないようになっていますが、始めるハードルをもっと下げたほうが良いと思います。そこで、無料のゲームアプリを開発し、農業をゲーム感覚で楽しめるようになれば、若者の興味を引けるんじゃないかと思いました。ゲームの中で農家の方とつながりを作り、農業体験ができる仕組みがあると良いかと思いました。

大蔵村には、日本の棚田百選にも選ばれた棚田があり、そこで作られた棚田米は平地で作るお米よりもおいしいのですが、製作コストが高いこともあり、食べてもらう機会が少ない状況もあります。

今回のフィールドラーニングを通して、大蔵村の魅力を広めるためには、実際に足を運んで体験してもらうことが大切だと思いました。

理学部 Kさん

私はこのフィールドワークにおいて大蔵村の無数の魅力と厳しい現状を目の当たりにしました。

この活動の中で知ることのできた魅力は限られているとは思いますが。しかし大蔵村を好きになるには十分すぎるほどでした。温泉街にパワースポット、農業や気候はもちろん魅力に感じましたが、何よりも心惹かれたのは大蔵村の人々が楽しそうに暮らしていたことです。地

域の子供がカエルを捕まえた嬉しそうに報告してきいたり、大人たちが朝から酒を飲み、笑いあって騒いでいたりしているのを見て憧れまでも抱きました。村人たちが日々の生活を学生のように楽しむ姿は私の望む大人像なのかもしれないという新たな気づきを得ました。これは実際に現地に出向いたからこそ得られたのだと考えます。

そんな素晴らしいところですが大きな課題がありました。簡単に言えば人口減少です。大蔵村は山形県の中で最も人口の少ない市町村です。フィールドラーニングでお世話になった農家さんが無償で自分の農場を渡してもいいとおっしゃっているところからも事態の深刻さが伝わってきました。活動の中では村議会の方と今後の解決策を真剣に考える時間がありました。そしてそのなかでは村外から農業をするように誘致することや村民に農業を継がせることなど、農業にフォーカスして人口を増やそうとしていることがわかりました。話し合いでは、村民には村の魅力や大人たちが大蔵村で過ごすことが楽しいことを伝え、村民でない人には大蔵村の農業を知らせることが一つの結論として出ました。わたしはその後考えた結果、村人ではない人に農業の魅力を伝え、さらに大蔵村に来てもらうことは難しいのではないかと思います。これには農業を始めることと大蔵村に来てもらうことの二つの手間がかかるからです。どちらかを絞る必要があると考えます。ここで私は農業を始めようとしている人を村に誘致することを提案します。これなら農業を始めようという壁を取り除けるからです。そして大学の農学部には農業を始めようとしている人がたくさんいます。なかには研究をする人もいます。そのうえ大蔵村は特殊な気候なので、それによって農業における利点が多くあると思います。したがって私は大学の農学部に出向き大蔵村で農業をする利点を伝え入村してもらうことを個人の結論にしました。実際に農学部の班員は大蔵村の話を知ると魅力に感じている様子でした。

このフィールドワークで、問題解決を試みる際には現地に出向くことが重要であることを学びました。ほかにも大蔵村の魅力を知れたこと、班員と仲良くなれたことなど得られたものが多く、良い活動になったと思います。お世話になった方々と班員に感謝しています。

医学部 Sさん

私はフィールドラーニングの4日間を通して、大蔵村の農業と文化について学びました。

農業について、四ヶ村の棚田で田植えを体験させてもらい、大蔵トマトを見学し、伊藤貴之さんに大蔵村での農業についてお話を聞きました。田植え体験では、人生で初めての経験をすることができ、普段何も考え

ずに食べていたお米は、一つ一つの苗をきつい体勢になりながら植え、手間暇かけて育てられていることを実感し、食べ物へのありがたみをより強く感じられるようになりました。また、伊藤貴之さんから農業についての話を伺い、現在の日本の農業は人数がとても少なく、質がおちてきていると話していらっしやいました。大蔵村は少子化に加え、人口流出にも拍車がかかっているとも聞きました。私は農業人口の少なさの原因は、農業という職業の実情があまり知られていないからではないかと考えます。どのくらい稼げるのかや、どのくらい大変なのかなど、全く知らなかったので、農業についてもっと情報を発信すべきだと思いました。ですが、どれくらい大変なのかは、実際に体験してみないとわからないので、今行われている、フィールドラーニングやふるさと納税の返礼品として農業体験ができるといった活動をもっと増やしていくべきではないかと考えました。

文化については、肘折こけしと肘折温泉の湯治文化、合海田植え踊り、笹巻き作りを体験しました。肘折こけしの工人は鈴木征一ひとりであり、鈴木さんが弟子になりたいと言ってくれる人がいるが、結構大変らしく、弟子をとらないようにしようかと考えているとおっしゃっていました。ですが、このような文化が継承されないのは、とても残念なことだと思いました。また、湯治文化とは、湯で治めるというもので、「療養」型と「保養」型があり、肘折温泉は「保養」型であると伺いました。肘折温泉に実際に入ってみて、もっといろいろな人を知ってほしいと思いました。合海田植え踊りは全部の家をまわって踊りあるいていると聞いてとてもすごいなと思いました。笹巻き作り体験では、今まで名前は知っていたけど、作ったり食べたりしたことがなかったので、実際につくってみて、地域の方の話を聞いて、とても地域に根付いた文化だなと感じました。

大蔵村での経験を通して、もっと自分の地域の文化や歴史や農業について知るべきだと思ったし、今まで自分が地域のことにに関して、無関心だったなと反省しました。これからはもっと地域のことにについて考えながら生活しようと思いました。

工学部 Cさん

1. はじめに

5月25日～5月26日、6月1日～6月2日の4日間にわたって大蔵村でのフィールドワークに参加した。山形県の中央部に位置する大蔵村は、月山・葉山・鳥海山を望むことのできる自然豊かな村であり、約2821人と県内で最も人口が少ない。大蔵村でのフィールドワークを通して、人々と交流をしながら、自然や伝統、人々の生活について学びを深めた。本論では、フィールドワークの活動報

告と課題について述べていく。

2. 大蔵村の概要

①大蔵村での体験と活動報告

まず、肘折温泉郷について述べていく。肘折温泉は、開湯1200年受け継がれる秘湯で大蔵村の観光産業の要となっている温泉街であり、20軒ほどの旅館が立ち並んでいる。「肘折」という由来は、はるか昔、一人の老僧が肘を骨折してやっとの思いでこの地にやってきた際に、湧き出ている温泉に入ると瞬く間に肘が治ったという逸話からきている。また、朝市、地蔵倉、ひじおりの灯、開湯祭といった観光産業がある。私たちも実際に肘折温泉に宿泊し朝市を見学し、地蔵倉へ登り、温泉街の雰囲気や叙情を味わった。

次に、合海田植え踊りについて述べていく。毎年、田植えが終わり、農作業がひと段落する6月の第一日曜日に合海地区では田植え踊りと大黒舞が披露される。田植え踊りは、約400年に百姓の労を慰め、五穀豊穡を祈るために生まれた。年月が経ち、この踊りの継承が途絶えかけたため、大正の頃に保存会が結成された。また、福をもたらしめでたい踊りとして大黒舞も踊られている。大黒舞が踊られるようになったのは、昭和になってからと言われている。合海田植え踊り保存会は、地区の子供たちへの踊り指導を行い、幅広い世代間でのコミュニケーションが生まれ、地区内に活力が生まれている。また、保存会の方々に踊りの歌の意味や踊りを実際に教えていただいて、田植え踊りへの理解を深めることができた。

②発見した課題と解決策

これらの体験や講話から、2つの課題を発見した。一つ目は、肘折温泉についての課題である。肘折温泉では、震災、コロナ、浸水、道路崩落、大雪などの影響によって宿泊者が大幅に減少している。その中でも、新聞やテレビなどといったメディアが一部のみを大きく切り取って誤った認識を植え付けてしまったことが大きいと考えられる。そこで、どのようにSNSを活用し、どういった方法で情報発信を行っていくかが非常に重要だと考えた。誰もが手軽に見ることのできるX(旧Twitter)、Instagram、TikTokでの流行ののった情報発信が効果的と考えられる。

二つ目は、合海田植え踊りである。現在の課題としては、担い手・指導者の育成が不十分であることが挙げられる。継続的に指導に参加するメンバーが少なくなってきたことや、村の若者が村外へ移住してしまうことが原因だと考えられる。現在の活動として子供たちに指導しているが、結局はその子供たちが大人になった時に村で踊りを続けているかが問題である。そこで、進学や就職のために村を離れたとしても、リモートで踊りの練習や指導を行ったり、帰省時に踊る機会を設けたりしたらよいと考える。そうすることで、出身者の2世、3世なども含め、多くの人が踊りに関わることになると考えられる。

3. 結論

本論では、大蔵村の肘折温泉、合海田植え踊りについて考察した。そこから見えてきたことは、時代の流れと共に変化する人々の価値観や考えを考慮しながら、大蔵村の歴史や文化を守り継承していくことの難しさである。これらのことを踏まえ、これからも大蔵村の歴史や文化について考えていきたい。



工学部 Gさん

私たちは大蔵村にフィールドラーニングの授業で訪れ、地域の方々にお話を聞いたり実際に体験をしたりして大蔵村について学んだ。一泊二日を二回行い、それぞれ様々な体験をした。

第一回目の一日目は大蔵村の肘折地区について学んだ。最初に肘折地区の肘折こけしの制作見学とこけしの絵付け体験をした。現在肘折のこけしの継承者である鈴木征一さんに、肘折こけしは特徴として頭部内部が空洞でその中に小豆を入れ振るとマラカスの様に音が鳴る。これは、こけしは元々子供の玩具として作られていたためその名残としてあるものだと教えていただいた。現在、こけしは伝統の絵付けのみではなく時代の変化に合わせて様々なデザインに変化しているものもあり、日本の伝統文化の時代の変化を感じられた。次に肘折温泉とその歴史について学び、肘折温泉の聖地地蔵蔵に実際に訪れたり、温泉街を散策したり、温泉に入浴したりした。肘折温泉は開湯 1200 年の歴史がある温泉で、その効能は折れた両肘を完治させるほどのものであると伝説があり、湯治文化が根強く残っている。しかし、肘折地区の道路が崩落した際に新聞の報道により事実と異なった印象が与えられ、一時期温泉にお客様が来なかった時期があった。このお話を聞き、情報伝達は正確さが重要であり、語弊を生まぬよう伝える必要があり、その情報による影響をしっかりと予想するべきだと考えさせられた。

第一回二日目には田植え体験と田植え踊りの体験を

した。四ヶ村の棚田は日本棚田 100 選に認定された棚田であり、地域の方々には四ヶ村の棚田米をブランド化させ地域活性化を図ろうと取り組んでいる。合海地区の田植え踊りは約 400 年の歴史があり、文化の継承のため小学生が毎週踊りの指導を受け「合海子どもタウエーズ」を結成している。

第二回目の一日目には笹巻づくり体験と大蔵トマトのビニールハウス見学をした。笹巻は山形県の伝統食で、もち米を笹の葉で包んで熱湯でゆで上げ保存できるようにしたものである。大蔵流の笹巻は熱湯で約 1 時間ゆで上げるが、他地区では 2～3 時間ゆで上げたり、灰汁水でゆでたりとさまざまである。また、笹の巻き方や結びひもの巻き方も地区によってさまざまであり、地域性が豊かな伝統食であることが分かった。大蔵トマトは「夏秋トマト」という品種で、夏から秋にかけて約 4 か月間出荷をしている。大蔵村は豊富な雪解け水と地下水があるため、トマトの栽培に適しており、みずみずしくおいしいトマトが収穫できる。しかし、新規農業者が少ないことが課題となっている。その対策として私は 1～2 年ほどの実際に一緒に作物を育てながら農家の方々に農業について学ぶプログラムの作成を考えた。新規に農業を始める時には、作物の管理の仕方や肥料の与え方、病気や自然災害に対する対策と起きてしまった時の対処法など知識がないと始められないというハードルがあると私は考えるため、プログラムの作成をし、新規に農業を始めたいが知識や経験がなくあきらめてしまう人たちに対して実施すれば、ハードルが下がり農業を始めやすくなると私は考える。

第二回目の二日目には田植え踊りと大黒舞の見学と大蔵わさびの加工体験をした。田植え踊りと大黒舞の見学の時には、大蔵村の地域の方々の人と人の近さを実感した。大蔵わさびは大蔵村の豊富な雪解け水や地下水とその水温、澄んだ空気がわさびの栽培に適しており、香りが強いわさびが育っている。

大蔵村フィールドラーニングを通して、大蔵村の歴史や文化、伝統芸能、伝統食、観光、農業について学んだ。それぞれ様々な良さや大蔵村ならではの特徴を生かしたものとなっており、地域の特色について知れた。

農学部 Wさん

今回私はフィールドラーニングを通して大蔵村を訪れ、大蔵村の歴史、食、文化を肌で感じました。また、実際に訪れたことで、ネットと違い、実際に訪れたからこそそのことを様々な感じました。

まず、大蔵村の特色として肘折温泉や四ヶ村の棚田、大蔵ワサビなど多くの伝統的な文化や、建物が多くあります。フィールドラーニングでは、これらの文化や食に

触れてきました。

初めに肘折こけしの製作する様子を見学し、作り立てのこけしに触れてみたりしました。現在は、鈴木征一さんが一人で継承しており、自身の職人になるまでの大変さや、こけしの現在の在り方についてお話いただきました。また、継承者がいないこともお話いただきました。次に地蔵蔵や肘折の温泉街の歴史を話していただきながら、散策し肘折の成り立ちや、イベントとしてひじおりの灯などの活動をしていることを聞きました。温泉街を散策してみるとあちこちに温泉があり、湯治場として栄えている理由を感じました。さらに昔の郵便局や石碑があり、温泉同様あちこちに歴史を感じる場所があり、大蔵村の歴史を多く感じられる場所でした。ひじおりの灯では、温泉街の雰囲気にあった美しい灯籠絵がみられ非常に魅入られました。次の日は、棚田に田植えする体験をし、実際に田植えをする大変さ、棚田の現状、地域の人と協力する楽しさを感じた。しかし棚田は平野と違い、維持費が多くかかったり、手入れが大変だったり様々な要因があり、また人手不足に悩まされている問題点があった。棚田のことをネットで見ていただけではわからない、住んでいる人に聞いたからこそその実情を知ることができた。その後合海田植え踊りを体験し、大蔵村で継承されていて、歴史のある踊りを継承していく方法について考えていることを知った。

二回目は笹巻づくりから体験しました。今まで自分たちが食べていた笹巻を作ってみていい経験ができたと感じたし、地域の方からコツを教えてもらいながらできたのも食のおかげだと感じた。次にトマト農家の伊藤さんからトマトについて大蔵村をいかに盛り上げていくかを聞き、農業をどうやったらやりたいと思うのかと考えると、理由はないけれどなぜかやりたいとは思はないという気持ちがあり不思議でそこに何か理由があるのだと感じた。二日目は実際に合海田植え踊りを村の中でしているのを見て回り、どこに行っても地域のつながりがあり、だんだんと楽しくなった。地方ならではの地域の人との仲の良さがあり、魅力を感じた。最後は大蔵ワサビについて話を聞き、大蔵村がワサビづくりに適していることや、やはり後継者不足であることを聞いた。

今回のフィールドラーニングを通して、どの文化、伝統、食に関しても共通する点としては、人手不足、後継者不足であった。私の地域も地方であるため人手不足は感じていて、大蔵村だけの問題ではないと改めて感じた。この問題を解決するには、SNSなどを用いた情報発信による魅力の伝達が必要だと感じた。大蔵村に行くまでは、ワサビがあるというイメージしかなくほかのものが思いつかなかったが、実際に訪れると、肘折温泉街や棚田、合海田植え踊りなど多くの楽しめるものがあり、知るきっかけがないとわからない魅力が多くあった。知ろうとするにはきっかけが必要で、知ったうえで体験をすれば

魅力が伝わると思うので、ふるさと納税などを用いて、多くの人に知ってもらう機会を増やすのが人手や後継者を増やすことにつながると感じた。大蔵村にはおいしい食べ物、面白い歴史が多くあることを、たくさんの人に知ってほしいと感じた。



農学部 Kさん

わたしが大蔵村に行って感じたことが2個ありました。

1つ目は地元についてとても考えている点です。これは簡単に見えて、とても難しいことだと思います。役場の人はもちろん、村の人までどうすれば大蔵村について考えていました。その中でどうすれば肘折温泉にひとを呼び込めるかと新規就農者をふやすには、や地元で生きていく意味はという問いかけがあり、見どころがあるのにそれが伝わっていなかったり、都会に出て行ってしまいうことが問題になっていました。この問題を解決に近づくためにそこにある見どころを発信していくことや体験してもらうことがいいと思いました。なぜならまず魅力をしらなかつたらその温泉にいかうとかこの村で農業をやってみようなどを思わないと思ったからです。また、小学生に農業体験してもらうのものがいいと思うが、新規就農者を増やすためには、農業をやりたいとおもっている高校生や大学生に体験してもらい、未来の夢を現実的にするのがいいと思う。

2つ目は昔ながらの食が色濃く残っている点です。4日大蔵村に行っただけだったが、そこでご飯として出てきたものが、山菜やご飯を葉っぱで包んだものが出てきました。そこには、おばあちゃん世代の人が田んぼに田植えに行ったときに食べていたものだと聞き、普通の日常を過ごしていても食べれないものだと思い貴重な体験ができたと思います。このほかワサビやそばなどの大蔵村の特産品も食べてこの特産品を推して、ふるさと納税などに使えれば気にかけてくれる人が増えるかなと思いました。

最後に地元の人は地元を盛り上げようと自分たちで棚田の保全活動をしたり、肘折温泉のたくさん積雪したら宿泊代が安くなるなどの活動などいろいろなことを考えていて、地元の人があまりわからない情報とかの部分を大学生の人たちに助言を求めている、年上の人が大学生に意見を求めてそれを実践に移そうとしているのを見て、すごいと思いました。



農学部 Nさん

大蔵村では様々な文化や食が受け継がれており、それらを守るためにたくさんの人達が、大蔵村にはたらきかけていた。

まずは、伝統工芸である「肘折のこけし」である。こけしは江戸時代の後期に東北の温泉地で発祥したといわれており、折れた肘が治ったことでこの名がついた肘折温泉のある肘折も発祥の地のうちの1つである。肘折のこけしの特徴としては、個性豊かな表情で顔と胴の間に段があり、胴は太めの円柱形となっている。こけし作りにおいて、使う道具はすべて手作りで、作る時間は、材料である木を乾燥させるのに半年ほどかかるので、こけし1つ1つ手間暇かけて作られている。また、こけしの絵付けを体験し、細かな作業の難しさを感じた。最盛期には、50人ほどいた工人も今ではたった1人となってしまった。このような体験を通して、こけしの文化がなくなる危機を目の当たりにし、日本の文化でもあるこけしを絶やしてはならないと思った。

こけしの文化を絶やさないために、外国人観光客にもっとこけしを知ってもらうことが重要ではないかと考えた。先程も述べたように、こけしは日本の文化でもあるので、日本をよく知らない外国人にこけしについて知ってもらうことでこけしの需要が高まり、こけしの文化が途絶えないのではないかと考えた。

次に、大蔵村の農業と肘折温泉の湯治文化である。私は、これら2つのことについて考えた。大蔵村の農業はおもに人手不足や後継者不足に悩まされている。四ヶ村の棚田では機械が入ることができず、人手が足りなかつ

たり、大蔵トマトや大蔵わさびの農家は若者が少なかったりしている。肘折温泉の湯治文化は、農家の減少とともに衰退しつつある。

田植え体験を通して、実際に農業を体験することの楽しさや大切さを学んだ。農家の衰退が進みつつある今、農業体験を通して子供たち(若者)に楽しさを知ってもらうことが農家を職業選択の1つとするうえで必要だと感じた。また、育てることの大変さを同時に知ること、農業のやりがいを知ることができると考えた。

大蔵村では、農業体験と同時に体験を終えた子供たち(若者)が肘折温泉に入り、湯治を知ること、大蔵村の農業を受け継ぐと同時に、肘折温泉の湯治文化を守ることができるのではないかと考えた。

そして、田植え踊りは、SNSなどを利用し、山形県以外の多くの他県の人にも知ってもらうことで大蔵村の文化が残っていくのではないかと考えた。

農学部 Hさん

私は今回のフィールドラーニングで沢山の歴史・文化・食に触れ、自分の人生の中でとても価値のある体験ができたと感じた。その一つとして「肘折こけし」見学・体験があげられる。大蔵村では鈴木征一さんが唯一のこけし職人であり、肘折こけしの伝統を一人で守り続けていることに驚きを感じた。鈴木さんが「今は流行に合わせたデザインにする風潮があるが、そのままの良さを伝えることが大切だ」とおっしゃっていたのが特に印象に残った。利益を得るため時代に合わせて変化していくことは抗えない。だがオリジナリティを持ち、高い品質と価値のあるありのままの肘折こけしを未来に繋げていくことこそが私たちに求められているのではないかと考えた。

つぎに私の心が強く動かされた活動は四ヶ村の棚田田植え体験だ。手作業で田植えをしてみたことで、改めてお米を作ってくれている農家さんへの感謝でいっぱいになった。このときに抱いた感情は体験することでしか得られなかっただろう。また、田植え体験をした後みんなでご飯をいただいたときに村の方々が和気あいあいとお話をする姿を見て、この平和な場所を守りたい、残し続けたいと強く思った。棚田での栽培は平地での栽培よりも多くの手間がかかるが、その分高い付加価値が付く。農家さんだけの力で栽培をしていくのは難しいため、今回のように大学生や県外からの農業体験を目的とした子どもなど外部の人も巻き込み「みんなの田んぼ」を目指していくべきだと考える。

農業における高齢化・担い手不足は四ヶ村の棚田に限らず、大蔵村全ての農業に共通することだ。若者が大蔵村に残って新規就農者を増やすことが一番求められていることだと感じた。分かりきっている課題であるが、やはりこれが重要であると思う。伊藤貴之さんのお話の中で「この10人で大蔵村に来て農業してみたら？」と言

われ、冗談ではあるものの面白そうだと思った。みんなとだったらという心理が働いたのだろう。この気持ちから農業での仲間の大切さに気付かされた。「新規就農者を増やすにはどうしたらよいのか」という問いに対する現時点での私の答えは、情報を得ること・体験することだ。わたし自身にも当てはまるが、具体的な夢を持っている学生は少ないように思える。大学に進学して企業でなんとなく働く。この「なんとなく」の選択肢として農業があれば良いのだと考える。そのためには高校生や大学生に向けてより実践に近い体験や情報発信を行い、農業への根本からの意識を変化させることが必須だ。それこそ今回のフィールドラーニングのような活動が大切だと言える。このような活動を通して郷土愛を育み、大蔵村が大好きな人間でいっぱいにしていくことが課題解決の第一歩になると考える。



農学部 Sさん

私は、今回のフィールドラーニングを通して山形の新しい魅力を再発見することが出来たと思います。19年間山形に過ごしてきて、最上地方に行くことがほとんどなく、山形県民でも最上地域の大蔵村という所があまり分かりませんでした。でも、フィールドラーニングで様々な経験をしたことで、山形にはこんなにも素敵どころがある！ということがわかり、更に山形が大好きになりました。

はじめに、肘折温泉についてです。肘折温泉には、湯治文化という田植えや、農作業をしてその疲れを取るために長期間温泉地に滞在し、体を休める文化があることがわかりました。しかし、最近はその湯治文化が絶滅しつつあるということと、湯治文化がなくなってしまうと宿泊者が激減してしまうという問題を抱えていることがわかりました。私は、これらの問題を解決するために、外国人観光客や、都市に住む人にターゲットを絞り、湯治文化のように長期滞在ではないけれども、最初に田植え体験や農業体験をしてもらい、その後温泉で体を休めてもらうという湯治文化体験プランなどを作る事を考

えました。そうすることで肘折の温泉だけでなく文化まで知ってもらえる事ができていいと思いました。実際に私も田植え体験をしたことで、昔の人が農作業の後に温泉に入りたくなる気持ちがとても分かりました。

私は、笹巻き作りや田植え体験を通して自分で実際に体験してみるという事がこれからの伝統や地域の文化をつなげていく上で1番大切な事だと感じました。笹巻き作りでは、難しかったけれどとても楽しかったので今度自分でも作りたいと思ったし、作り方を知らない人にも知ってもらいたいと思いました。このように、体験することでわかる楽しさがあると思うので農業や郷土料理も小中高生へむけて体験会をすることで広めていきたいと思いました。

次に、農家の高齢化や、後継不足ということメディアなどで取り上げられており知っていたが、実際に大蔵村に来て農家さんたちの話を聞くことで本当に深刻な問題ということがわかりました。自分の中では、農家は、休みを簡単に取ることができないというイメージがあり農家にあまりなりたくないと思っていました。また、現代の人は、休みを使って趣味を楽しんだりする人が多いので尚更休みが簡単に取れないというのは農家が増えない原因になっていると思いました。これを改善するには、農家とそのお手伝いさん数人という体制ではなく、大きな団体として農業を行い、農作業を日にちごとに分担して毎週休めるような仕事環境にしていければいいと思いました。

大蔵村の魅力を知らない山形県民に知ってもらい山形をもっと好きになって欲しいと思ったし、県外の人も豊かな自然と色を広めていきたいと思いました。

授業記録

○活動レポート「私はもがみで考えた！」

人文社会科学部 Sさん

私は今回のフィールドワークで鮭川村へ行き、鮭川歌舞伎の未来について考えた。

私の考える歌舞伎存続に向けた鮭川村の課題は、「移住者受け入れ態勢の整備」である。歌舞伎の存続と移住者受け入れ態勢の整備は一見すると関係のないことのように思える。しかし、私は今回のフィールドワークを通し、この課題を設定するに至った。以下にその理由と解決策を述べる。

はじめにこの課題を設定した理由を述べる。私が予想していた課題は、「関係者の高齢化」「後継者不足」この2点による歌舞伎存続の危機であった。しかし、演者の年齢は30～40代が中心であり、小中学生の出演もあるため演者の高齢化は見られず、また、毎年地元の小学生によるこども歌舞伎も行われており後継者育成までなされていた。

次に私は村全体の少子高齢化を考えた。するとここで鮭川村の課題が見えてきた。村の少子高齢化に関しては、多くの移住希望者がいるという点で心配ないと思われる。しかし、地元の方と話す中で、移住希望者の数に対して鮭川村の移住者受け入れが追い付いていないということが判明した。そのため私は今回、「移住者受け入れ態勢の整備」を課題とした。

それでは現在、鮭川村ではどのような移住受け入れ政策を行っているのだろうか。鮭川村では空き家バンクという、誰も住んでいない家の情報を移住者に提供し、そこへの移住を促すという政策を行っている。また、『さけまる定住促進住宅』という、移住者の定住を促す住宅を設けており、移住定住の促進に向けた活動が見られる。

それでは、どうすれば移住定住の動きを、より活発にできるだろうか。地域の方は、「空き家情報が出た場合、即時報告をもらっているが間に合っていない」とおっしゃっていた。鮭川村の空き家バンクを見ると、現在は5件のみの掲載である。空き家情報の迅速な共有と、空き家の整備、また解体し、更地で売る等行うことで、移住定住の動きが活発になると私は考える。

今回のフィールドワークを通し、地域に根付く伝統文化に触れ、さらには舞台に出演することができ、非常に貴重な体験だったと思う。

今後の課題は、移住定住を活発にするための策を具体的に、且つ鮭川の方の話や鮭川の財政を理解しながら調査を進めていきたいと思う。

理学部 Sさん

私は5月25、26日と6月8、9日に鮭川村に行き様々なことを学んだ。

まず、私は鮭川村に向かう前に事前学習として鮭川村の移住・定住について調査を行った。鮭川村は人口約3800人で、村の名前の由来である鮭川が流れ山々に囲まれている。鮭川村では、県外から鮭川村へ移住された世帯に対し、1年分の米・醤油・味噌を提供している。また、鮭川村では空き家バンクという制度を実施している。空き家バンクとは空き家の所有者と移住希望者を結びつける制度のことだ。管理されていない空き家は、放置し続けると倒壊の危険があり早急に対策が必要とされている。こうした空き家情報を所有者から募り、空き家バンクという形で移住希望者向けに情報を提供している。

実際に鮭川村に行って村の方の話を聞くと、空き家のうち住める家は少ないそうだ。しかし、移住希望者が多く、整備が追い付いていないとのことだ。このことから、私は空き家になった家はすぐに空き家バンクに出し、住めない空き家はリフォームや解体をして土地を移住希望者に譲るなどの対策が必要だと考えた。実際村を回ってみて住めなさそうな空き家が何軒かあった。家は村に点在しているのではなく何か所かに集落を形成しており、新しい家も多いという印象があった。鮭川はかなり曲がりくねっていて、降水量が多い時には氾濫の危険性があるため、集落は氾濫の危険性がないところに形成されている。

次に鮭川村の施設と郷土料理について。まず鮭川村には公民館があり今年の歌舞伎公演は公民館の体育館で行われた。また、エコパークという施設がありカフェやキャンプ場、コテージなどがあり多くの人が訪れている。鮭川村の小杉地区にはトトロのように見えることからトトロの木と呼ばれる大杉があり観光名所となっている。また、鮭川村には展望台もあり、鮭川の形や集落の様子が一望できる。次に郷土料理について、鮭川村ではひきずりうどんと呼ばれる納豆やねぎ、卵やかつお節などを混ぜ合わせ薬味としてうどんを食べる郷土料理が存在し、2回目のフィールドラーニングの際にいただいた。

次に鮭川歌舞伎について。鮭川歌舞伎については1回目のフィールドラーニングの際に鮭川歌舞伎保存会の座長から話を伺った。はじめは江戸後期にできた4つの芝居からでありその後4つが合併されて鮭川歌舞伎となったそうだ。そのはじめである4つの場所のうちの2つの場所である石名坂神社と京塚神社に行くことができた。ここには歌舞伎を行う土舞台が残っており、近年はこれらの土舞台を使って歌舞伎の公演を行っているそうだ。今年は公民館の体育館で行われ、当日は多くの客が集まった。歌舞伎は長い物語の一部を公演するため話の内容を理解するのが難しい。そのため、あらかじめ話の内容や前後の出来事を知ったうえで見ると面白いように感じた。公演では客が話を理解し、楽しめるようにイヤホンガイドによる実況も行われており、歌舞伎を

より楽しめる工夫がなされていた。



医学部 0さん

私達の班は、最上地方の鮭川村に伺い、村の伝統芸能である鮭川歌舞伎に関する学習や体験の機会をいただいた。歌舞伎は現在も活発に行われており、定期公演や子ども歌舞伎の育成といった活動を通じて若者の知名度や参加意欲を保ち続けていると考えられた。

1回目のフィールドラーニングでは、鮭川歌舞伎座の座長さんから鮭川歌舞伎の歴史に関するお話を伺い、野外の土の上で行う地芝居の公演を開催する土舞台を持つ神社を回ったのち、村制施行70周年を記念した定期公演ののぼり設置のお手伝いを行い、稽古現場を見学させていただいた。江戸の歌舞伎役者に伝えられた歌舞伎の地芝居が村内4地域で栄え、衰退、復興、変容、合併を経て今の鮭川歌舞伎の形に至ったのだという。芝居の稽古は熱が入っており、化粧や衣装がなくても演じる人物の人柄が伝わるほどにまで精巧に練り上げられていて深く見入ってしまった。

2回目のフィールドラーニングでは、1日目に公演の会場設置とリハーサルを行い、2日目の公演当日に受付のお手伝いやゲスト出演を行った。ゲスト出演は班員のうち3人が行い、私は女中役となった。初めての白塗り化粧に緊張しつつも、衣装が揃うと気が引き締まり、台詞がないながらも役目を全うすることができ達成感があった。猪役の班員も大勢の観客の前で躍動感のある動きを披露することができていた。着付の際に伺ったお話によると、鮭川歌舞伎は着付師の若い後継ぎがいないことが懸念されていることが分かり、裏方の人手不足に目を向けることができた。一方で、演者に関しては、子ども歌舞伎の育成が積極的に行われており、継ぎ手がしっかりと確保されていると考えられた。公演では、成人の役者さんの芝居が素晴らしかったのはもちろん、小学生歌舞伎達の堂々とした口上の様子にも感動を覚えた。

村の伝統芸能と聞くと過疎化によって担い手が著しく不足しているものだと想像していたが、実際に村に足

を運んでみると、その伝統は衰えず保たれ、村民の熱意によって今も活発に演じられ続けていることが分かり、考えを改めた。定期公演によって鮭川歌舞伎を村の人々にとって身近な存在にしたり、子ども歌舞伎の育成によって若い担い手を確保したりする取り組みがとても素晴らしいと感じた。鮭川歌舞伎の活気を保たせている要因として他に挙げられることがないか、さらに考察を深めていきたい。

工学部 Rさん

前日、私は共生の森もがみの授業の一環として、山形県の鮭川村を訪れた。この村は鮭川歌舞伎という独自の伝統文化で有名だ。鮭川歌舞伎は、江戸時代から続く地元の農民たちによる歌舞伎で、素朴ながらも非常に情熱的な演技が特徴だ。訪れた当日は、地元の人々が熱心に練習している姿を見学した。彼らの一生懸命な姿や、古くからの伝統を守ろうとする気持ちに感動した。また、歌舞伎の座長と話す機会もあり、その歴史や文化の大切さについて深く理解することができた。

しかし、この2回のフィールドラーニングを通じて、さまざまな課題も見つけた。まず、鮭川歌舞伎の観客の高齢化だ。多くの観客が高齢であり、若い世代の観客が少ないことが問題となっている。これは、若い人たちが都会に出て行き、地域に戻ってこないことが原因の一つだ。また、観客も年々減少しており、地域外からの観客も少ないため、経済的な支援も限られている。これらの課題は、伝統文化を守り、次世代に継承していくために解決しなければならない重要な課題だ。

これらの課題を解決するために、それぞれの提案も考えた。まず、若い世代に対する教育と宣伝活動が必要だ。地元の学校や地域の子どもたちに対して、鮭川歌舞伎の魅力を伝えるワークショップや体験学習を実施することで、若者たちが自分たちの伝統文化に興味を持つきっかけを作ることができる。さらに、都市部の学校との交流プログラムを企画し、都会の子どもたちにも鮭川歌舞伎を知ってもらうことも大切だ。

次に、地域外からの観客を増やすためのプロモーション活動が必要だ。SNSやインターネットを活用して、鮭川歌舞伎の魅力を発信し、観客を呼び込むことができる。また、地元の特産農産品、例えば野菜や米などを販売するイベントを開催し、観客に鮭川村の魅力を伝えることも有効だ。さらに、地域の宿泊施設や飲食店と連携し、観客が滞在しやすい環境を整えることも重要だと思う。

最後に、地域全体での協力と連携が不可欠だ。地元の自治体や企業、NPOなどが協力して、鮭川歌舞伎の保存と振興に取り組むことが必要だ。具体的には、定期的な公演やイベントの開催、地域全体での資金集めなどがある。これにより、地域全体で伝統文化を支える体制を整えることができる。

このように、鮭川歌舞伎の未来を守るためには、若い

世代への教育と宣伝、観客の誘致、地域全体での協力と連携が重要だ。鮭川歌舞伎を次世代にうまく伝えるために、今回のフィールドラーニングで得た経験を生かし、行動すべきではないだろうか。

工学部 Tさん

1回目では、鮭川村役場や鮭川歌舞伎保存会の方々にお話を伺って鮭川村と鮭川歌舞伎についての理解を深めた。鮭川歌舞伎が約250年という長い歴史を持ち、いかに村民たちの娯楽として親しまれ、想いを受けて後世に伝えようとしてきたかということを生々の言葉で聴き、感じることができた。また、出演する私も含めた3人のメンバーが公演に向けて稽古をつけていただいた。東京や京都で行われている歌舞伎は男性しか出演しない。しかし、鮭川歌舞伎は、主に男性ではあるが、女性も出演することができる。この背景には担い手不足といった問題があるのだろう。また、鮭川歌舞伎で行われている演目の中には、全く東京や京都などで行われている歌舞伎と言葉遣いが異なるものがあり、歌舞伎の専門家が聞いても理解できないものとなっているようだ。伝えられてから長い年月を経て、徐々に鮭川村の方言が混じったのであろう。このように鮭川歌舞伎は伝えられたものに様々なアレンジを加えて、独自のものへ変化しており、村と鮭川歌舞伎のつながりがよく感じられた。また、鮭川村役場の方に村の神社やエコパークを案内していただき、村の雰囲気や特産品などに触れ、村のことをより知ることができた。

2回目では、実際に歌舞伎公演に参加した。前日から公演準備を行い、その日の昼食で、鮭川村の京塚地区多目的集会所にて鮭川歌舞伎保存会の15人ほどの地域の方が集まり、ひきずりうどんをご馳走になった。印象的だったのは、大きな鍋いっぱいゆがかれたうどんである。お話によると、昔から村外から客人が来た時、食事を振る舞う場合、食べきれないほどに大量に用意するそうだ。おもてなしの心が昔から根付いており、大歓迎を目に見える形で表そうとする村の方達のあたたかな心遣いが感じられ、非常に嬉しかった。公演は鮭川村中央公民館で行われ、こども歌舞伎や『仮名手本忠臣蔵』などが披露された。多くの地域の方々が表だけではなく裏から公演を支えており、私たちの着付けや化粧も全て地域の方々にしていただいた。公演は正午からであったが、朝から忙しなく働きつつも非常に賑やかであり、良い雰囲気のまま公演を終えることができた。

2回のフィールドラーニングを通して、伝統文化と地域の関わりについて深く考えることができた。伝統文化を担う主体は地域の人々だが、人口減少が進み、より伝統文化の存続が厳しくなっている地域が多いだろう。担い手だけでなく、裏方から支える人員も足りなくなることが予想される。鮭川歌舞伎を支えているのは、保存会だけではなく、地域内外の人々である。人々の伝統文化

への関心を高めることは、後世へ伝えていくための最も重要なことだ。伝統文化をその地域だけではなく、外へと発信することが伝統文化を後世へとつなげてゆく道であると考えた。加えて、地域活性化には何か一つの地域の核となりうるものが必要だと思う。核とは他の地域にないもの、他の地域に自慢できるものであり、伝統文化は核になりうる。このような核を育て受け継ぐことによって過疎地域を救うことができるのではないだろうか。



山形大学フィールドラーニング授業プログラム

プログラムテーマ：戸沢村角川地域の新たな特産物開発プログラム（戸沢村）

		1 回目	2 回目											
日 程		【1日目】6月8日（土） 8:42 山形駅発 9:52 新庄駅着 10:00 新庄駅 出発 10:40 戸沢村農村環境改善センター 到着 10:45 自己紹介&レクチャー 11:00～やまなみセンター前に移動 オリエンテーリング「フットパス」開始 12:00 綱取雪氷防災センター 昼食休憩 13:00 寺台農園ワラビ採り体験 14:00 戸沢村農村環境改善センター 到着 14:15～木エクラフト体験 15:30 本日の振り返り 16:00 農家民宿に移動 宿泊	【1日目】6月15日（土） 8:42 山形駅発 9:52 新庄駅着 10:00 新庄駅 出発 10:40 戸沢村農村環境改善センター 到着 10:45 先週の振り返り&確認 11:00～蕎麦打ち体験 12:00 昼食 12:45 片付け 13:00～寺台農園 代表田中悦夫氏に新規特産物 について相談 14:00～翌日の特産物モニターの準備 15:30 本日の振り返り、翌日の確認 16:00 農家民宿に移動 宿泊											
		【2日目】6月9日（日） 8:30 戸沢村農村環境改善センター 集合 8:45～戸沢村観光物産協会長澤次長より 9:45「観光の現状について」講談 10:00 販売アイデア企画会議及び ～11:30 プレゼン資料作成 11:30～山菜昼食 作り方体験 13:00 販売アイデア プレゼン 14:00 次週の特産物案の決定 14:30 本日の振り返り及び次週の準備確認 15:00 戸沢村農村環境改善センター 出発 15:40 新庄駅 到着 16:14 新庄駅発 17:23 山形駅着	【2日目】6月16日（日） 8:30 戸沢村農村環境改善センター 集合 8:45 準備してモニター場所に移動 9:00 村内モニター場所にて準備 9:30～モニター開始 11:30 特産物モニター終了 片付け 12:00 昼食 13:00 モニター結果 集計及び分析 14:00 モニター結果 報告 14:30 今回の振り返り まとめ 15:00 モニター場所 出発 15:40 新庄駅 到着 16:14 新庄駅発 17:23 山形駅着											
電車降車後の移動手段		戸沢村のマイクロバス	戸沢村のマイクロバス											
<table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="width: 50px;">宿泊料金</td> <td>5500円（税込み）</td> <td>5500円（税込み）</td> </tr> <tr> <td>必要経費</td> <td>5500円（税込み）</td> <td>5500円（税込み）</td> </tr> <tr> <td>小 計</td> <td>11000円（税込み）</td> <td>11000円（税込み）</td> </tr> <tr> <td>合 計</td> <td></td> <td style="text-align: right;">22000円</td> </tr> </table>	宿泊料金	5500円（税込み）	5500円（税込み）	必要経費	5500円（税込み）	5500円（税込み）	小 計	11000円（税込み）	11000円（税込み）	合 計		22000円		
	宿泊料金	5500円（税込み）	5500円（税込み）											
	必要経費	5500円（税込み）	5500円（税込み）											
	小 計	11000円（税込み）	11000円（税込み）											
合 計		22000円												
学生が準備するもの		雨具、タオル、飲み物、 手袋、帽子 2時間程度の歩きに相応しい服装と靴	エプロン、三角巾											
留意事項		特になし	蕎麦アレルギーは要相談											

授業記録

○活動レポート「私はもがみで考えた！」

人文社会科学部 Fさん

筆者が戸沢村での4日間の活動を通じて特に印象に残ったこととして、人々との交流が挙げられる。ほぼ初対面の班員に、学生サポーターの木村龍之介、村内案内の沼澤吉己、安食輝敏に加え、民宿先の田中タキ子夫婦等様々な方々との交流の機会があり、多くの交流を通じて自身のリラックスやコミュニケーションスキルの向上、人生経験の蓄積を実感する事ができた。

加えて特産物の開発という面でも、おみ漬けの提案、新味の開発を通じて目標達成できたと感じた。おみ漬けの提案を通じて山形に来てから学んだことを発揮することが出来たことやモニター調査を通じて新味について「美味しい」や「いいアイデア」と直接、沢山評価された事は自信にもつながった。

筆者の活動中における課題として、「班長として班活動をやりつつも、班員の仲を深めたい」と考えていた。班活動においては、なかなか14人全体で集まることは難しい中で、LINEなど利用して連絡を取ることで、報連相を徹底することが出来た。また班長という役割を通じて、班員同士の活動・交流を潤滑に進められるよう徹するシーンも多く、フィールドワーク活動中、休憩中(食事中)、活動後で豊富に班員とのコミュニケーションを取り、班員×班員や班員×アドバイザー、班員×地域の方と、様々な架け橋になれたのではないかと考えてた。終盤班員やその他の方々との全体の仲が深まった姿を見ることができたことでとてもやりがいを感じた。

また活動中に疑問に思ったこととして、なぜ戸沢村に韓国にまつわるものが多いのかについて気になった為、民宿先の田中に伺うと、韓国との国際結婚などの交流を通じて元朝鮮人が増え、現在に至ると言っていた。またインターネットを通じて調査すると同様の内容が見られた。そのため多く観光の文化が持ち込まれ、観光に転用した結果、道の駅のような形として綺麗な観光文化が残ったようだ。

人文社会科学部 Yさん

はじめに

私たちは、計4日間戸沢村でフィールドラーニングをして、自然に親しむことの楽しさを知ったり、地域の人の温かさにたくさん触れたりといった経験をする事ができた。戸沢村は、高麗館や舟下りなどが主な観光地として既に戸沢村のパンフレットでも挙げられているが、私たちが今回活動の拠点していた角川地域の魅力はまだあまり知られていないと感じた。そのた

め、角川地域を中心として戸沢村の魅力を世代問わずより多くの人に広めていきたいと考えた。

特産品の考案

そこで私たちは、1日目のフィールドラーニングにおいて山菜のわらびの採集体験を行ったことや、民宿で山菜を使ったおいしい料理をたくさんいただいたことから、これらを活用して戸沢村独自の特産品のアイデアとして、私たちの班は、わらびを使った生ふりかけを考案した。生ふりかけとは、一般的な乾燥したフレック状のものとは対照的に、水分が多くしっとりとしたものである。地元の方とも相談を重ね、わらびのねばねばした旨味を生かすために、乾燥はせず、そのままの状態で味付けをすることにした。なお、わらびは、角川地域で採れたものを使用した。

最終日に、戸沢村道の駅『高麗館』で訪問者を対象にしたモニター調査を行ったところ、9割以上のアンケート回答者が「とても美味しかった・美味しかった」と回答しており、アイデアとしての面白さにおいても「とても面白い・面白い」と回答した人が同じく9割以上いた。加えて、戸沢村在住の方からも、「家で真似して作ってみたい」との感想をいただくことができ、角川地域のわらびの美味しさを広め、食べ方の新境地を開拓することができた印象を受けた。

特産品を販売する上での課題

開発した特産品を実際に商品化するにあたって、挙げられる課題点としては、普段から山菜に馴染みがない観光客が、手軽に手に取ることができる商品とはならないのではないかとこの点だ。これを解決するためには、パッケージを工夫したり、実食を交えた販売形式を取り入れたりすることが必要だと考えた。実際に、モニター調査では、試作品を提供することで、普段山菜を食べない外国人の方や他県から来た20代の方にも、わらびに対して興味を持たせることができ、味に対しての高評価も得られた。また、パッケージにおいても、馴染みを持たせるデザインが重要であると考えた。生ふりかけの製造過程で着色料を使わなくても、パッケージデザインに適度な「今っぽさ」「上質感」「分りやすさ」を取り入れることによって、美味しくみせることができ、さらには商品に興味を持ってもらえるきっかけ人なるのではないかと。この点は、新庄駅や道の駅で売られていた既存の商品においても欠けているポイントだと考える。

【参考文献】株式会社 TCD

<https://www.tcd.jp/branding/yamazaki/localsouvenirpkg.html> (2014.06.20参照)

医学部 Kさん

私は今回のプログラムで実際に戸沢村を訪ね4日間過ごし、多くのことを経験し戸沢村の本当の魅力と、

戸沢村が直面している大きな問題について自分なりに理解することができました。そこでこの2つについて、特産品づくりと絡めて述べさせていただきます。

まず、戸沢村の本当の魅力について説明したいと思います。私はこのプログラムの事前課題として戸沢村の観光資源や産業について調べ、非常に良いところを楽しそうなどころだと漠然と考えていました。温泉や舟での川下り、立派な道の駅があったり、新たな産業としてパプリカの生産をしているなど非常に様々なトピックがありました。しかし一方でそれらがポツポツと村にあるだけでそのほかの場所は何もない場所なのではないかという不安も抱えていました。数日後いざ村に到着するとそれらの考えは無くなりました。バスを降りると自然の香りに包まれ、車通りもなく、鳥の鳴き声が聞こえ時間の流れがゆっくりになったように感じました。見渡してみれば緑が広がり、心の疲れがゆっくりと消えているように感じました。また、宿泊先の民泊では家族の一員のように温かく迎え入れていただいたり、その民泊の家の子供達と夕方散歩していると田んぼを夕陽が照らし幻想的な景色が広がっていたり幸せが詰まっていました。特産品開発のために友人と相談していた際には宿主のかたが角川かぶやわらびなど地元の人ならではの意見を親身になって教えてくださいました。

これらのことから、戸沢村はいるだけで人を幸せにする力がある場所だと強く感じました。周りの友人も疲れたらここに来たいと言っていたことからそれが本当であることがわかります。

一方で、問題点も感じました。それは働き手となる若者がいないということです。村を歩いていて働きざかりの年代の方は一人も見ませんでした。特産品発表の場で、あるグループの発表に対してのコメントの中でいいアイデアでも作る人がいないと言っていたのを非常によく覚えています。この問題は一回村に来てもらうということが解決すると思います。前述の通り、いるだけで幸せになり魅力が伝わるのが戸沢村だと思うからです。

以上のことから、今回の特産品開発は宣伝などを行なって戸沢村を知らない人々ターゲットにするのが効果的なのではないかと感じました。もちろん、道の駅に来てくれる人のリピートを誘うのも大切ですが、新しく知ってくる人が必要です。今回のプログラムで私たちが考えたわらびキムチとそのパッケージはあまりモニター調査を通して自分の感想としても新規の人を惹きつけるものではなかったかもしれないというのが反省点であり、学びとなりました。より戸沢村の魅力が伝わる特産品を作り、戸沢村を訪ねてもらい、多くの人にあの幸せを体感してほしいと強く思います。



医学部 Sさん

戸沢村で過ごした四日間は私に刺激と癒しを与えてくれて、貴重な体験となった。

一回目の活動では、フットパスと新たな特産品についての話し合いをした。一日目のフットパスを通して、自分の足で歩いて戸沢村の自然を肌で感じた。あたり一面が棚田になっているところもあり、そばを育てているところも多らしい。午後は、ワラビとウドの葉を採り、民宿に行き、ワラビは重曹であく抜きしてもらった。民宿先でタラの芽を取りに行き、ウドの葉やミズの葉とともに自分たちでてんぷらにした。山盛りの山菜てんぷらと夕食をいただいた後、民宿のお母さんとお話をした。息子さんが喘息持ちだったのだが、病院まで車で四十分ほどかかるというお話が印象的で、人口減少の著しい戸沢村のような地域における医療の問題を感じた。特産品としては戸沢村で多く作られているそばを生かして、そばのジェラートを提案することにした。上に山菜のてんぷらを載せ、そば団子を添えて、下には戸沢村で作ったお米を使った玄米フレークを敷くことにした。山菜やそばは少し大人なイメージがあるが、ジェラートにすることで子どもでもおいしく食べられて、大人も味わえるような特産品を目指した。商品名は「そばあと」に決めた。二日目にはほかの民宿先のグループが提案しようと考えている特産品について聞いて、同じことを経験してもそこから出てくるアイデアは全然違って、今までの経験の違いや偶然性によってアイデアに個性が出ていると思った。

二回目の活動では、特産品モニターを行った。「そばあと」の試作では、てんぷらを堅いままにしたいと思い、素揚げも試してみたのだが、あまりおいしそうにできなかったため、今まで通り片面だけ衣をつけることにした。そばのジェラートは一部そば粉のみを使い、後から作ったものにはそばの実を砕いて擦って細かくしたものを混ぜた。そばの実から作ったジェラートは、

そば粉のみのものより、そばの香りが圧倒的に強く、粘り気があった。調べてみると、ムチンという消化酵素が粘り気の原因であることが分かった。二日目の朝、団子が硬くなってしまっていて、お湯を通してあっためたものの提供するときには硬く戻ってしまった。原因は、そば粉と水と少量の砂糖のみで作ったことだと思う。モニターで、十割そば粉で作るのではなく、小麦粉を二割くらいまぜればいいのかというアドバイスも頂いた。特産品モニターでは、やはり団子が硬いという意見が多かった。アンケートでは、全員が初めて食べた、面白いと回答したことから、今回私たちが提案した「そばあと」はオリジナリティのある商品として認めてもらえたと思った。もちろん改善の余地は多くあるが、味や新鮮さについては、好評だった。

四日間にわたるフィールドラーニングの活動を通して、私は、新たな商品をゼロから考えて、試作し、実際に一般の方々に食べてもらって意見をいただくという経験を初めてした。オリジナリティのある特産品を作るのは本当に難しかったが、私が戸沢村の自然や人々から刺激をもらったように、私たちのアイデアが少しでも戸沢村にいい刺激を与えられていたらいいと思う。



医学部 Hさん

私は今回のフィールドワークについて知る前は戸沢村について全く聞いたことがなく、最上地域についてさえも知らなかった。しかし、今回のフィールドラーニングを通して、戸沢村には多くの魅力があることを知ることができた。中でも一番印象に残ったのは、戸沢村という場所の自然の豊かさだった。山を歩くフットパスや山菜取り体験をしていく中で、普段自分が触れない環境に身を置いていることを強く実感した。また、戸沢村の人々の温かさも印象に残っている。私たちの活動を手厚く支援、協力していただき、宿泊した農家民宿でも楽しい時間を過ごすことができた。しか

し、このように戸沢村にはたくさんの魅力があるのに、若い世代をあまり見かけることはなかった。これは地域としても課題となっており、農家や蕎麦屋などは後継者問題を抱えているようであった。若い世代は戸沢村を出て行ってしまふことが多く、入ってくる人も少ないのだという。私は今回のフィールドラーニングを通して戸沢村の魅力を多く発見できたのにもかかわらず、なぜこのような問題が起こっているのか、何か解決策はないかと考えた。原因としては交通アクセスのしにくさや山里へのなじみのなさなどがあげられるだろう。問題を解決するために、戸沢村にもっと人を呼ぶことができればよいことがあげられるが、実際現在はあまり若い世代が入っているとは言いにくい。そこにはまず戸沢村という場所を知ってもらうことが必要だと考えた。私自身が今まで戸沢村を知らなかったように、全国でも有名な場所とは言えないので、どうにか知ってもらう必要があると感じた。そのための方法として、今回のフィールドラーニングで行ったように、戸沢村の特産物からまず戸沢村という場所を知ってもらうのはどうだろうか考えた。実際に私たちが新たな特産物を考えたときに、戸沢村で採れたワラビを生かしたおみ漬けを思いつき提案させていただいた。山形県の郷土料理であるおみ漬けにワラビを加えることで新しい商品を生み出すことができ、高麗館でモニターを行った時も、現地の方々からおいしかった、新鮮な商品だったという感想をいただくことができた。このように、戸沢村でとれるものを生かした特産物を通して多くの人に戸沢村のことをまず知ってもらうことができれば、私たちが体験したような戸沢村の魅力に気づいてもらうことができ、町おこしへとつながっていくのではないだろうか。

医学部 Mさん

私がこのフィールドラーニングで戸沢村を一番初めに訪れたとき、戸沢村の自然の雄大さに感銘を受けた。戸沢村には広大な山地が存在し、特に角川地域には火打岳や鳥形山、高倉山といった1000m級の山々が並ぶ。私たちが訪れた場所にもどこまでも続くかのように思われるほどの緑が広がっていた。戸沢村ではその豊かな自然を生かし、ワラビをはじめとする山菜の栽培や山の斜面を生かした棚田における米の生産を行っている。私たちは今回のフィールドワークにおいて戸沢村の新たな特産物を開発するという取り組みを行ったが、そのときに考え出された案も戸沢村の自然を生かしたものが多かった。私達が最終的に選択し取り組んだワラビのキムチも戸沢村の自然を生かしたものだったが、他にも戸沢村の農作物や川といった自然を活用した案がたくさん出された。戸沢村の人々からも新たな特産品を考案するにあたっては戸沢村の自然を活用するこ

とがカギであるとの助言をもらった。しかし自然は人の生活に豊かさだけでなく厳しさももたらす。私達が戸沢村に滞在している間にも近くにサルが出没し、サルを追い払うためか大きな破裂音が聞こえた。またクマも出没することがあるという話も聞いた。野生動物は人間に直接的な危害を加えるだけでなく、農作物にも被害を与える。近年は全国的に野生動物による農業への被害が報告されているが、それは決して戸沢村も例外ではない。戸沢村の自然は観光資源にもなりうる非常に魅力的な要素であるが、一方で自然との付き合い方も考えていかななくてはならない。角川に生息する生き物としてトウホクノウサギやホンダタヌキ、ホンダサルがあげられる。また希少動物としてはルリイトトンボやトウホクサンショウウオ、モリアオガエルが生息する。モリアオガエルは本州に広く分布するが山形県の天然記念物にも指定されている。これらの豊富な生物種は戸沢村の誇るべき自然であるが、一方でそのような多様な生物と人間がうまく共存できるような村づくりをしていかななくてはならない。戸沢村で農業をしている人の中には野生動物からの農作物への被害を減らすために電気柵を導入したという人がいた。そのような対策は戸沢村の人々が自然の中で暮らしていくにあたって必須であると考えられる。他にも、私は道路の明かりが多くあれば夜間の安全を確保できるのではないかと考えた。戸沢村がこれから長く自然と共に存在し続けるために何ができるのか、戸沢村外の人々も含め考え続けていくことが必要であると思う。

医学部 Tさん

私たちは新たな特産品開発をすることを目的として戸沢村で四日間の活動を行った。私たちの班では「生ふりかけ」と「山菜だし」を戸沢村の新たな特産品として考案した。戸沢村ではわらびが有名で、粘り気を持っているのが特徴である。地元の方は主に一本漬けにして食べられているそうだ。今回わらび特有の粘り気を生かしつつ、これまでにないようなアイデアを提案するために試行錯誤をした結果、乾燥させるのではなく刻んでご飯にかけるといった形がよいのではないかとという考えに至った。戸沢村では「野菜だし」も有名である。材料としては、きゅうり、しょうが、みょうが、なす、大葉などが含まれているそうだ。これに戸沢村で採れる多くの種類の山菜を加えることで、更にオリジナリティーが出すことができるのではないだろうか。戸沢村では最上川舟下りという観光スポットに県外から毎年多くの人々が訪れる。冬にはこたつ舟が人気で特に外国人観光客が多く訪れるそうだ。そこで、今回の生ふりかけをご飯にかけた状態で提供し、味の変化を楽しむ用として山菜だしをかけお茶漬けのようにし、二度楽しめるといった形で提供するのがよいので

はないかと考えた。また、舟番所でお土産用として販売することで経済効果も得られるのではないかと考えた。「山菜」というと都市部に住んでいる方や若者にとってはあまり馴染みのない食べ物で購入するにはハードルが高いと思う。しかし、舟下り中に一度食べてもらい山菜の魅力を知った上で「ふりかけ」などといったように普段から私たちがよく口にするものにすることで手に取りやすくなるのではないかと考えた。

実際に戸沢村に行ってみて、私が最も印象に残ったのは戸沢村の方々は村の発展に積極的であるということだ。今回の特産品開発というプログラムは初めての試みだったにも関わらず、私たちの活動がスムーズに進むように村の方々みんなが協力的に参加していただいて、私たちがやりたいと思いついたアイデアをすべて実行できる環境を作っていただけた。また、新庄駅のお土産売り場では、私たちが初めに案として出していたドレッシングやほかの班が作っていたキムチ、そして最終日に高麗館でいただいた戸沢村の冷麺などすでに戸沢村の特産物はいろいろ魅力の詰まったものが既に存在していた。私たちがモニター調査を行った際に商品化するには外見も大事な要素であるという意見をいただいた。今回の活動ではパッケージを考案することまではできなかったが、実際に商品化に向けて話が進むのであればパッケージを考案することも課題の一つであると感じた。今回の私たちの活動が戸沢村の方たちに少しでも貢献できていたらいいなと思う。

工学部 Yさん

私はこのフィールドラーニングで本当に多くの事を学ぶことができたと思います。

ここでは沢山あるうちの3つを紹介したいと思います。1つ目は、戸沢村に行くと色濃く残る「日本らしさ」を体験することができたことです。戸沢村では蕨取り体験、木工クラフト体験、民宿宿泊などを体験しました。蕨取り体験では自分たちが取った山菜を、民宿のお母さんと一緒にあく抜きや塩漬けなどをしました。日本の伝統料理である山菜の調理は今までできなかったのがなく、どのように料理したらいいのか分からなかったのですが、民宿のお母さんが丁寧に優しく教えてくれたおかげでとてもおいしい山菜料理を作ることができました。今まで山菜料理を食べたことがなく存在自体も知りませんでした。収穫から調理までを体験したことで山菜料理のすばらしさに気づくことができたと思います。また、民宿は日本の伝統的な家で神棚や障子、日本人形などがあり、私は今までこのような家で生活したことがなかったのでこれもまた新鮮でした。日本の伝統文化は古臭く渋いものだと思っていましたが日本の自然と共生する文化はとても暖かく、維持していくべきものだと思うようになることができ

ました。2つ目は自分たちが作った山菜入りの山形伝統料理であるおみ漬けのモニターを通して戸沢村の方々と交流ができたことです。モニターでは戸沢村付近の道の駅でテントを張り道の駅を訪れた人々におみやげなどを買った後、テントに寄ってもらい、試食していただきアンケートを書いてもらうことをしました。戸沢村の道の駅にはたくさんの方が来てくれて、予定時間の40分前に試食品がなくなってしまうほどでした。私は路上にブースを作って人を呼ぶようなことをしたことがなかったのでとても新鮮な体験をすることができました。モニターではいろいろな年齢層の人が来てくれてとても楽しかったです。同じ料理を食べてもらっていたのですが皆意見がばらばらで、料理の難しさも感じました。3つ目は自然の良さを再確認することができた事です。戸沢村は人の手がほとんどかかっていない自然が本当にたくさん残っていて、もぐらや蛇がいたり棚田が広がっていたりととても自然豊かな場所です。今日はあちらこちらで土地開発が進み自然と関わる機会がとても減っています。私は戸沢村の自然の中に身を置き、自然の良さを実感したと同時に日本の自然を守っていくべきだと思いました。

このフィールドラーニングでは本当に多くの事を学ぶことができました。今回学んだ日本の伝統的な文化や自然の美しさなどを忘れずに私のこれからの生活に生かしていきたいです。



工学部 Sさん

私は戸沢村の「戸沢村角川地域の新たな特産物開発」に参加しました。

戸沢村はとても自然豊かで、日々の疲れを癒してくれました。

また、ワラビ採り体験、木工クラフト体験、蕎麦打ち体験など様々な体験をすることができました。

ワラビ採りは、黄色い花が咲き始めていたり、硬くなってしまっていたらおいしくないから採ってはいけないとのことでした。軟らかいものは本当に軟らかく、

ポキッと採ることができました。採られた後だったり、もう採れないくらいまで成長してしまっているものが沢山あったので苦戦しました。結構敷地の奥のほうまで歩いていると採れるワラビが沢山生えていたりして面白かったです。次の日にワラビを天ぷらにして食べましたがとてもおいしかったです。

木工クラフトはみんなでフクロウのパーツ作りを分担して作りました。私はフクロウの羽の部分を作りました。ノコギリで木を切ってやすりを使って削るのですが、のこぎりで切るのが思っていた以上に難しかったです。そのパーツを自分たちで選び、一人一人個性的なフクロウを作ることができました。

蕎麦打ち体験では、まずボウルの中で粉に水を少しずつ足してこねていきました。最初は小さい球みたいなのが沢山できてきて、それが一つの丸になっていきました。それをボウルから出してまず何回も手を使って伸ばしていきました。それをさらにのし棒を使って伸ばしていきました。最初はどうなるかと思っていきましたが、結構薄くて四角い生地が出来上がりました。それを三つ折りくらいにして切っていきました。うちの班は三人で切ったんですが、三人とも毎回細くなって行って上達していくのが面白かったです。

民泊では二回とも家族の方たちが温かく受け入れてくれました。ご飯は毎回山盛りで出してくれて、とてもおいしかったです。民泊には子供が二人いて、沢山散歩したり、遊んだりしてとても楽しかったです。また、地域特産物も一緒になって考えてくれました。

私の班は地域特産物でワラビキムチを作ってみました。班員でまず平日集まって作ってみたいしました。二回目のフィールドラーニングではワラビキムチを三種類作ってみました。「民泊の方たちが作ってくれたキムチ」と「市販のキムチの素」と「自分たちで材料を集めて作ったキムチ」にワラビを入れて冷蔵庫に入れて冷やしました。次の日に道の駅で試食会をしたら、「自分たちで材料を集めて作ったキムチ」が一番人気で嬉しかったです。ごま油を入れたのが好評だったようです。他の班員が作ったものも食べさせてもらいましたがどれもおいしかったです。

戸沢村でこのようなまたとない体験をすることができてとてもよかったです。

工学部 Sさん

私たちの班は合計2回のフィールドワークを通して「そばあと」というそば粉を使用したジェラートを考案した。この商品を考案する手掛かりを得たのは、戸沢村でのフットパス、山菜採り体験、民宿先での天ぷらづくり、夕飯での団欒、などほとんど戸沢村での貴重な活動を通してからであった。

そばあとには、そば粉を使ったジェラート、そば団

子、ミズ葉の天ぷらが添えられている。まず1日目のフットパスでそば粉を育てている畑やお蕎麦屋さんを見て、戸沢村ではそばが有名なことを知り、山菜採り体験ではわらびやうど、ミズなどの多くの山菜と天ぷらや一本漬けなどの調理方法を学ぶことができた。また、民宿先では夕飯の際、奥さんからかつてお蕎麦屋さんを経営していた話を伺うことができた。そこで目に留まったのがメニュー表にあった「そばがき」であった。見た目がジェラートに似ていることからグループの皆で様々な想像を膨らませて「そばあと」考案に至った。

試作するにあたり、ただのそば粉だとそばの香りが出ない、団子が硬すぎる、モニター調査終了まで溶けないように保存しなくてはならないなど、様々な問題が生じた。解決に向けて取り組む、そんな時一番心に染みしたのは戸沢村の人の温かさであった。そばの実を用意して一緒にすり鉢でひいていただいたり、ジェラートを溶けないようにクーラーボックスや大量の保冷剤を用意していただくなど、多くの方々のおかげで「そばあと」を実現できたと考えている。

モニター調査では様々な年齢層の方に来ていただき、沢山のアドバイスやコメントを得ることができた。自分たちでも感じていた通り「団子が硬かった」というコメントが多かったが、それ以上に「美味しかった」という意見が多く非常に達成感を得ることができた。自分たちでゼロから考えた戸沢村の特産品が形になって、人が口にしてくれる。こんなに沢山学ぶことができて、多くの人に出会えて、何より楽しいフィールドワークは他にないと思う。

このプログラムは特産品を開発することだけがゴールではない。戸沢村という地域に触れ、どうすればもっと戸沢村を盛り上げられるか、少しでも力になることが私たちの最終目標である。民宿先の奥さんから、今農業の後継者が不足しているという実態を伺った。また最近台湾などの海外からの観光客数も増えていくと伺い、農業の後継者として外国人も視野に入れてみるのはどうであろうかと考えた。そのためには多くの人に戸沢村の魅力を伝えなくてはならない。私たち14人が今回考案した特産品が少しでも戸沢村の力になれることを願っている。

工学部 Sさん

フットパスや民宿のお母さんのお話から印象的だったのは、戸沢にはしっかりとした里山・里山文化があること、しかしながら人手不足からその管理が行き届いていないこと。野生動物が山を下り、農作物に被害を及ぼしているようで、クマ用の罾や畑の周りを取り囲む電気鉄線も実際に見せてもらった。さらには他の農家民宿では実際にサルの子が降りてきて、警戒用

の空砲を発する音を聞いたそうである。県資料を参照したところ、里山は人と野生動物の住む奥山の緩衝材の役割を果たしており、里山の荒廃がこうした被害の一因となるという。里山の管理不足は一般に森林の経済的価値の低減による管理者不足に起因する。戸沢村の場合、村全体で人口、特に若い人口が少なく、森林の価値云々以前に人手不足が主な原因だと考えられる。しかし、4日間の食事でもいただいたたくさんのおいしい山菜や、木工クラフトの材料となった木々の枝葉、シロツメクサなどの美しい花々、見るものを圧倒する平根のコナラ、私たちが目にしただけでも、活用すべき資源・訪れたい魅力が戸沢の山にはたくさんあった。これを適切に活用することで里山に人の手が入るようになり、少しでも上記の課題解決に寄与できるのではないかと感じた。また、こうした資源を活用した特産品で戸沢を訪れたり、戸沢で暮らしたりするひとを増やせるのであれば人手不足も解決して一石二鳥である。

今回はそんな山の資源を活用し、ひとを呼ぶ手立ての一つとして蕨や蕎麦を使った特産品の開発を試みた。しかし、中間報告での調査結果やモニター調査でいただいた意見からパッケージの重要性を感じたことから、中身の材料としてはだけでなく、パッケージにも山の資源を活用できるのではないだろうかと考えている。具体的には、多く群生しているシロツメクサのドライフラワーや間伐材を利用したウッドタグなどを考えている。コストとの兼ね合い等検討すべき課題は依然山積しているが、人も含め戸沢の魅力をいろいろな角度から活用できればと思う。

農学部 Uさん

私は班唯一の山形県出身だったが戸沢村には行ったことがなく、どのようなところなのかということもわからなかった。私たちは1回目の1日目戸沢村でフットパスを行った。フットパスというのは山の中を歩くものかと思っていたが、山沿いの舗装された自動車道を歩くものだった。つのかわの里事務局長の安食さんを先頭に約10km歩いた。自分たちが今どこを歩いているのかわからなかったが、説明を受けながら様々な景色を見ることができた。美しい棚田と大きなコナラの木が特に印象に残っている。フットパスの途中寺台わらび農園でわらび採り体験をした。山形県では山菜が有名ということは知っていた。山形のニュースでわらびの農園として紹介されていたのを見たが戸沢村にあるということは知らなかった。短い時間だったが、山菜採りの大変さを学ぶことができた。炎天下の中10km歩きとても疲れたが、先頭の安食さんは最後までペースが落ちなかった。これが戸沢村の人々の強さなのかと感じた。フットパスを通して戸沢村でしか味わうこ

とができないことを体験できたと思う。1日目を終え、民宿ほたるさんに到着した。そこで、今回の課題である戸沢村の新特産物について意見をいただいた。民宿の方が「戸沢村のわらびは他のわらびとは全然違う」とおっしゃっており、わらびを生かした特産物を開発できないかと思った。また、角川地域でしか栽培されていない角川かぶというものがおいしいという話を伺った。韓国ともつながりがあるということで、私たちの班ではわらびキムチとかぶキムチを新特産物として提案することにした。角川かぶは今の時期は栽培していないということで、今回のモニターではわらびキムチを提供することにした。2回目のフィールドラーニングまでに班で集まり、わらびキムチの試作を行った。試作と同時にわらびキムチの魅力が伝わるように班でポスターを製作した。迎えた2回目の2日目道の駅とざわ高麗館でモニターを行った。予想していたよりも多くの人が訪れてくれ、とても嬉しくなった。戸沢村議会議員の安食さんが来てくださり、美味しいという声をいただいた。最後に安食さんが「ぜひ、若い人たちが戸沢村をバズらせてください」とおっしゃった。今の時代はSNSで拡散され、口コミが広がり多くの人に知れ渡る。私が戸沢村に行ったことがなかったのも、戸沢村の魅力がわからず行きたいという気持ちにならなかったからだと思う。新特産物がバズってもらえることが多くの方に訪れてもらえるきっかけになると思う。今回はかぶキムチを作ることができなかったのも、かぶの季節になったら作ってみたい。4つの班の新特産物のモニターは大成功だったと思う。全班の新特産物は戸沢村であるからこそその魅力が詰まったものだった。戸沢村であるからこそということが一番重要だと思った。

今回は戸沢村の新特産物開発という目的で計4日間戸沢村に行ったが、それ以外のことも多く学べた。たまたま同じ授業を取った人と出会い協力し、新特産物を開発したことは最高の時間だった。人と協力して課題を解決していくことはこの授業でしかできないことだと思う。戸沢村と共に作り上げた特産物を商品化してほしいと思う。

農学部 Kさん

今回の戸沢村でのフィールドラーニングは私にとって、とても有意義で終日下も載せあったと確信しています。そう考える要因としてまずは、農学部として農村部の方々が感じている問題について生の声を聴くことができたことだと思います。授業で聞いたことがあった「過疎化」や「後継者不足」のお話も実際に民泊先の奥さんから聞くことができました。さらに田植えに関するお話には、近年の気温上昇によって例年よりもプランターづくりで苦戦されたというお話など、授

業では規模の大きい問題について聞くことが多いが、このような実際に農作業をしている方々が感じる苦労についても知れたことは「農村部の活性化」について興味がある私にとっては、貴重な体験ができたことともうれしく思いました。ここで知れたことをさらに自らで探求していき、今後の活動に生かしていきたいです。

また、今回のプログラムでは、戸沢村の食材を使い特産物を0から考え、実際に提供するというものを経験しました。実際にお客さんに食べてもらうことまでは、なかなかできる経験ではないと思うので、とてもいい経験をさせていただきました。協力していただいた民泊先の奥さんをはじめ、関係者の皆さんに感謝してもしきれません。戸沢村を山歩きすることから始まり、わらび取り体験、そば打ち体験、それに加えて、地域の方々とお話を通して、戸沢村の魅力をたくさん知ることができました。戸沢村に来る前は正直「田舎で何もないイメージ」を持ってしまっていました。しかし、戸沢村を代表する食材の数々に加え、戸沢村には四季折々の景色を楽しむことができる「舟下り」や、冬には「雪回路」など若い人や海外の方なども楽しめるような観光スポットやイベントも多いことも知れました。このように農村部には、その他の地域に知られていないだけで、多くの魅力と可能性にあふれていることを知り、考えを改める機会もいただきました。私自身戸沢村の方々の温かさや、魅力から「また来たい」と何度も活動中も思いました。このような「また来たい」と思わせる力のある戸沢村での学習を通して、他の同じような問題を抱える地域についても関心を持つきっかけになった点も、この活動のおかげだと思っています。

これらの戸沢村のフィールドラーニングで学んだことを活かし、今後の学習に生かしていきたいです。



農学部 Uさん

自分が住んでいる地域を大切に思う気持ちが行動を起こすために1番大切な要素なのだと体験できる活動でした。普段食べない食材を使った食事をする事ができ、私自身の食を豊かにする活動でした。消滅可能性自治体であり若年女性人口の減少率が県内で一番高い戸沢村ですが、山菜が美味しく市内よりも過ごしやすい気候で観光もできるため、また行きたいと感じました。

私個人として高齢化が進み人手不足となった農業はどうしたらいいのかという課題を持っています。戸沢村の現在の農業は、フットパスからは棚田が多く耕作されていない田んぼも少なくないと感じました。また、戸沢村ではリンドウの畑や減反政策のために田んぼだったところでソバを栽培していることがわかりました。民宿のお母さんからは自分の田んぼを60代ぐらいの若い農家さんに頼み小作農を行っているとわかりました。小作農になる理由として高齢化以外には機械が使いこなせないというのがあるそうです。戸沢村の稲作は苗を育てる育苗を行う人も少なくないそうです。

フィールドラーニングに行く前の私は、人手不足解消には外部からボランティアや農業インターンシップを活用し人を呼び、農作業をする合間に現地で作業したくなる魅力を感じてもらうことが大切だと考えていました。戸沢村で4日間活動を行ってみて、ここでもか学べない農業があると感じました。戸沢村でも機械化された農業を行っているのですが、棚田が多いため綺麗な四角形でない田んぼも多く操縦が難しくなります。そのため、機械の操作技術を向上させることができます。また、稲作では育苗を専門業者に頼ることが多い中、戸沢村では育苗を経験することができます。さらに、共同作業が定期的に行われているので言葉での説明だと理解しにくい仲間の大切さを実感できる場所があります。これらのことから、戸沢村での農業の人手不足解消のためには体験型ツアーを提案できると思います。ほかの地域では外国人やさまざまな年代の人などボランティアの人達もさまざまです。ですが、戸沢村が受け入れているボランティアは日本人のため幅が狭まってしまいます。そこで外国人を受け入れようと考えたのですが、言語や文化の違いをどうするかという課題があります。もし、ツアーでボランティアを募った場合は戸沢村の人々と村外の人々との橋渡しの役割の人を配置できるため外部の人々の受け入れハードルが低くなります。

今回のプログラムを行う中で戸沢村の人々はとても親しみやすく、協力的で村民にも魅力がある村でした。農業を新しく始めたいが土地を持っていないという人にとっては良い環境の揃っている村で魅力があると言えるでしょう。

2024 チャレンジプロジェクト活動報告

学士課程基盤教育院 阿部宇洋

2024年度の「フィールドラーニングー共生の森もがみ」の講義が終了し、講義期間中に山形大学で募集された『山形大学学生チャレンジプロジェクト』に、学生有志が集まって活動することになりました。ここではその活動に関して記録として記述しておこうと思います。

今年度は2つのグループが応募を表明し、舟形町と戸沢村の学生が、講義中に行った提案や活動の延長として地域活動を行いたいと申し出ました。彼らは自ら企画書と予算書を作成し、私の立場としては、以前と同様に講義後に地域連携を望む学生を支援しました。学生の活動であるため、活動そのものには直接手や口を出さず、アドバイスする方針でサポートを行いました。

舟形まんぷくプロジェクト（以下、舟プロ） 企画・準備

舟形町のプロジェクトについて報告します。舟形町では例年、講義で地域における農業のあり方を実際の農業体験を通して学んでいます。特に、野菜の定植活動、その後の収穫、そして収穫から得られる価格について、様々な考え方や考察を巡らせ、活動報告会での発表に臨んでいます。今年度の学生は特に「舟形町の野菜」というブランド、ブランディングに関心を持ったようでした。

今回の舟プロに関して特筆すべきは、舟形町のフィールドラーニングに参加した学生のほとんどが、何らかの形で舟プロに継続して参加することになった点です。中心となったのは理学部女子と農学部女子1年生、そして講義に学生サポーターとして参加した理学部男子2年生の計3名でした。彼らは何度も私の研究室を訪れては、自分たちの企画や予算について詰めていきました。その中で話題になったのが、以前大学内で舟形町と連携して実施した学生活動「舟形マルシェ

(2018)」や「舟形フェア (2021)」でした。

「舟形マルシェ (2018)」は山形大学小白川キャンパスの大学祭「八峰祭」での舟形野菜の販売、「舟形フェア (2021)」は厚生会館食堂の協力を得て、舟形野菜を使用したかき揚げ丼（大中小サイズ）の販売でした。この前例を踏まえて協議した結果、実現可能な活動として「舟形フェア (2021)」に倣い、厚生会館食堂（学食）での舟形野菜を使った食材の提供やメニュー提案を行うことになりました。

舟形町を受講した学生は以前から、前期の講義を終えてからも継続的に関わることが多く、実際に農業を通して様々な学びを得ているようでした。教員の活動としては、少し突き放したような形ではありますが、学生の自主性や計画性をサポートし、活動報告を逐一受ける形で彼らを見守ることに徹しました。学生が地域や社会と関わる時、教員の立場は非常に不安定になります。しかし、教員が活動そのものに介入しないことによって、学生たちは自分自身が地域とどう関わるのか、悩み苦しむことになります。それでも、フィールドラーニングからの継続性をもって地域と関係を持つことによって、地域ごと、人ごとの関わりの作法を学ぶことができます。

コミュニケーションと関係性

現在はLINEやInstagramといったSNSを中心とした安易なコミュニケーションが取れる状況にあるものの、学生同士や学生と社会がつながる上で、地域の大人とどう関わればいいのか苦慮し、悩むこともあります。

形式的ではありますが、礼儀作法、例えばメールの文面の送り方や、何を聞いて何を教えてもらうかを相談するといった人間関係の構築が、こうしたプログラムでは非常に重要です。同時に、関係性が近すぎるとプロジェクト自体が責任の所在が曖昧になり、なあなあになってしまうことも考えられます。そのため、適切な関係性をしっかりと保ちつつ、学生たちは一つのプロジェクトを遂行しなければなりません。

舟形町の場合は、「舟形マルシェ」や「舟形フ

エア」などの前例があるため、舟形町の人々も学生の動きや考えていること、イメージしていることを理解しやすい環境にありました。そのため、学生の「何かやりたい」という提案も快く受け入れてくれています。

予算と運営の課題

舟形プロジェクトはこのようにスタートしましたが、大学の仕組みとして、このチャレンジプロジェクトはいわゆる公募制になっています。そのため、実際に提出した予算から減額されて採択されたり、落選したりすることもあり得ます。学生たちは、採択されなかった場合にどうするかということも考えなければなりません。今回も応募総数が多かったため、結果として減額されて採択されました。減額されると、本来の予算でプロジェクトを組んでいた状況で、どこを削るかという問題になり、削る前提で予算を作らざるを得なくなることが定着してしまいます。そうすると、プロジェクトそのものの質が悪くなるのは目に見えています。

しかし、彼らは予算を減額補助されたにもかかわらず、減額すべき費用を学生が負担することで解消を図りました。学生自身、舟プロにかける思いは非常に強かった印象を受けました。この舟プロは9月からスタートし、数回の農作業ボランティアを経て、彼らが農業に携わった野菜を厚生会館食堂で何らかのメニューにしてもらうという流れでした。

プロジェクトの実施と成果

舟プロでは、まず9月、10月、11月と農作業ボランティアを実施しました。その際は地域の方に大変お世話になったようでした。そして、そのボランティアで得た知見などを活用し、厚生会館食堂で提案するメニューを考案しました。彼らが提案したメニューは、かなり舟形町から提供される野菜に依存するもので、何の野菜を提供してもらえるかが大きな課題でした。

舟形町から提供される野菜が確定し、その野菜

を使って何ができるか、何が作れるかを学生たちが考えた結果、「かき揚げ丼」、「あんかけ丼」、そして「あんかけ焼きそば」といった野菜中心のメニューになりました。そして、このメニューを厚生会館食堂に提案し、提供するメニューを決定しました。

舟形町の野菜を使って何ができるかを考え、メニューが出そろいました。これが果たして美味しいのか、提供できるものなのかも課題でした。そのため彼らは1月に試食会を開催しました。残念ながら講義と重なる学生が多かったため、学生は1人のみの参加となり、教員が介在してしまう状況になりました。教員はサポートするという立場ではありますが、ここは学生たちに責任を持って活動してほしいと思う唯一のところになりました。

試食会には多くの方々に集まっていただきました。山形大学学長、担当教員、もがみ担当事務、基盤担当事務、チャレンジプロジェクト担当事務、そして舟形町教育委員会の方々に参加していただくことになりました。広く意見をもらった結果、舟形野菜を使用したメニューは非常に美味しく、好評を得て販売にこぎつけることができました。

また、ここで彼らがなぜ舟形野菜を学生に提供しようとしていたのかという目的が明らかになります。彼らは、舟形町の野菜があまり認知されていない、もしくは舟形町そのものが学生に対して認知されていないのではないかと仮説を立て、認知度を高めるために舟形野菜を提供するという流れになっていたのです。その前提を受けて、試食会参加者からは、舟形町をアピールするチラシの作成の提案を受け、舟プロのメニュー販売時に注文者に手渡しすることとなりました。

アンケートによる分析の試み

実際に舟形野菜を使った定食を出すにあたって、成果報告をどのように実施するかも議題に上がりました。その結果、アンケートでまとめるこ

とになりました。ただし、提供できる定食の絶対数は、舟形野菜の提供量に比例するため、ある程度の数しか用意できない限定食メニューでした。そうした中で、どうやって分析するかが課題になりました。

販売とその結果

試食会を経て、実際に販売されたのは1月20日～22日の3日間でした。これも大学の仕組みの難しいところで、冬休みに入ってしまうと学生がいなくなるため、12月後半は学食での提供があまりできません。仮に提供したとしても、食べる人が非常に偏ってしまいます。彼らの目的とする舟形野菜を広く知ってもらいたいという目標と反するため、その後1月中旬は大学共通テストが実施される関係で、大学内が慌ただしく、実施が難しい。そのため、試験期間中の1月末の開催に落ち着きました。ただし、1月末も試験期間であることから、学食利用は試験がある学生に限られてしまいます。それでも冬休みよりは利用する人がいるのではないかとということで、大学で勉強している学生を対象とする流れになりました。

そうした中で、非常に嬉しかったのが、4年前に舟形フェアをやった理学部男子学生が真っ先に集まってきてくれたことです。彼は「舟形フェア(2021)」を非常に頑張っていた一人なのですが、その学生が「まさかもう一度、舟形フェアのメニューが食べられるとは思わなかった」と述べ、一番に学食に並んで食べ、三日間それを続けてくれました。一番のファンになってくれているような状況でした。

舟形野菜のメニューは前回もそうでしたが、あつという間に完売してしまいます。そして舟プロのメニューが提供された日には、舟プロのメニューだけが売ってしまう事態となりました。他の定食があまり売れなくなるほどで、今年は舟プロのメニューを一時販売停止として、他の通常定食の販売を優先させるなど、厚生会館食堂の運営に工夫がありました。それくらい舟プロのメニューは人気があり、大学生には需要があるものでした。

こうした需要を得て、舟プロのメニューは完売。以下の実績をあげました。

1日目(中華丼)は1時間で完売。販売数は49食。

2日目(かき揚げ丼)は50分で完売。販売数は48食。

3日目(あんかけ焼きそば)は35分で完売。販売数は30食。

急遽、足りなくなった分を他の地域の食材で補うといった、食材の産地が変わってしまうような売れすぎによるトラブルも出ました。(食材が変更になった部分に関しては、成果やアンケートから除外しています。)この様子を見ても、学内では関心度が高いプロジェクトだったことがわかります。

しかしながら、アンケートはあまり振るいませんでした。合計で127の販売数でしたが、アンケートの回収は57件(うち有効回答は54件)で42.5%でした。回収を想定していた人数よりも減ってしまったのです。舟プロメンバーは「舟形町が知られていない、舟形野菜の認知度が低い」という前提で動いていたものの、アンケートを取ってみると、実は舟形町は想定以上に山形大学生には知られていました。(複数回答可:行ったことがある/19、知っている/23、聞いたことがある/4、知らない/12、その他/2)これは驚くべき点でした。そのため、今回のプロジェクトは、仮定の設定が甘かった点はあったものの、より舟形町を知ってもらおうきっかけとなりました。

戸沢村「そばあと」プロジェクト(以下「そばあと」)

企画・準備

次に戸沢村の「そばあと」プロジェクトに移ります。これはフィールドラーニングのプログラムで、戸沢村角川地区の特産品を使って加工品を作ろうというのが主な目的でした。民宿ごとに分かれて様々な企画を出し、その中で出てきたのが、特産のそばとジェラートを合わせた「そばあと」という提案でした。実際にそばジェラートは販売

もされており一般的ですが、それを戸沢村で実現し販売したいというのが、彼女たちのチャレンジでした。

このプロジェクトに参加した学生は、戸沢村のプログラムを履修した学生のうち、農学部女子、工学部女子、医学部女子の3名でした。このプロジェクトも基本は、教員の立場としては学生の活動を、逐次報告を受けアドバイスをするという形で実施しました。彼女たちがまず取り組んだのは、ジェラートをどう作るかという点でした。

それに関して、「山形大学工学部の城戸淳二教授が立ち上げた株式会社 VEGEA（ベジア）という会社があり、ベジアが作っているジェラートは道の駅米沢で人気がある。まずはそこに相談してみてもどうか」という話をしました。すると彼女たちはすぐに企業へアポイントを取り、話を聞き、どれくらいで作れるかを相談したようでした。結果として、ジェラートの見積もりができ、それを予算に組み込みチャレンジプロジェクトに応募することになりました。彼女たちのプロジェクトも減額のうえ助成されることになりました。

助成後早速活動を開始した彼女たちでしたが、大きな落とし穴がありました。それは、ジェラートを作ることを想定していたため、「成分調査」が抜け落ちてしまい、これが後に大きな出費、赤字につながっていくこととなります。

彼女たちは実際に米沢のベジアの会社、そして戸沢村に行って材料となる製品を仕入れ、実物を見たり、実物を使ったりすることに注力しました。この点では、彼女たちの行動力は非常に優れていると言わざるを得ません。

舟プロは何かあったら必ず報告をするという、こまめな報告をするタイプでした。一方で戸沢村のプロジェクトの場合は、セクションごと、つまり大きな段落があったとすれば、1段落ごとに報告するといった事後報告型でした。そのため、今どうなっているのかという問い合わせをしなければなかなか自発的に報告してくれないという特徴がありました。ただし、知らせがないのは良い知らせということもあるので、特に報告の義務も設

けていませんでした。その点では、どちらのプロジェクトも自分たちのプロジェクトに合わせた報告相談があったと考えています。

さて、その「そばあと」の彼女たちですが、思わぬ出費が成分分析のお金でした。ジェラートを作るにあたって、販売するにあたっては、様々な企画や法的な問題をクリアしていかなければなりません。私自身はそれも含んで見積もりだと思っていたのが、成分調査は外部委託になるため別であったことが判明しました。そのため、少し余計にかかることになり、予算の組み直しが必要になりました。本来想定していたジェラートの作成量をぐっと減らし、そこに当てるしかなくなりました。こうした失敗もありました。

そばあとの完成と評価

彼女たちが作ったのは「そばあと」というジェラートです。さて、読者の皆さんは辛いジェラートを食べたことがあるでしょうか？

とても辛いジェラートです。もちろん辛いジェラートそのものは売っていますが、彼女たちも外部から私から評価を得るまでは美味しいとっていたようです。これは味覚の違い、そして世代の違いかもしれませんが、驚きを隠せませんでした。

私が「そばあと」を実食した感想は「とても面白い」でした。

これはすごく不思議な味で、食べた瞬間は蕎麦の芳醇な香りや食感、ゆずの香りがするジェラートを食べている感覚になります。まず、甘い蕎麦ジェラート、そしてゆずが香ってくる。数秒遅れて唐辛子の辛さが直接伝わってきます。この甘みと辛みが共に訪れるのですが、最終的には辛さが残り、後味も辛い、辛いもの好きにはたまらないジェラートになっていました。「先生、めっちゃ美味しくないですか？（美味しいですよの同意表現）」と無邪気にコメントを求められたものの、商品として売れるのかどうか頭をよぎりました。

彼女たちの報告は、セクション毎の報告であったため、製品化まえに教員への相談はありません

でした。出来上がってからの試食だったので、私が口を挟むこともできなかつたのです。それが製品化されていたわけです。

ただ、このジェラートは私としては大成功だと思いました。というのも、ジェラートそのもので食べると非常に辛くて子どもや辛味が苦手な人は食べられない。そして後を引く辛さになっています。そのため、辛いものが苦手な人だと失敗したなと思ってしまうようなものです。一方で、このジェラートを調味料として使う可能性もあると感じたのです。ガレットに乗せて食べたり、ちょっとした料理の付け合わせにクリーム的に使ったり、溶かした状態でソースとして使う（冷たいソース）。野菜とも相性が良いのではないかなと思うような可能性のあるジェラートとして成立したと感じました。彼女たちは特産物を、ジェラートとして食べれるようにすることが目的でしたが、一般的には失敗ともとられるような結果から、転用を含めた面白い発想、面白い商品が出来上がる可能性があることを、今回は身をもって体験させてもらいました。

「そばあと」運営と学び

山形大学の1年生は全体的に講義数が多く、特に工学部や医学部、農学部は2年次への進学の際に全てキャンパス移動が伴います。そのため、しっかりと勉強して各キャンパスに移れる単位を取得しなければなりません。そうした条件がある中で、3人が揃ってプロジェクトに取り組むのはなかなか時間が取れなかつたようでした。分担しながら行ったため、進行が少しずつ遅れて、販売そのものが4月に伸びてしまいました。この点で言うと、1年生がこうしたプロジェクト活動をするに関しては、学問との両立はすごく苦労や負担になっているということが分かりました。ただ、負担になっているものの、その達成感是非常にあつたようで、「やらなきゃよかった」という声は聞いていません。「やってよかった。すごい良い経験でした」という声を中心でした。

このジェラートは限定的に数量生産したものです。その予算は若干の減額と、見積もりになかつた「成分調査」の上乗せ、原価などの他、様々な調整費や作成費を上乗せしていった結果、原価として1個1,000円を超えるジェラートになってしまいました。回収をするにも、1,000円のジェラートは大学では売れません。大学生の販路は、基本的に生協などの、大学に身近な小売店の協力をいただかなければなりません。しかし、大学生に「売れる」アイスの販売価格は100円～200円あたりであり、300円になると、有名アイスメーカーの高級アイスを買うことが出来てしまうということもあり、原価1,000円超えではあるものの、250円での販売となりました。

つまり大赤字を出してしまつたわけです。これも数量が増え、需要があればある程度回収できたものだと思いますが、実際には数量限定生産であることが理由で赤字になっています。チャレンジプロジェクトの助成でなんとか精算はできたものの、生産から販売にかけての取り組みは課題が多い結果になりました。しかし、販売が始まってすぐに工学部分の「そばあと」が完売するなど売れ行きは好調で間違いなく需要があることは分かりました。

全体を通しての成果

舟形町と戸沢村、両方のプロジェクトを遂行してきましたが、私がアドバイスとして介在する一つの条件として、学生主体型授業「合同成果発表コンテスト」という、山形大学が主催する全国の大学生が主体的な授業や学修の結果を発表する場への参加を条件としていました。これは山形大学で開催され、1年生から4年生までの様々な大学の学生が参加します。1班10分間発表してもらい、その発表をもとに各大学がどのように講義をしているのか、学生がどう活動しているのかを発表スキルをみて参加教員と学生が審査するコンテストです。

このもがみの2プロジェクトは「フィールドラーニングー共生の森もがみ」の講義の延長戦とし

てエントリーし、1位は逃したものの、2位と3位を取ることができました。

さて、ここは若干の私の反省ですが、このコンテストには教員の票と学生の票があります。実は参加教員の票よりも、学生の票が多くなっていて、学生にどう響くか、学生が面白いと思える発表だったかという判断になりやすかったのです。その点を失念していました。

もがみの発表は奇をてらわず、質実剛健な内容で、どちらかというと学術発表に近い形で指導しました。結果、教員票の獲得は断トツでした。一方で学生の票は、内容もさることながら、発表そのものをユーモアや伏線を張り、その伏線回収によって学生の関心を集めた札幌大学に集中することになりました。また、本来もがみ1チームとして票を集中できたはずが、2チームを別チームとしてエントリーさせた結果、ここで票を分けてしまったという私の采配ミスもありました。しかし、もがみの2チームには本当に良い発表をしていただきました。

その後、懇親会では、札幌大学の学生から「1年生でこんなことができるのか」「ギャルでもやることがエグい（発表学生は私の感覚ではギャルではないのですが、当該学生はギャルという表現でした。また、ここでのエグいは、すごい活動をしているという意味でした。）」「ちょっと俺たちも頑張らなくちゃいけない」といった感想と、他大学の学生のやる気や地域活動へのモチベーションにつながっていることを交流の中で知ることができました。

今年度はこのように地域、大学、教員個人、事務員、様々な方々が携わってプロジェクトが始まりましたが、どちらも成果品があり、彼らの学びにもつながり、非常に良いプロジェクトになったのではないかと考えています。

一方で、様々な地域の方々や大学事務の方々に、ありとあらゆるご迷惑をおかけしたのではないかと懸念しています。見方や立場が違えば、失敗の線引きや迷惑の線引きも変わるものです。大学生が考える迷惑と、教員が考える迷惑、地域

が考える迷惑は三者三様であり、この微妙なズレが互いにストレスを生む原因にもなります。このような経験を踏まえ、今後は対話を重ねながら、地域と大学が共に課題を認識し、連携を深めていくことが重要だと感じています。

『我が国の「知の総和」向上の未来像～高等教育システムの再構築～（答申）』を踏まえてこれからの地域連携型教育を考える」

学士課程基盤教育院 橋爪孝夫

2025（令和7）年2月21日付にて中央教育審議会より「我が国の「知の総和」向上の未来像～高等教育システムの再構築～（答申）」が出された。報道の中では「大学統廃合答申」という呼称も使われているように、少子化の時代を受けてこれまでの答申では見られなかったような、高等教育機関の縮小・撤退にまで踏み込んで言及しているところが特徴となっている。

そのような答申を、今後の大学と地域が連携した教育プログラムについて縮小・撤退とは別の方向性、展望については何が示されているかを読み解いてみたい。

1. 持続性への強い危機感と原理原則

この答申の「はじめに」の部分では「高等教育の規模が縮小するという事は、特に地方においては、質の高い高等教育へのアクセスが確保されない事態も想定される。これらへの対応は待ったなしとも言えるべき状況にある。」として強い危機意識が呈されている。憲法第3条に謳われる教育の機会均等という原則に鑑みて、日本の一部地域（地方）において大学教育等が提供されなくなるような事態を想定しており、これまでの答申に比べても踏み込んだ表現となっている。また「（2）目指すべき未来像」においても「全体としての持続的な成長や、地方がそれぞれの特性に応じて発展していくことが重要である。」という記述が見られ、地方だから大学教育が提供されないことは仕方がない、というような教育の機会均等原則を諦める方向の記載は全く見られない。中教審が大学と地域教育の関係について原理原則を確認していることは重要と考えられる。

2. 教育目的・人材育成像

では、限られたリソースの中で、例えば教育目的を今までよりも限られたものとする事で、教育内容・プログラムなどについてコストダウンを図るような動きはあるのだろうか。「（3）育成する人材像」を見てみると、骨子は以下のようになっている。「AIに代替されるのではなく、AIをはじめとしたデジタル等の最先端の技術も使いこなし、持続可能な社会の担い手や創り手として真に人が果たすべきことを果たせる力といえる。これは、「主体性」、「リーダーシップ」、「創造力」、「課題設定・解決能力」、「論理的思考力」、「表現力」、「集中力・粘り強さ」、「コミュニケーション能力」等の資質・能力と言い換えることもでき、一人一人がそれぞれの個性に応じて身に付け、伸ばすことで、その能力を発揮していくことが期待される。また、これらの基盤として、社会の発展に貢献する志や、人間力も求められる。（中略）このような資質・能力を一人一人が身に付けながら、社会・生活基盤を支える人材、地域の成長・発展をけん引する人材、世界最先端の分野やグローバルな競争環境で活躍する人材などの厚みのある多様な人材を育成していくことが求められる。」これまでの答申に見られたような人材育成の目標諸要素はカバーしつつ、更にAI時代の教育内容をもカバーすることに言及されており、目指すべきところはむしろ高くなったと認められる。

3. 実現への具体的施策

地方の高等教育を取り巻く状況が厳しくなる中で、更に高い目標を掲げるとなると実現性はどのようなのだろうか。具体的な方途は考えられているのか。答申では「（4）高等教育が目指す姿」の中で「少子化が進行する中で、地域における教育機会の確保や高等教育機関間の連携等を通じた高等教育の機能強化が最も重要となる。特に、地方の高等教育機関が担う多面的な役割を考慮し、地域との連携を強化することが求められている。」と述べ、これらの実現のため「高等教育の機能強化」。更に具体的には「多面的な役割を」担う「地方の高等教育機関」において「地域との連携を強化する」こと

が求められている、としている。

金銭・人材に限られている中で機能強化をどう進めるのか、無理難題にも思えるが、答申としては今まで以上に高い役割を遂行することを求める前提で、「(6) 重視すべき観点」中では以下のような記述をしている。「高等教育機関が地方創生を推進していくためには、地域の発展に向けて、地方公共団体、産業界、金融機関等、地域の様々なステークホルダーと一体となって取組を進めていくとともに国がそれを支援することが必要不可欠である。」まずここで「国の支援」について「必要不可欠である」と明言し、次に「地域のステークホルダーも、域内を中心とした高等教育機関と一体となって地方創生の取組を進めることは重要である。そのためには、地域の人材育成や課題解決の在り方を議論することが第一歩となる。その際、地域の高等教育機関のみならず、地方公共団体、産業界、金融機関等、様々なステークホルダーが関与し、協働することが重要である。特に、地域の将来像について議論をする際には、地方公共団体の役割は欠くことができない。現に、地方公共団体では、高等教育に関する行政は国の役割である中で、多くの都道府県において高等教育機関との連携業務を行っている部署が設置されているが、今後、地域の将来像について議論をする際には、高等教育機関との連携について地方公共団体が更に役割を果たすことが期待される。」として、名指しで地方公共団体に対して「役割を果たす」ことを示唆している。

これらは、財政の裏付けを持たせるような実現性の高い文言とは言い難いが、中教審答申として或る方向性を示したと評価は出来るだろう。

おわりに

中教審は諮問を受けて答申を出し、これを具体的な施策に落とし込むのはこれからの行政の仕事ではあるが、その方向性としては「地方において持続可能な地域連携型教育プログラムはこれからも重要性が高い」「質を落とさず、どこか今までもよりも質の高いプログラムを実施することで、持続可能とするだけのコストをかける価値を創出す

るべき」という二つが挙げられていると読み取れる。

或いは答申のハイライト、以下のような記述を取り上げてみる。「人材が地域に定着するためには、地域に対する当事者意識を醸成する機会が重要である。このため、産業界や地方公共団体は自らを教育研究のフィールドとして開放するとともに、その地域の産業基盤の維持発展のための人材育成に対する積極的な投資も期待される。」このようなプログラムの実現には、地域と大学のより密接な連携は不可欠と言えるだろう。

地域と協働で取り組む授業改善に向けて

地域教育文化学部 菊田尚人

「フィールドラーニングー共生の森もがみー」(以下、FL もがみ)において、地域と大学とが授業について意見交換できる場は重要である。地域系科目において地域の関係者は授業改善のための重要なステイクホルダーとなり得るからである。こうした場があることで、地域と大学とが協働して授業を作り上げているという意識を双方の関係者が持つこともできる。

地域の関係者によって語られる授業評価の特徴を明らかにする研究も進められている(菊田他、印刷中)。この研究では、地域の関係者による「語り」を整理し、彼らが地域での学修をどう評価しているのかについて明らかにしている。加えて、地域の関係者による授業評価の観点と大学が設定する科目の目的とを比較することで、どのような授業改善が可能かについても検討している。

それでは、地域との意見交換の場を授業の改善によりよくつなげる上で、地域と大学の関係者の双方が意識すべきことは何であろうか。以下で二つ紹介したい。

一つ目は、協働して授業改善に取り組んでいるということに自覚的になることである。改善に向けた課題を協議する場では、相手になかなか言いにくいことを話す必要に迫られる場合がある。そうした時に、発言を単なる非難ではなく改善に向けた批判として捉えようとする姿勢が重要となる。常日頃から良好な関係性を築いておくことを前提としつつ、双方が評価リテラシーを高めておく必要があるといえる。

二つ目は、個別の評価をどこまで一般化できるかを考えることである。地域と大学のそれぞれの関係者によって語られる内容は、個別の事情や個人としての価値観を反映したものになることがある。こうした中で、授業改善にどの内容を反映するかを選択する必要がある。双方の関係者の思いも大切にしながら、授業改善に生かす事柄を見極

めようとする姿勢が求められるといえる。

地域と大学とが協働で授業改善に向かう際に求められる意識というものは一朝一夕に作り上げられるものではない。地域と大学とが対話を重ねながら、よりよい授業評価のコミュニティを形成していくことが重要である。

【文献】

菊田尚人・橋爪孝夫・阿部宇洋(印刷中)「地域の関係者による授業評価の試みに関する一考察ー地域での学修に対する関係者の「語り」の分析を通してー」『地域実践研究』

山形大学エリアキャンパスもがみ運営会議委員名簿

令和7年3月31日現在

山形大学

エリアキャンパスもがみキャンパス長	大 西 彰 正	小白川キャンパス長
人文社会科学部	松 本 邦 彦	教 授
地域教育文化学部(教育実践研究科)	江 間 史 明	教 授
理学部	栗 山 恭 直	教 授
医学部	後 藤 薫	教 授
工学部	木 俣 光 正	教 授
農学部	網 干 貴 子	准 教 授
学士課程基盤教育院	阿 部 宇 洋	講 師
エンロールメント・マネジメント部	菊 地 吉 見	教務課長

最上地域

新庄市教育委員会	津 田 浩	教育長
金山町教育委員会	須 藤 信 一	教育長
最上町教育委員会	笠 原 正 三	教育長
舟形町教育委員会	伊 藤 幸 一	教育長
真室川町教育委員会	門 脇 昭	教育長
大蔵村教育委員会	有 馬 眞 裕	教育長
鮭川村教育委員会	姉 崎 秀 悦	教育長
戸沢村教育委員会	市 川 重 保	教育長
高等学校長会	石 山 宣 浩	代表(新庄北高等学校長)
最上地方町村会	大 友 弘 克	事務局長
NPO法人田舎体験塾つのかわの里	安 食 輝 敏	代表

オブザーバー

山形県最上総合支庁総務課連携支援室長	高 橋 光一郎
山形県最上総合支庁総務課連携支援室	佐 藤 り ん

エリアキャンパスもがみ事務局

(大学事務局)

学士課程基盤教育院	千 代 勝 美
エンロールメント・マネジメント部	沼 澤 利 光
同	三 澤 美和子
同	國 分 聡 子
同	須 藤 賢一郎
同	齋 藤 絵 里

(最上事務局)

事務局長	岸 隆 一
事務局員	澤 野 ひろみ

エリアキャンパスもがみ研究年報2024

エリアキャンパスもがみ 令和6年度 事業報告書

令和7年(2025年)3月31日

編集：山形大学エリアキャンパスもがみ



エリアキャンパスもがみ



事務局 教育企画・教学マネジメント部門 (エンロールメント・マネジメント部教務課教育企画担当)
TEL : 023-628-4720 FAX : 023-628-4836
〒990-8560 山形市小白川町 1-4-12 E-mail yu-syugaku@jm.kj.yamagata-u.ac.jp